

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第110集

立石・宮の上遺跡

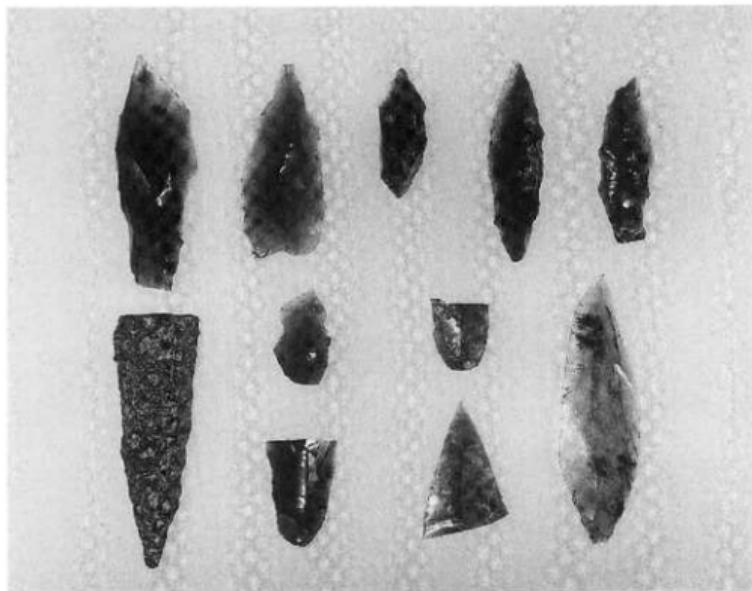
1996. 3

山梨県教育委員会

立石・宮の上遺跡

1996. 3

山梨県教育委員会



立石・宮の上旧石器時代・ナイフ形石器



立石第29号住居跡出土・木鳥式土器

序

この報告書は山梨県の代表的な国指定史跡である銚子塚古墳・丸山塚古墳を始めとし、縄文・弥生・古墳時代の遺跡を多数包蔵する「甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園」に進入するための道路拡幅工事に伴って発掘調査した結果をまとめたものであります。調査は1983年に行われ、報告書年次刊行計画に沿って発刊いたしました。

この両遺跡は山梨県の三大遺跡群地域の一つである曾根丘陵上にあり、その丘陵の一支部の鞍部に位置し、東山遺跡群を形成しております。

両遺跡からは後期旧石器時代の石器や、本県では希有の縄文時代前期前半の住居址7基を、また弥生時代終末から古墳時代初頭までの住居址群や方形周溝墓9基等を検出し、多数の遺物が出土しました。特に当遺跡の方形周溝墓群は銚子塚古墳を築造した権力構造と関連して、隣接する上の平遺跡や中道町が発掘した宮の上遺跡、あるいは東山北遺跡などの方形周溝墓群とともに大変興味深いものがあります。

上の平方形周溝墓群や銚子塚古墳・丸山塚古墳等はすでに整備され、公園として供用が開始されております。

末筆ながら発掘および整理報告書作成にたずさわってくださった方々、御協力いただいた中道町教育委員会を始めとする多くの機関に厚くお礼申し上げる次第であります。

1996年3月28日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

1. 本書は、山梨県風土記の丘公園建設に伴う遺跡確認調査及び中道町・町道上の平線に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山梨県教育委員会文化課が調査主体となって実施した。
3. 発掘調査は昭和55年6月15日から12月30日、昭和56年6月15日から12月30日にわたって実施し、調査現場は、小林広和、中山誠二、里村晃一が担当した。
4. 写真撮影は、里村晃一が担当した。
5. 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵センターに保管してある。
6. 出土品の整理には以下の者があたった。

河上幸二、内藤 章、犬塚一芳、山之内龍雄、富田政美、山本裕子、望月裕子、小林智夫、石原和人、辻村明宣、内藤和久、鈴木良弥、中西 浩、川住みち子、飯沼美佐江、保坂岳志、土屋明美、宮川 東、内藤由紀子、伊東順子
7. 遺構、遺物の実測、トレースは菱山かつよ、保坂岳志、川住みち子、大沼美佐江、玄間千鶴、内藤由紀子、伊東順子がおこなった。
8. 本書の編集・執筆は、小林広和、里村晃一がおこなった。
9. スケールの単位は遺構はメートル、遺物はセンチメートルである。

立石・宮の上遺跡正誤表

ページ	行	誤	正
12	10	石材4	→ 石材A
12	13	石材4	→ 石材A
12	18	石材4	→ 石材A
16	5	A T 降灰前の	→ A T 降灰後の
21	8	第25号住居址(第図)	→ 第25号住居址(第13図)
61	34	(第図10~15)	→ (第64図10~15)
63	5	(第図16~22)	→ (第64図16~22)
65	7	(第図23~26)	→ (第64図23~26)
66	11	(第図1~9)	→ (第65図1~9)
68	7	(第図17~21)	→ (第60図17~21)
69	1	(第図14~20)	→ (第61図14~20)
89	5	(第図2~10)	→ (第74図2~10)
112	18	遺構は疊、疊3号を伴わない	→ 遺構は疊を伴わない
113	12	第7号方形周溝墓の存在	→ 第9号方形周溝墓の存在
113	19	特に第7号方形周溝墓	→ 特に第9号方形周溝墓

目 次

序

凡例

序章	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 遺跡の位置と環境・周辺遺跡	1
 第Ⅰ章 旧石器時代（立石・宮の上遺跡）	7
第1節 遺物の出土層位と文化層	7
第2節 遺構と出土遺物	8
第Ⅰ文化層	8
第Ⅱ文化層	8
第Ⅲ文化層	11
小結	16
 第Ⅱ章 立石遺跡の調査	19
第1節 縄文時代前期の概観	19
遺構と出土遺物	19
小結	45
第2節 縄文中期の遺構と遺物	47
第3節 弥生時代の遺構と遺物	51
第4節 古墳時代の遺構と遺物	66
第5節 歴史時代の遺構と遺物	74
 第Ⅲ章 宮の上遺跡の調査	82
第1節 弥生時代の遺構と遺物	82
第2節 古墳時代の遺構と遺物	103
小結	106
総括	112

挿図目次

- | | | | |
|------|----------------------|------|-----------------------------|
| 第1図 | 立石・宮の上遺跡位置図 | 第46図 | 立石第21号住居址 |
| 第2図 | 立石・宮の上遺跡遺構配置図(1) | 第47図 | 立石第22号住居址 |
| 第3図 | 立石・宮の上遺跡遺構配置図(2) | 第48図 | 立石第23号住居址 |
| 第4図 | 宮の上遺跡遺構配置図 | 第49図 | 立石第24号住居址 |
| 第5図 | 基本層序 | 第50図 | 立石第31号住居址 |
| 第6図 | 第1ブロック(遺物分布状況) | 第51図 | 立石第9号竪穴遺構 |
| 第7図 | 第2ブロック(遺物分布状況) | 第52図 | 立石第10号住居址 |
| 第8図 | 出土遺物(第Ⅲ文化層・第Ⅱ文化層) | 第53図 | 立石第12号住居址 |
| 第9図 | 出土遺物(第Ⅱ文化層) | 第54図 | 立石第13号住居址 |
| 第10図 | 出土遺物(第Ⅱ文化層・第Ⅰ文化層) | 第55図 | 立石第14号住居址 |
| 第11図 | 立石第16号住居址 | 第56図 | 立石第18号住居址 |
| 第12図 | 立石第17号住居址 | 第57図 | 立石第19号住居址 |
| 第13図 | 立石第25号住居址 | 第58図 | 立石第8号住居址 |
| 第14図 | 立石第26号住居址 | 第59図 | 立石第1・3・4・5号住居址出土遺物 |
| 第15図 | 立石第27号住居址 | 第60図 | 立石第7・8・9・10号住居址出土遺物 |
| 第16図 | 立石第28号住居址 | 第61図 | 立石第10・11・12・13号住居址出土遺物 |
| 第17図 | 立石第29号住居址 | 第62図 | 立石第14・15・17・18号住居址出土遺物 |
| 第18図 | 立石第30号住居址 | 第63図 | 立石第19・20号住居址出土遺物 |
| 第19図 | 立石第16号住居址出土遺物 | 第64図 | 立石第21・22・23・24号住居址出土遺物 |
| 第20図 | 立石第17号住居址出土遺物 | 第65図 | 立石第31号住居址出土遺物 |
| 第21図 | 立石第25号住居址出土遺物 | 第66図 | 宮の上第1号住居址 |
| 第22図 | 立石第27号住居址出土遺物 | 第67図 | 宮の上第2号住居址 |
| 第23図 | 立石第26・27号住居址出土遺物 | 第68図 | 宮の上第3号住居址 |
| 第24図 | 立石第27号住居址出土遺物 | 第69図 | 宮の上第4号住居址 |
| 第25図 | 立石第28・29号住居址出土遺物 | 第70図 | 宮の上第5号住居址 |
| 第26図 | 立石第29号住居址出土遺物 | 第71図 | 宮の上第6・8号住居址 |
| 第27図 | 立石縄文前期出土石器(1) | 第72図 | 宮の上第7号住居址 |
| 第28図 | 立石縄文前期出土石器(2) | 第73図 | 宮の上第1・2・4号住居址出土遺物 |
| 第29図 | 立石縄文前期出土石器(3) | 第74図 | 宮の上第5・6号住居址出土遺物 |
| 第30図 | 立石縄文前期出土石器(4) | 第75図 | 宮の上第5号住居址出土遺物 |
| 第31図 | 立石縄文前期出土石器(5) | 第76図 | 宮の上第1号方形周溝墓及び出土遺物 |
| 第32図 | 立石縄文前期出土石器(6) | 第77図 | 宮の上第3号方形周溝墓 |
| 第33図 | 立石縄文中期第32号住居址 | 第78図 | 宮の上第4号方形周溝墓 |
| 第34図 | 立石縄文中期第32号住居址内土壤 | 第79図 | 宮の上第5号方形周溝墓 |
| 第35図 | 立石縄文中期第32号住居址出土遺物(1) | 第80図 | 宮の上第6号方形周溝墓 |
| 第36図 | 立石縄文中期第32号住居址出土遺物(2) | 第81図 | 宮の上第7号方形周溝墓 |
| 第37図 | 立石第1号住居址 | 第82図 | 宮の上第8号方形周溝墓 |
| 第38図 | 立石第2号住居址 | 第83図 | 宮の上第2号方形周溝墓 |
| 第39図 | 立石第3号住居址 | 第84図 | 宮の上第9号方形周溝墓 |
| 第40図 | 立石第4号住居址 | 第85図 | 宮の上第2・3号方形周溝墓出土遺物 |
| 第41図 | 立石第5号住居址 | 第86図 | 宮の上第3号方形周溝墓出土遺物 |
| 第42図 | 立石第7号住居址 | 第87図 | 宮の上第3号方形周溝墓出土遺物 |
| 第43図 | 立石第11号住居址 | 第88図 | 宮の上第4・5・6・7・8号
方形周溝墓出土遺物 |
| 第44図 | 立石第15号住居址 | | |
| 第45図 | 立石第20号住居址 | 第89図 | 宮の上第9号方形周溝墓出土遺物 |

図版目次

- 図版1 立石・宮の上遺跡標準土層
(宮の上地区)
- 図版2 立石第1ブロック出土状況
- 図版3 立石第2ブロック出土状況
- 図版4 立石第3ブロック・第1ブロック
出土状況
- 図版5 立石・宮の上出土遺物
- 図版6 立石・宮の上出土遺物
- 図版7 立石第16・17号住居址
- 図版8 立石第25号住居址
- 図版9 立石第26号住居址
- 図版10 立石第27・28・29号住居址
- 図版11 立石第27号住居址
- 図版12 立石第27・29号住居址
- 図版13 立石第30号住居址
- 図版14 立石第16・25・26号住居址出土遺物
- 図版15 立石第23号住居址出土遺物
- 図版16 立石第28・29号住居址出土遺物
- 図版17 立石縄文中期住居址J1号及び
住居址内土坑
- 図版18 立石縄文中期住居址J1号・炉
- 図版19 立石縄文中期住居址J1号出土遺物
- 図版20 立石全景・住居址
(S 1・21・15・22・1号)
- 図版21 立石第4・2号住居址
- 図版22 立石第3号住居址
- 図版23 立石第5号住居址
- 図版24 立石第7・8号住居址
- 図版25 立石第9・10・11・12号住居址
- 図版26 立石第12・13・14号住居址
- 図版27 立石第10・13・18号住居址遺物出土状況
- 図版28 立石第15・18・19号住居址
- 図版29 立石第19号住居址遺物出土状況
- 図版30 立石第20・21・22号住居址
- 図版31 立石第23・24・31号住居址
- 図版32 宮の上第1号住居址
- 図版33 宮の上第2号住居址
- 図版34 宮の上第3号住居址
- 図版35 宮の上第5号住居址
- 図版36 宮の上第4・6・8号住居址
- 図版37 宮の上方形周溝墓遠影
第1号方形周溝墓
- 図版38 宮の上第2・3号方形周溝墓
- 図版39 宮の上第5号方形周溝墓
- 図版40 宮の上第6・7号方形周溝墓
- 図版41 宮の上第8号方形周溝墓
- 図版42 宮の上第9号方形周溝墓
- 図版43 立石出土遺物(1)
- 図版44 宮の上出土遺物(2)
- 図版45 宮の上・立石出土遺物(3)

序 章

第1節 発掘調査の経過

本遺跡は、山梨県遺跡台帳のNo756（宮の上）、No757（立石）にあたり、中道町・町道上の平線の路線発表後、県教育委員会が実施した路線内の分布調査の結果、縄文時代から弥生時代の集落と確認された。その後、本遺跡の重要性に鑑み中道町と県教育委員会との協議によって工事前の発掘調査が計画され、昭和55年6月15日～12月30日、昭和56年6月15日～12月30日の2年度にわたり発掘調査を実施、さらに昭和55年度、上の平遺跡範囲確認調査を併せて行った。その結果、旧石器時代文化層3枚とそれに伴う遺物40点、縄文前期住居址7軒、同中期1軒、弥生時代住居址32軒、方形周溝墓9基、歴史時代住居址1軒が検出された。

調査方法は、幅10m、長さ200mの範囲に4×4mの方眼をグリッドとして長軸に南からアルファベット A・B・C～Z、A1・B2・C2～Z2、A3、短軸に東から1・2・3・4・5と呼称することとした。調査対象は遺構確認のためローム直上まで調査範囲の100%、旧石器時代・ローム掘り下げでは10%の規模で行った。調査の実際にあたっては、重機により樹木の伐採、表土を除去した後、作業員によりジョウレンで遺構確認をおこなった。

第2節 遺跡の位置と環境及び周辺遺跡

立石・宮の上遺跡の属する中道町・曾根丘陵台地は甲府盆地の東南部に位置している。甲府盆地は二本の主要河川によって形成され、中心は三角形を呈する。即ち甲府盆地は盆地内を流れる釜無川、笛吹川の流れに沿って広がる。両河川の合流点の付近より釜無川は、八ヶ岳南麓を經て諏訪湖に至り、続く松本平を含めて一構造盆地をなしているが、甲府よりでは莊崎を過ぎると平坦地は少なくなり丘陵帯が河川の両岸に迫り続いている。一方笛吹川は、東北方向に上流部が伸び、多くの支流に分かれながら秩父山地に至るが平地が広がる地域は塩山までである。甲府盆地の外部は、北西の八ヶ岳、南の富士山を両極として、西に駒ヶ岳、白樺山の赤石山脈の山々が標高3000mの壁をなして連なっている。東は秩父山地より続く山々が大菩薩付近まで2000m前後で続くが、その南は富士山麓まで1500m前後で高い山は見当たらない。曾根丘陵は東西12.5km、南北3kmの広がりで、先端は、坊ガ峰、東山、米倉山、大塚等の高位段丘が位置する。背後の山々から緩く下った斜面は高位段丘の先端で急斜面となり盆地底部に至り、距離を置かずには笛吹川が流れる。曾根丘陵直下を流れる支流は、曾根丘陵の背後を流れる芦川を除くといずれも小河川である。立石・宮の上遺跡が立地する曾根丘陵・東山台地は、南北を滝戸川、間門川が流れ、幅2km、長さ5kmの台地で先端部分は急傾斜となっており、扇状地は形成しない。また、台地斜面は先端部分が高くなり、山よりに緩やかな傾斜をなしている。

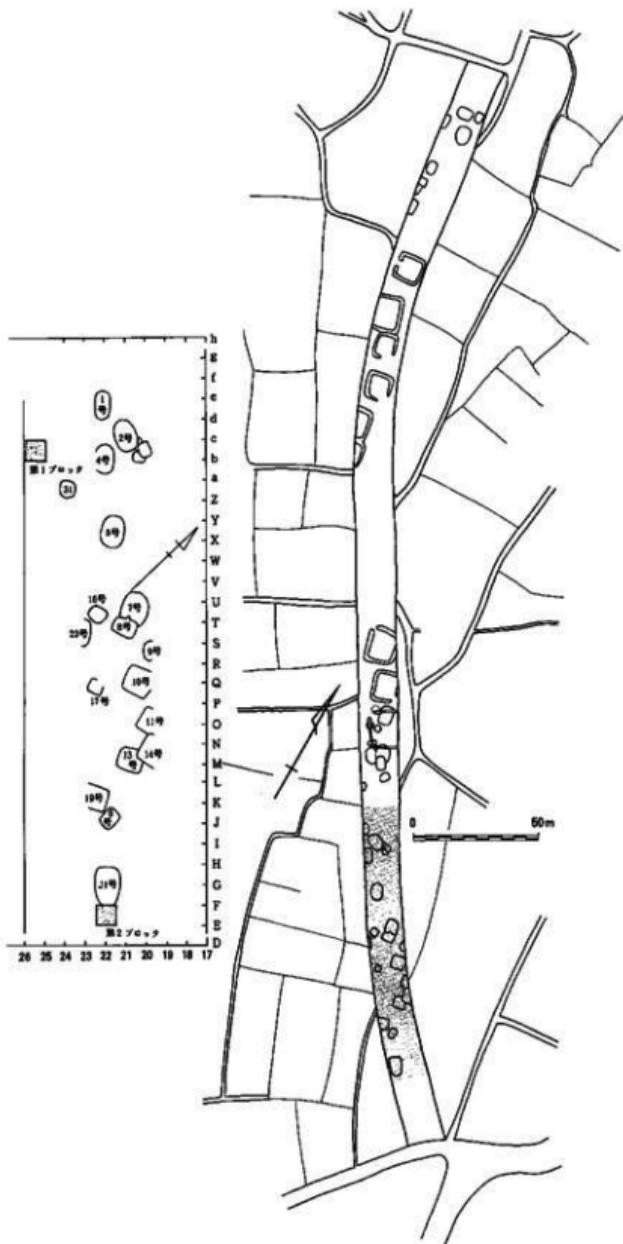
曾根丘陵台地以外は、河川の氾濫原であり台地以下の遺跡の発見は困難であり、今日まで

のところ遺跡は曾根丘陵に集中して県内でも著名であり、本遺跡が乗る東山台地付近でも東山遺跡、上の平遺跡、熊久保遺跡、東山北遺跡が密集して立地している。時代別では、旧石器時代では本遺跡をはじめ、上の平遺跡にもナイフ形石器等が少量認められるところから今後の調査の進展によっては台地全域に広がる可能性も示唆している。また、谷を隔てた丘陵台地にもナイフ形石器を出土する米倉山遺跡、下向山遺跡が確認されており、県内では盆地北部の丘の公園遺跡、県最南端の富沢・万沢遺跡群を除くと、遺跡が密集して分布する地域としてとらえられる。縄文時代では、当遺跡の外に上野原遺跡、城ノ越遺跡、村上遺跡、上の平遺跡が知られ、特に縄文中期の五領ヶ台期、藤内期、曾利期では住居やそれに伴う土器類が豊富に得られており台地全域に大集落が想定される。弥生後半から古墳時代では、上の平方形周溝墓群、東山南小規模古墳群、さらに東山を下った地に4世紀から5世紀後半にかけての東山古墳群が集中しており、古墳前夜（上の平方形周溝墓群）、初期古墳（小平沢古墳）、発展期古墳（銚子塚古墳、大丸山古墳、丸山塚古墳、茶塚古墳）、終末期古墳と古代甲斐国の首長墓にかかる墳墓群が連綿と営まれている地である。

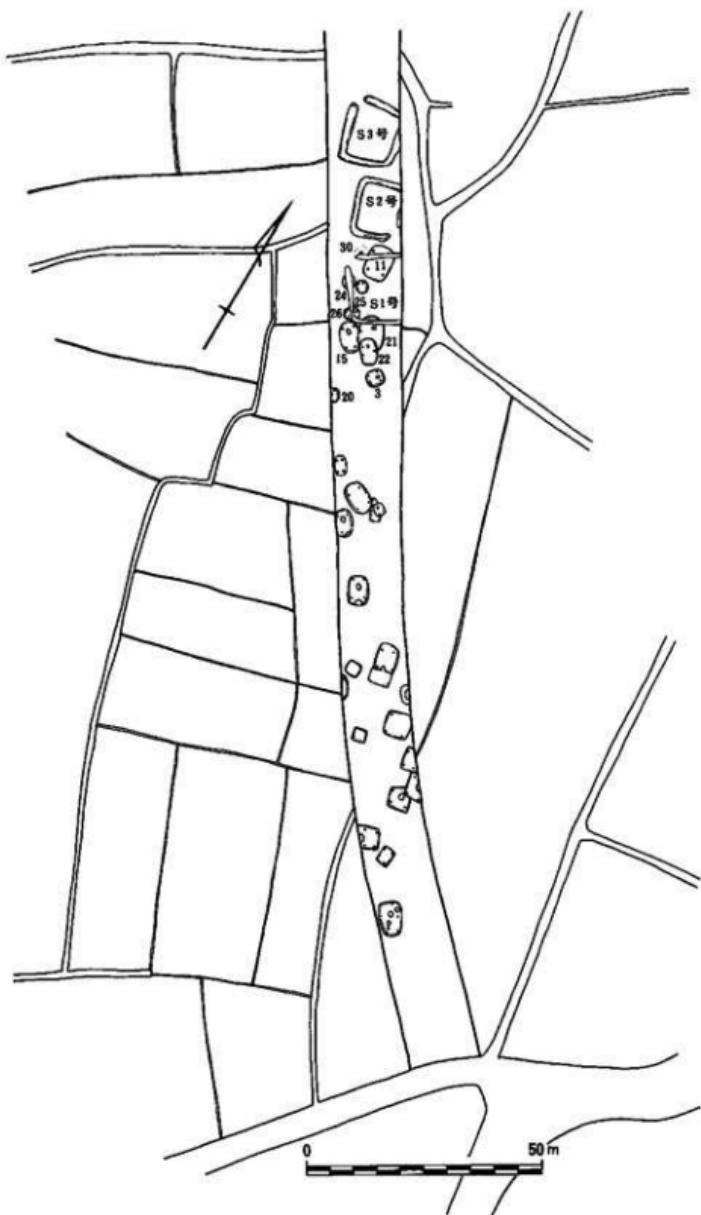


1 宮の上造跡 2 立石道跡 3 上の平道跡 (拠久保道跡) 4 霊山北道跡 5 霊山南道跡
 6 霊山中道跡 7 金武天神道跡 8 下向山道跡 9 向山道跡 10 上野原道跡 11 小平古坟 12 鷺子原古墳
 13 大丸山古墳 14 丸山東古墳 15 天神山古墳 16 斎原古墳 17 かんかん原古墳(跡) 18 丹波内古墳
 19 風見山古墳

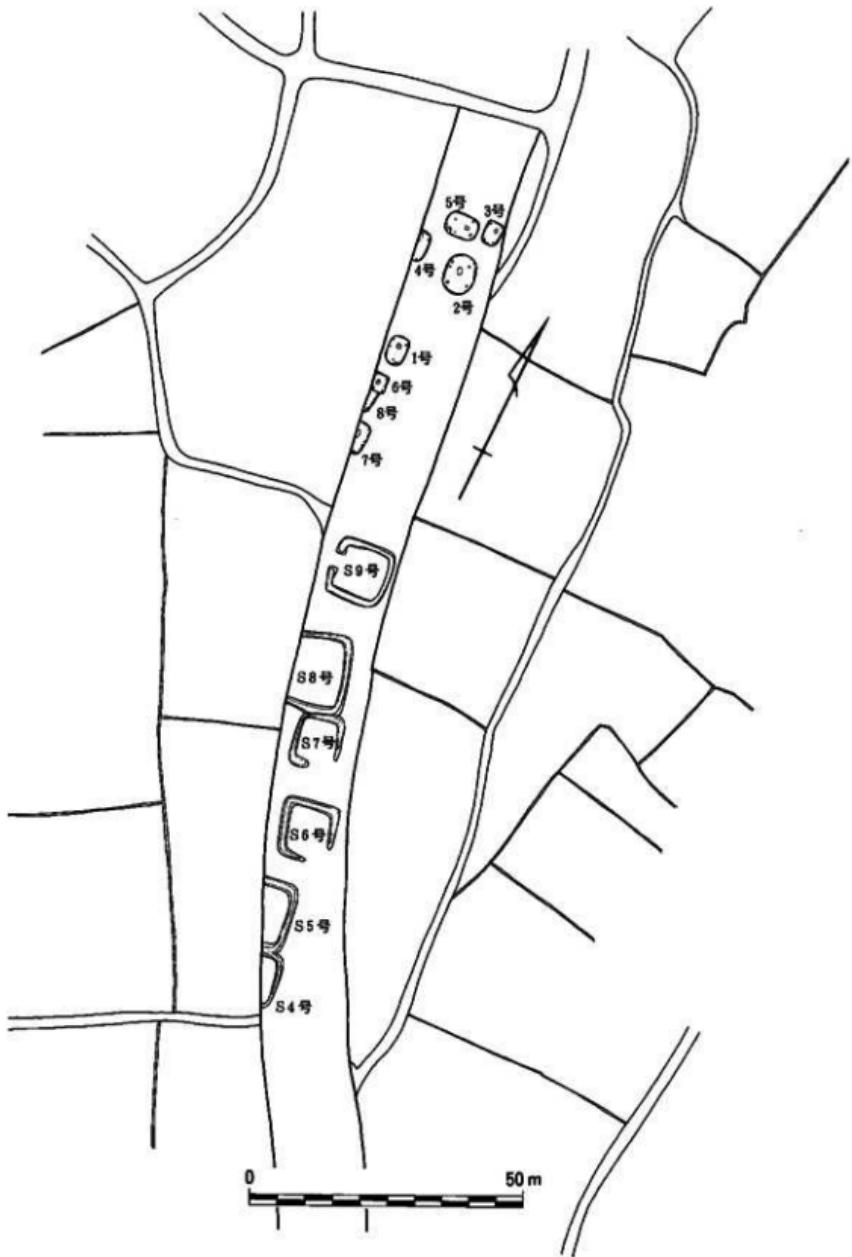
第1図 立石・宮の上造跡位置図



第2図 立石・宮の上遺跡遺構配置図(1)



第3図 立石・宮の上遺跡遺構配置図(2)



第4図 宮の上遺跡遺構配置図

第Ⅰ章 旧石器時代（立石・宮の上遺跡）

立石・宮の上遺跡は、曾根丘陵の東山台地に位置して、台地の富士川に面する箇所から約1.5km東南に奥まった箇所にあり、笛吹川支流の滝戸川沿いに立地する。調査の結果、3カ所の石器集中地点が検出され、3枚の文化層が確認された。

第1節 遺物の出土層位と文化層

遺物の出土層位

層序は、表土を除去し、暗黄褐色ロームのⅠ層、Ⅱ層の黒色帯から約3m下部のⅢ層（Pm I）に分けられる。縄文時代、弥生時代の遺構は第Ⅰ層上面が確認面であり、住居の掘り込みはⅡ層には達しないが、柱穴、縄文中期の土壙がⅡ層を掘り込んでいる。旧石器遺物包含層は、第Ⅰ文化層がⅠ層暗黄褐色中位、第Ⅱ文化層が第Ⅱ層黒色帯中位から下部を中心に、第Ⅲ文化層が第Ⅲ層黄褐色土面下20cmで確認された。

本地域では火山灰分析が既に行われており、ATの降灰層準の検出もなされている。河西学氏によれば、AT降灰層準をⅠ層下部に求めている。本遺跡の第Ⅱ・Ⅲ文化層はⅡ層の下部、Ⅲ層面下20cmにあり、この河西氏の分析結果を積極的に評価するとAT降灰前となり、ATを挟んで上位に1枚、下位に2枚の文化層が確認されたことになる。

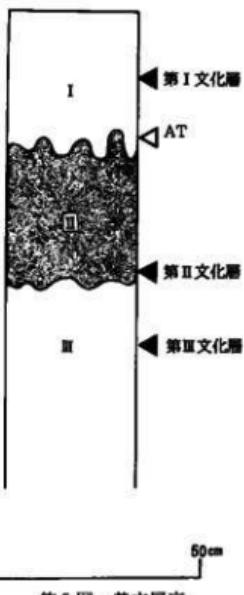
文化層

第Ⅰ文化層 ブロックは形成されず、遺物は第Ⅱ層中位から単独出土している。

第Ⅱ文化層 石器集中箇所（ブロック）のみ3カ所が認められる。出土位置はⅡ層黒色帯の中位から下部を中心に約15cm前後のレベル差をもって出土する。

第Ⅲ文化層 第Ⅲ層ハードロームに20cm食いこんで石刃1点が検出される。

以上の各文化層では、ナイフ形石器、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片の石器群が出土した。各文化層の出土傾向は、第Ⅰ文化層では、単独出土であるため手掛けりとなる根拠を欠いている。第Ⅱ文化層では、台地の南縁部に出土する傾向にあり、第Ⅲ文化層についても、出土地点が発掘区の南寄りであり同様な傾向を示すものと考える。



第5図 基本層序

第2節 遺構と出土遺物

本遺跡では、3ブロックと単独出土をふくめて総計40点の石器を検出した。自然層としては、第Ⅰ層中位、第Ⅱ層中位から下部、第Ⅲ層下位に認められ、3枚の文化層が確認された。各文化層の遺物の数量は第Ⅰ文化層3点、第Ⅱ文化層4点、第Ⅲ文化層1点、表探3点である。

第Ⅰ文化層

1 遺物の出土層位と平面的遺存状態

第Ⅰ文化層は、第Ⅱ層のソフトローム中位に遺物が出土する。3点のナイフ形石器がそれぞれ単独状態で検出される。

2 出土遺物

出土点数は少ないが、3本のナイフ形石器が認められる。石材は黒曜石を用いる。比較的厚手の剥片を用いており一部に縞表皮を残す。No43は、大型な剥片素材を横に用いて、打面は除去される。剥片頭部を右位にして、基部周辺と一側縁加工で右上部に刃部を形成する。左縁では全体に垂直かそれに近い角度で腹面から長い剥離面の刃済加工を施した後、微調整が施される。右縁では基部から体部の中位まで、垂直に近い角度で腹面から刃済加工が認められる。No44は断面三角形を呈する厚手の不定形な剥片を用いる。打面は除去され、打面側を体部の上位に置く。左縁には加工は施されず、右縁全体には急斜で剥離面の長い刃済加工が腹面から加えられた後、微調整が施される。No45は小型ナイフ形石器である。主要剥離面に対して他方向の剥離面をもつ剥片を用いる。打面方向を上位に置き、打面は除去する。右縁では先端から剝離中央の間に垂直に近い角度で刃済加工が施されるが加筆方向は腹面からに限られ、腹面基部周辺では平坦剥離が認められる。

第Ⅱ文化層

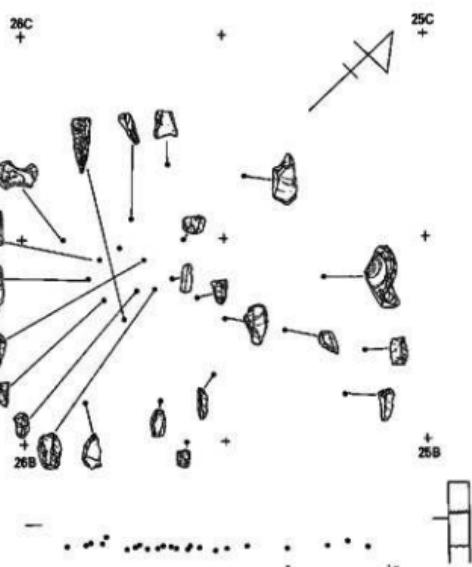
1 遺物の出土層位と平面的遺存状態

第Ⅱ文化層は、第Ⅲ層黒色帯の中位から下部を中心に遺物が出土する。遺物の平面的な分布状態は立石遺跡では、3カ所のブロックが認められる。

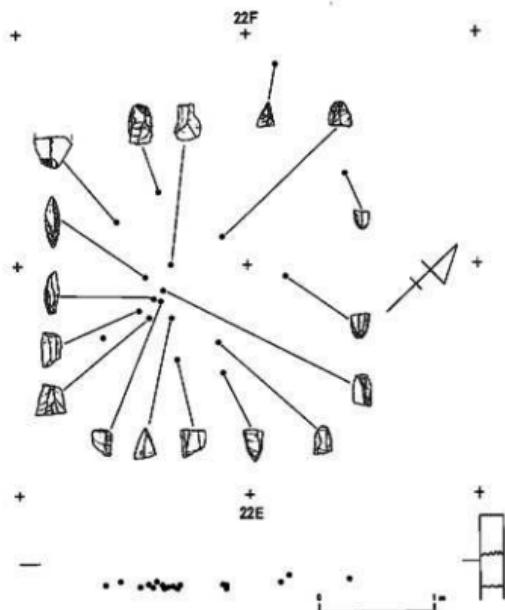
第1ブロック 立石遺跡のC26の10×10mの範囲に遺物が集中して認められた。出土遺物の内訳は、ナイフ形石器7点、剥片類10点の合計17点が出土している。縞や木炭粒子等は認められない。

第2ブロック 上の平範囲確認調査の際に検出したもので、立石遺跡F20の5×3mの範囲の中に遺物が集中して認められた。ナイフ形石器が2点、剥片類20点の合計18点が出土している。縞、木炭粒子は認められない。

第3ブロック 立石遺跡北端の4×3mの範囲に遺物が散漫に認められた。出土遺物の内訳



第6図 第1ブロック（遺物分布状況）



第7図 第2ブロック（遺物分布状況）

は、ナイフ形石器 1 点、剥片類 2 点である。

出土遺物

第Ⅱ文化層の出土石器は、総計 40 点であり、石器組成はナイフ形石器 10 点、縦長剥片第Ⅰ群 7 点、縦長剥片第Ⅱ群 13 点、縦長剥片 3 点、剥片 7 点で構成される。

ナイフ形石器（第 8 図 2 ~ 11）

立石遺跡からは、合計 6 点のナイフ形石器が検出され加工部位により、Ⅰ類：基部両側縁加工と一個加工、Ⅱ類：一個縁加工、Ⅲ類：基部周辺加工にわけられる。素材は薄い整った石刃を用いるものと、やや厚手の剥片素材を用いるものとがあり、石材では黒曜石主体の中に玄武岩が 1 点用いられる。Ⅰ類：ナイフ形石器は、2 点が認められる。No. 2 は、銳角を有する先端と基部を中心にはりや銳角に調整された細身な器種である。比較的厚い不定形な剥片を素材に、剥片頭部を上方に用いて、打面を除去している。加工部位が多い為、剥片の原形はたもたれないと。刃部は左位で、先端部から胴部中央に位置する。左縁での加工は基部から胴部中央に、右縁では加工は全体に及んでおり、垂直かそれに近い急斜な刃潰加工が施される。加撃方向は主に平坦な腹面から施されるが、右縁の一部では腹面方向主体の加撃の中に背面からの加撃痕が認められる。No. 3 はやや湾曲気味な背と直線的な刃部で先端を作出している。基部では打面を残し平縁を呈している。やや厚みのある整った石刃を素材に用いており、加工部が多い割りには素材の原形は保たれているものと考える。刃部は右位で先端から胴部中央に及んでいる。左縁での加工は基部から先端に、垂直かそれに近い急斜な角度で刃潰加工が施されている。右縁での加工は基部から 1.65cm の狭い範囲に限られ、左縁とは対照的にやや緩やかな角度で 2 ~ 3 回加撃を加えさらに微調整を加える。加撃方向はいずれも腹面からに限られる。Ⅱ類：ナイフ形石器は、上半分を欠損する玄武岩製と黒曜石製のものがある。No. 11 は玄武岩で風化が著しく進んでいる。基部を入念な加工により尖らせる。本体の上半は欠損して全容は不明であるが、現状でも 5.46cm を計測して大型で細長な形態が想定され、右縁には緩い角度の刃潰加工が先端に向かって直線的に伸びる。左縁は欠損直上部あたりから先端方向に屈折して、刃部を形成するものと考える。加撃方向は腹面からに限られる。No. 6 は便宜上Ⅱ類としたが No. 6 とは機能・製作手法も異なるものである。製作手法は、やや幅広な剥片の打面部を残して剥片を斜めに切断した後、腹面から 120° 前後の剥離角で背面の稜まで伸びる小剥離を 2 回施し、さらに微調整を行っている。背面では主要剥離面に対して直行する剥離が 3 面以上認められる。基部側には前面が残り剥片剥離作業の初期に近い所産と推察される。

Ⅲ類：ナイフ形石器は No. 8, 9, 10 の 3 点が認められ、いずれも上半部は欠損する。素材は打面を残して本体の下位に置いて使用する。整った石刃中には巾 3cm を計測する大形品も認められる。刃潰加工は基部から 0.5 ~ 1.5, 8cm 前後、両側縁に細かく丁寧に施し、打面は幅 0.3cm 程度を残すように基部を円く作り上げているもの、素材を変形せず両側に施したものの一側のみに施すものがある。

剥片類（第 9、10 図）

本文化層からは、28 点の剥片類が出土している。石器集中区分に見ると第 1 ブロック 7 点、

第2ブロック20点である。点数は希少であるが、剥片の両縁、縦横比、形態等により分類が可能である。

第Ⅰ群：縦長剥片（21～23、37～42）

これらの剥片は両側縁が平行で縦長を呈するという点で共通するが最大幅、および細部の観察からさらに細分される。

I類：長幅比が2:1を越え、幅2cm以下のものをまとめた。両側縁がほぼ平行で、石刃あるいは石刃に近いものである。打面観察は、製品が薄く精巧で打面長が1mm前後であるため困難であるが、中には複剥離打面が認められ、稜を打点とした例も認められる。背面での剥離面は、腹面の主要剥離面と同一方向からの剥離面が多く単設打面であるが、希に180°前後の打面転移によると考えられる剥離痕が存在するものも認められる。二次調整の施される剥片は少ないが、37では左縁中央以下で背面より4回以上の垂直な加撃による調整痕が認められ、右縁では使用によると考えられる微細な刃潰れが全縁に認められる。

II類：長幅比が2:1を越えるが、幅1.5cm以上の剥片で両側縁はほぼ平行で、石刃あるいは石刃に近いものである（No24）。剥片剥離作業の際に、頭部の一部を残して上方以上が欠損したものと推知される。背面と腹面の剥離方向は同一方向で4回以上の作業面が観察されることより単設打面から剥取された剥片と考える。No24は、石英製で先端部を欠が整った石刃であるといえる。

III類：やや幅広で、平面形は三角形状に近い形態を呈し、厚みのある剥片をまとめた。No30は、頭部調整の際に生じたと考えられる微剥離痕が認められる。背面・腹面の剥離方向は同一である。左側面に原石面に近い部分が認められる。No33では頭部が欠損する。剥離面は背面・腹面共に同一方向に認められる。No32は背面の状態が自然面に覆われ、剥離痕は短く胴部中央に達する程度である。このことから、剥片剥離作業初期の所産とされ、石核調整際に作出された剥片と考えることより、前記の2点の剥片とは性格は異なる。背面・腹面の剥離方向は同一方向であり、打面は原石面に近い平坦部を利用している。

第Ⅱ群：本遺跡では、縦長剥片以外の剥片をまとめた。No27は背面に1枚の剥離痕が認められるだけで、他は礫表面が全体を覆っているもので、初期段階の石核調整剥片と考えられる。背面の右辺上端と右辺端中央部には、背面に対して垂直かやや斜めの方向からの打撃による、割れ円錐が認められる。23は胴部以上が欠損して礫原面が背面全体に及ぶ。

第Ⅲ文化層

1 遺物の出土層位と平面的遺存状態

第Ⅲ文化層は、第Ⅲ層黒色帯層の直下20cmの第Ⅳ層のハードローム層中に遺物が出土する。図示する1点であるが、ハードローム中に0.1cm前後の黒曜石の碎片が認められることより今後調査の進展によって資料の蓄積がなされるものと考える。

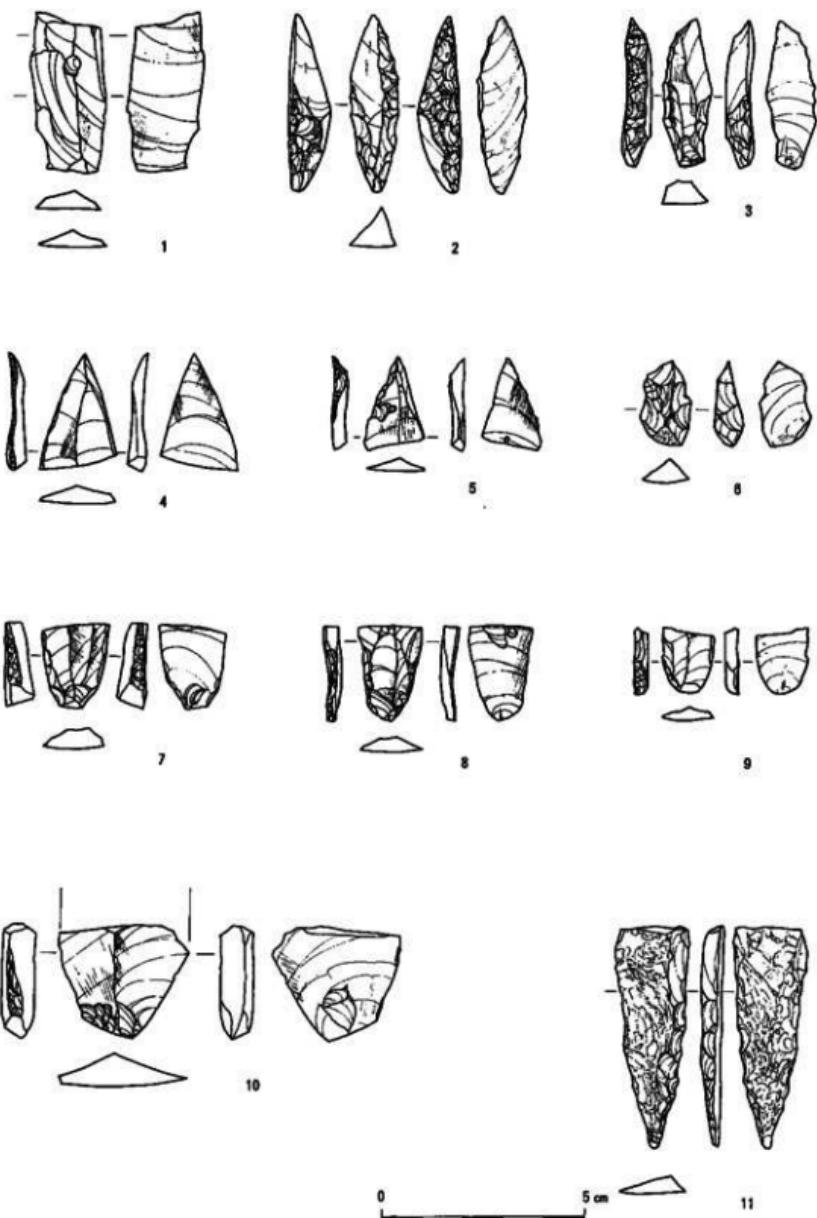
2 出土遺物

第Ⅲ文化層の出土遺物は、No.1の1点である。両側刃が平行で、それに平行する棱が2本認められる整った石刀である。体部の頭部、末端部を欠損する。現存長4.11cm、幅1.77cmを計測する。背面では4面の剥離面が観察され主要剥離面と同方向の剥離が認められるが、左下半では主要剥離に直交する右方向からの剥離面が存在する。

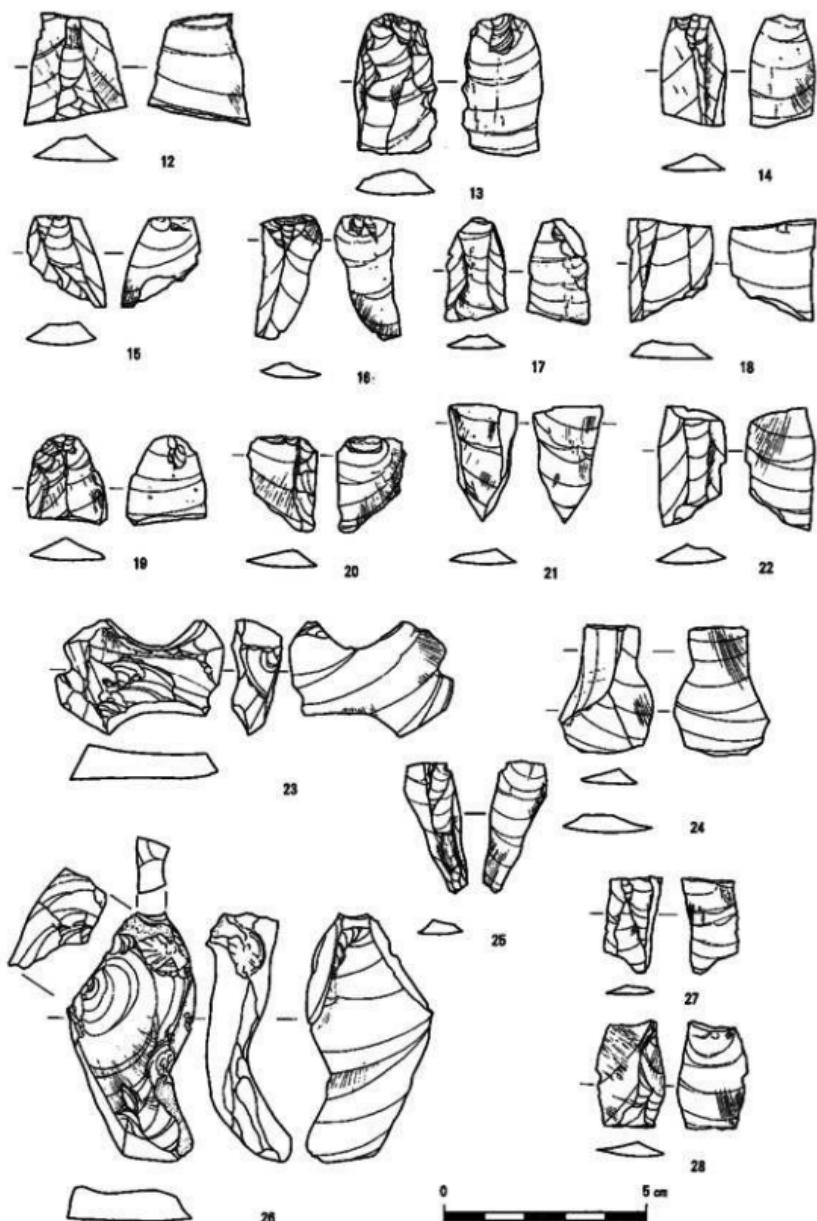
(単位: cm・g)

No.	品種	石材	全長	最大幅	最大厚	重さ (g)	打角 (先端角度)	出土地区	備考
1	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	(4.11)	1.77	0.44	2.9			第Ⅲ文化層
2	ナイフ形石器・I類	黒曜石	4.35	1.2	1.05	4.3	(38°)	第1ブロック	第Ⅱ文化層 3と同一母岩?
3	ナイフ形石器・I類	黒曜石	3.7	1.2	0.7	2.9	(54°)	第1ブロック	第Ⅱ文化層
4	ナイフ形石器・Ⅲ類	黒曜石	(2.9)	1.9	0.5	1.6	(47°)	第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材4
5	ナイフ形石器・Ⅲ類	黒曜石	(2.3)	1.5	0.4	0.9	(40°)	第1ブロック	第Ⅱ文化層
6	ナイフ形石器・Ⅲ類	熱成岩	2.07	1.24	0.64	1.3	(39°)	第3ブロック	第Ⅱ文化層
7	ナイフ形石器・Ⅲ類	黒曜石	(2.05)	1.7	0.65	2.5		第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材4
8	ナイフ形石器・Ⅲ類	黒曜石	(2.3)	1.6	0.4	1.4		第2ブロック	第Ⅱ文化層
9	ナイフ形石器・Ⅲ類	黒曜石	(1.6)	1.3	0.35	0.9		第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
10	ナイフ形石器・Ⅲ類	黒曜石	(2.8)	3.2	0.7	4.8	(98°)	第1ブロック	第Ⅱ文化層
11	ナイフ形石器・Ⅲ類	黒曜石	(5.46)	1.82	0.52	5.9		第2ブロック	第Ⅱ文化層
12	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	(2.8)	2.55	0.6	4.9		第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材4
13	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	(3.4)	2.1	0.6	4.4		第1ブロック	第Ⅱ文化層
14	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	(2.75)	1.6	0.4	1.9		第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
15	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	(2.3)	1.75	0.5	2.1	100°	第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
16	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	(3.1)	1.5	0.35	1.4		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
17	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	(2.5)	1.5	0.3	1.5		第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
18	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	2.5	2.1	0.4	2.8		第1ブロック	第Ⅱ文化層
19	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	2.2	2.0	0.5	2.1		第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
20	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	2.4	1.75	0.4	1.3		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
21	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	2.9	1.7	0.35	2.2		第1ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
22	剥	黒曜石	3.0	1.65	0.5	2.2		第1ブロック	第Ⅱ文化層
23	剥	黒曜石	2.8	4.15	1.15	9.8		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材B
24	縦長剥片 第Ⅰ類	黒曜石	3.2	1.3	0.4	1.4	86°	第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材B
25	縦長剥片 第Ⅰ類	黒曜石	3.2	1.3	0.4	3.3		第2ブロック	第Ⅱ文化層
26	縦長剥片 第Ⅱ類	黒曜石	2.4	1.2	0.2	0.7		第3ブロック	第Ⅱ文化層
27	剥	黒曜石	(6.2)	3.1	1.6	24.8		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材B
28	縦長剥片 第Ⅲ類	黒曜石	(2.6)	1.7	0.35	2.3	98°	第1ブロック	第Ⅱ文化層
29	縦長剥片 第Ⅲ類	黒曜石	4.9	2.4	0.5	7.0		第2ブロック	第Ⅱ文化層
30	縦長剥片 第Ⅲ類	黒曜石	3.9	2.3	0.8	6.4	91°	第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材B
31	剥	黒曜石	2.65	2.27	0.38	3.8		第2ブロック	第Ⅱ文化層
32	縦長剥片 第Ⅳ類	黒曜石	2.39	1.45	0.55	4.0	90°	第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材A
33	縦長剥片 第Ⅳ類	黒曜石	3.5	2.28	0.85	8.2		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材B
34	剥	黒曜石	3.5	1.99	0.72	3.3		第2ブロック	第Ⅱ文化層
35	剥	黒曜石	1.7	2.25	0.6	2.9	95°	第1ブロック	第Ⅱ文化層
36	剥	黒曜石	2.4	1.4	0.5	1.5		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材D
37	縦長剥片 第Ⅴ類	黒曜石	(5.0)	1.66	0.53	3.5		第2ブロック	第Ⅱ文化層
38	縦長剥片 第Ⅴ類	黒曜石	(3.5)	1.05	0.5	1.6		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材C
39	縦長剥片 第Ⅴ類	黒曜石	(3.05)	0.85	0.4	1.0		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材B
40	縦長剥片 第Ⅴ類	黒曜石	(2.8)	1.0	0.3	0.8		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材C
41	縦長剥片 第Ⅵ類	黒曜石	(1.7)	0.8	2.5	0.8		第3ブロック	第Ⅱ文化層 石材C
42	縦長剥片 第Ⅵ類	黒曜石	(2.7)	1.45	0.22	1.2		第2ブロック	第Ⅱ文化層 石材C
43	ナイフ形石器	黒曜石	5.07	1.74	1.15	8.3	(62°)		第Ⅰ文化層
44	ナイフ形石器	黒曜石	(4.2)	1.82	1.05	6.3	(43°)		第Ⅰ文化層
45	ナイフ形石器	黒曜石	2.8	1.05	0.5	1.7	(62°)		第Ⅰ文化層

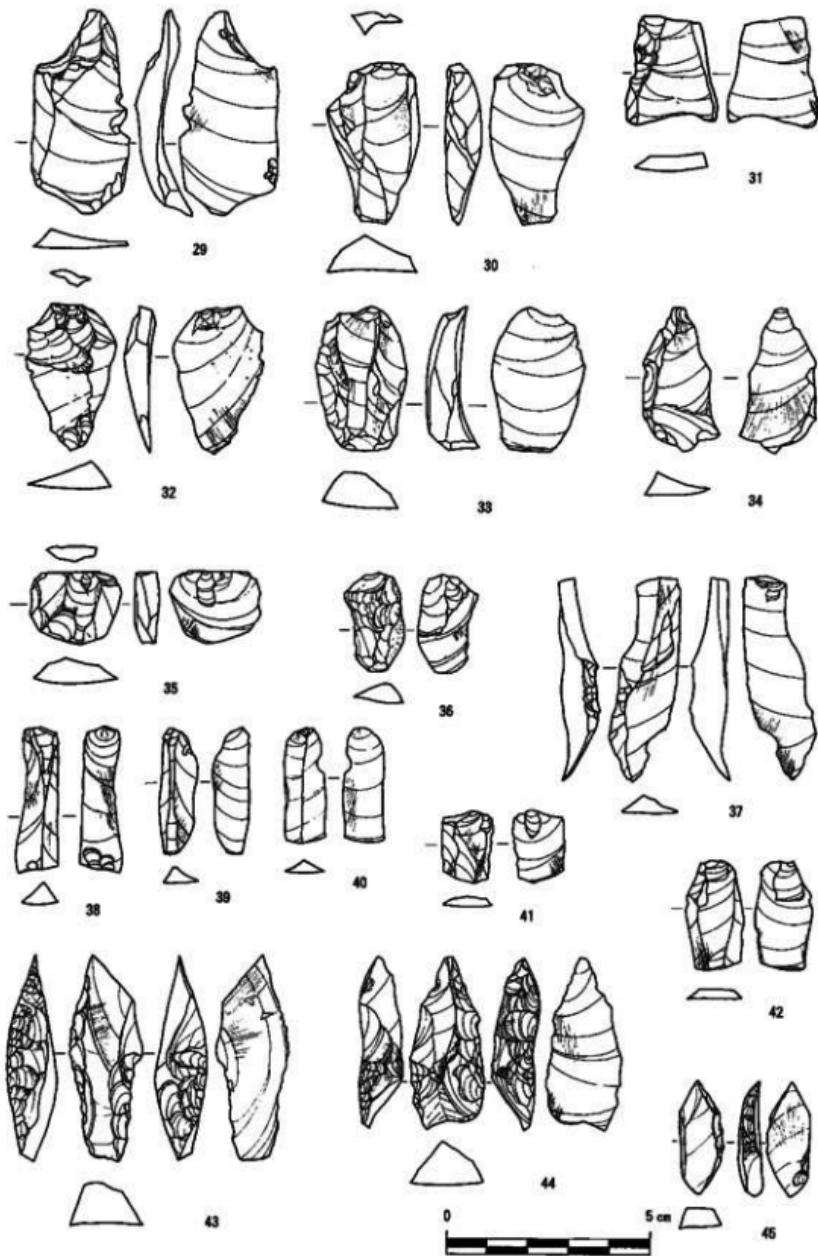
表 出土石器計測表



第8図 出土遺物（1第Ⅲ文化層・2～11第Ⅱ文化層）



第9図 出土遺物（第II文化層）



第10図 出土遺物（29~42第Ⅱ文化層・43~45第Ⅰ文化層）

小 結

立石・宮ノ上遺跡では、3枚の文化層が認知された訳であるが、これらの編年的位置を考え、今後の研究課題としたい。

第Ⅰ文化層は、AT降灰前の所産である。この点をふまえてこの石器群の性格を考えてゆきたい。3点のナイフ形石器はいずれも単独で出土したものであり、出土層位は第Ⅰ層暗褐色土（ソフトローム）であった。製作技術は、No.1では、厚みのある幅広剥片の先端を切断して横位に用いる。No.2では、厚みのある剥片を素材に打面部を上位に置いている。この2例ナイフ形石器の剥片の厚みは計1cm前後を計測するもので石器製作の際にあらかじめ計画的に製作された可能性が高いものと考える。加工部位は基部周辺と一側縁に加工を施すものと、一側縁のみ調整加工を施したものであるが、調整は念入りに腹面から垂直に近い剥離面の長い刃溝し加工を施した後、さらに縁辺に微調整を施して鋸歯状として共通点が多く認められる。以上より第Ⅰ文化層での石器素材は、石刃は使用されず使用剥片は分厚い剥片が用いられ、ナイフ形石器の形態は背の高い切り出し状に近い形態である。このようなナイフ形石器を主構成とする石器群には関東武藏野台地第Ⅳ下層があり、それに近い年代が与えられる。

甲府盆地でのAT降灰以前の石器文化では面上に遺物の検出が確認されているのは盆地北部の八ヶ岳南麓に位置する、丘の公園遺跡と富士川下流の天神堂、権現堂遺跡であり、これらはいずれも砂川期に属する刃器文化に属するものであり、今日までのところⅣ下相当に属する資料は、本遺跡と曾根丘陵上において単独で包含層に伴わない二、三例の資料が散見できる程度で、甲府盆地での該期の課題は資料の蓄積にあるといえる。

第Ⅱ文化層は、AT降灰前の黒色帯中位から下位に認められるところから、武藏野第Ⅶ層以下に相当するものと考えられ、この点を考慮にいれて本石器群の編年位置、及び性格等を考える。石器製作技術にさいして本石器群は、石刃あるいはそれに近い技法による剥片剥離技法を技術基盤においている。特に千葉県北海道遺跡Ⅶ層に認められるような、幅2cm未満かそれ前後の薄く整った石刃が卓越しているが、同時に幅3cmを計測する整った石刃の存在も認められており、二者はブロックを異にして出土している。ナイフ形石器と剥片素材の関係では、石刃素材に密接となる、基部周辺加工ナイフ形石器と剥片素材の二側辺加工に分化する傾向が示唆される。

ナイフ形石器は、第Ⅱ文化層のナイフ形石器Ⅰ類の基部両側縁と一側縁加工、Ⅱ類の一側縁加工、Ⅲ類の基部周辺加工の三形態が認知され各種分化が進んでいる。その中でⅠ・Ⅲ類が量的にも際立っており本文化層の特徴を示すものと考える。

ナイフ形石器Ⅲ類は、整った石刃を素材に用いて、基部周辺に調整加工を施したもので、加工部位は少なく石刃の形態を残している。本石器群は、幅1cm前後で薄手の整った小型品と幅2cm以上でやや厚手の石刃の2種類が看取される。このように大型石刃とともに小型石刃が意図的にナイフ形石器の素材として製作される事実は、ナイフ形石器Ⅲ類の小型化の傾向を示唆しているものといえる。製品は4点検出されるが、いずれも上半部は欠損している。加工部位

が少ないため素材の変形の度合は少なく素材の原形を保つものと思われる。いずれも打面を基部に残置する。法量は、幅3cm前後の大型なものと幅1cm前後の小形品がある。本類は、武藏野台地X層から存在してVI層に認められる第I形態（須藤・1986年）に比定される。

I類のナイフ形石器は基部両側辺縁と一側辺加工では厚みを有する素材から製作されるものと石刃に近い素材を利用するものがある。打面部を残すものは基部が平坦であり、先端部は鋭利な角度に製作される。本器種は、千葉県東林跡遺跡第VII層、同北海道遺跡VII層、同聖人塚遺跡第VII層、群馬県後田遺跡が指標となる、VII層中におけるナイフ形石器第III形態に対比される。

第II類の一側辺加工ナイフ形石器は2点が検出されているが、形態的、技術的に大きく異なるものが看取されている。一つは、基部が尖頭器状に尖銳となり、刃済加工は直線的に施される。素材は縦長剥片を用いている大型品である。後者は剥片を切削して打面部を残して、打面部縁に平行して刃済加工を施している小型ナイフ形石器であり、ナイフ形石器の器種分化が進んでいるものとみなすことが出来る。

以上、立石第II文化層の石器群を検討してきた訳であるが、石器製作素材の剥片剥離過程ではVII層段階の技術が優勢であり特に、千葉県下における小型石刃の製作に近い様相のものと考えられる。ナイフ形石器では、第IX層段階のナイフ形石器に近い様相で認知されるが、第III類のナイフ形石器の小型化や形態分化の進行が認められる事実は、IX層石器群から新段階への移行期の様相として把握される。また本遺跡では、今回の発掘地点より北側30mほど離れた地点で石器群が検出されている（1989年）。出土層位は、黒色帯の中位から下部にかけて出土しており、今回検出された第II文化層と一致する。ここでは、秋田県地蔵田B遺跡を指標とした石器群との拘わりを重視している。剥片剥離技術は平坦打面で打面と作業面を交互に入れ換える技術と頻繁に90°の打面転移を繰り返すものの二種を認知された。石器は台形様石器と鋸歯状石器が検出されることより、IX層段階に想定されていた。

以上により、今回確認された第I類・III類のナイフ形石器類の在り方、さらに大形石刃と小形石刃の共伴という事実に1989年に行われた同遺跡の調査で台形様石器の出土により古相の評価が与えられた成果を加味して編年的位置を判断すると第II文化層は武藏野台地IX層からVII層への移行過程を示す石器群の様相を示すものと解釈される。

第III文化層は、第III層暗褐色土面下15cmで検出されたものである。剥片の頭部、端部が欠損するが、側縁はほぼ平行で、薄手の整った石刃といえる。先の黒色帯の石器群がIX層からVII層に対比されるところからIX層以下というところとなる。今後の資料の増加を待ち再論する。

以上、立石、宮ノ上遺跡での石器群の検討を行った。第I文化層はIV層、第II文化層はVIIからVIII層への移行過程を、III文化層はIX層以下相当にそれぞれ比定されよう。

参考文献

- 奥村吉信 「後期旧石器時代前半期の技術基盤」 1989 考古学ジャーナルNo.309
- 佐藤宏之 「後期旧石器時代前半期の研究」 同上
- 須藤隆司 「群馬県藪塚遺跡の石器文化」 1986 明治大学考古学博物館館報No.2
- 石器文化研究会 「A.T降灰以前の石器文化」 1989 石器文化研究 I
- 同上 「A.T降灰以前の石器文化」 1990 同上 II
- 同上 「A.T降灰以前の石器文化」 1991 同上 III
- 千葉県立房総風土記の丘 「房総の先土器時代～A.T降灰以前の石器群」 1986
房総風土記の丘年報10
- 麻生敏隆 「後田遺跡」 1987 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 麻生優、織笠昭、犬塚俊雄
「千葉県鎌ヶ谷市東林跡遺跡の調査」 1984
日本考古学協会第50回総会研究発表要旨
- 高杉尚宏 「嘉留多遺跡・第Ⅷ層」 1982 世田谷区教育委員会
- 西井幸雄 「関東地方における武藏野台地第IV下層～VI層のナイフ形石器」
1991 埼玉考古論集
- 織笠 昭 「殿山技法と国府型ナイフ形石器」 1987 考古学雑誌72巻4号
「国府ナイフ形石器の形態と技術（上・下）」 1987 古代文化39巻10・12号
「角錐状石器の形態と技術」 1988 東海史学22号
- 小林達雄、小田静雄 「野川先土器時代遺跡の研究」 1971 第四紀研究10巻4号
- 赤澤 威、小田静雄、山中一郎 「日本の旧石器」 1980
- 安藤政雄 「石器の形態と機能」 1979 日本考古学を学（2）
「関東地方における切り出し形石器を伴う石器文化の様相」 1973
駿台史学32号
- 白石浩之 「いわゆる砂川期の再検討」 1993 国学院大学考古学資料館紀要9
「茂呂系統ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論」 1973 物質文化23-2
「茂呂系統ナイフ形石器の形式学的研究」 1981 考古学研究27-4
- 保坂康夫 「立石遺跡発掘調査報告」 1990 山梨県立考古博物館
埋蔵文化財センター
研究紀要・6

第Ⅱ章 立石遺跡の調査

第1節 縄文前期初頭の概観

遺構は、縄文時代前期の木島式期に平行する住居址群であり、共伴する土器の様相からも限られた時間内に營まれたものと考えられる。住居址は総計7軒が検出され、単独検出2軒、同時期の切り合い関係3軒、後続時期の遺構により一部破壊を受ける例1軒、保存状態が悪く炉址のみを検出する例1軒である。該期の遺跡は甲府盆地の北部で比較的集中して検出されており、甲ツ原遺跡、金生遺跡、塩川ダム遺跡がある。盆地東南部では、本遺跡1例であり、しかも住居群より離れた発掘地区でも該期の資料が採集されており調査範囲が拡張されれば、さらに集落の範囲は広がりを増すものと考えられる。このような本遺跡での在り方は該期の集落研究の貴重な資料となるものと考える。

遺構と出土遺物

第16号住居址（第11図）

（概観）立石遺跡住居群の中央に近い南側に位置する。弥生終末期の7、23号、平安期8号に隣接する。

（形状・規模）長径3.26m、短径3.2mである。形状は西・南辺がほぼ直線となり、北・東辺は外側にやや張り出すように湾曲している。コーナーは大きな隅丸をもつ方形状に近い形態を呈する。

（壁・床）黄褐色のソフトロームを垂直に掘り込み床面に達する。床面は踏み固められる箇所も部分的に認められるが全体的には軟弱であり、東北に傾斜する。壁高は30cm前後を計測する。

（柱穴）無し。

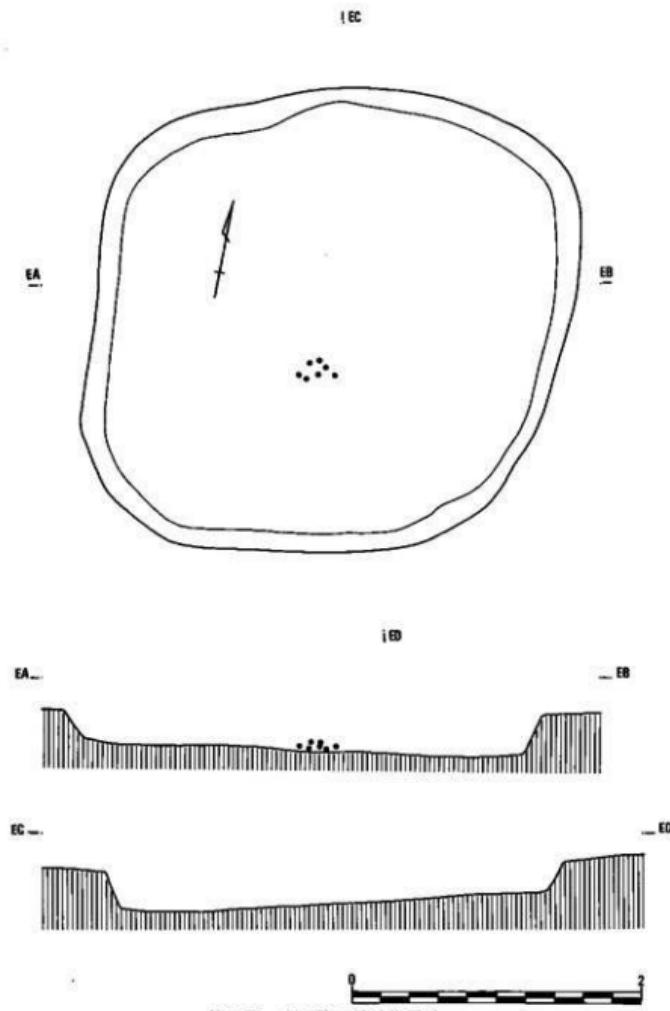
（炉址）住居ほぼ中央に、微量のカーボン、および焼土が認められるが、掘り跡は認められない。

（覆土）2層に分けられレンズ状堆積をなす。第Ⅰ層は暗黒茶色土にローム細粒子を含む。第Ⅱ層は黒褐色土で、緻密でサラサラした土壤層である。

（遺物出土状態）出土量は少ないが、いずれも前期初頭にかかる資料であり、住居内の中央部にかけて一部は床面に接して、残りは床面から10cm前後浮上して認められる。その構成は、木島系の薄手土器片5点、胎土に纖維を含む厚手土器が14点である。

（出土遺物）木島式系土器に纖維土器が伴う様相で検出される。木島系では口縁部が、貝殻状工具に近い施文具で斜位の細沈線が施される。口唇部には指で平坦に整形された後、口縁部で認められた細沈線と同様な施文具により押引状刺突による刻目が施されるものと、1本の沈線が施文されるものとが認められる。口縁部と胴部との接点は輪積の接合で段を造り竪状工具により連続刺突による刻目を施している。纖維土器は、いずれも無文系であり、整形による調整

痕が認められるにすぎない。



第11図 立石第16号址住居址

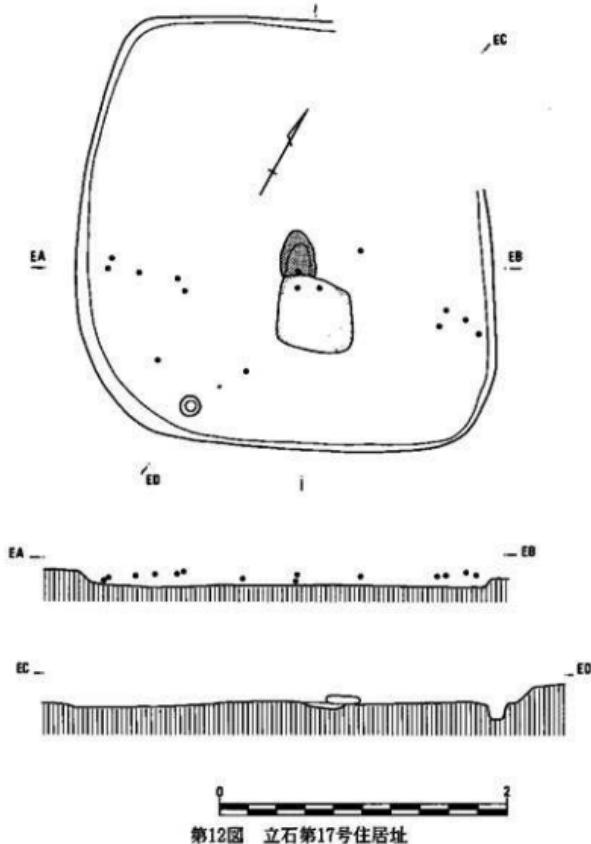
第17号住居址（第12図）

（外観）立石遺跡の中央よりやや東寄りに位置し、本住居より南方には弥生終末の住居は存在しない。かわって、方形を呈する古墳時代に属する住居址群が発掘箇所を南北方向に横切るよう検出される、このうちの第10号住居に近い位置に存在する。

(覆土) 削平の為、覆土は住居再下部の覆土が認められる。黒褐色でサラサラした土壤層であるが、壁際には、少量のロームブロックが含まれる。

(出土状況) 遺物の集中箇所は認められず散漫である。住居中央から北側には殆ど認められず住居南側に分布の中心があり、繊維土器 2 点は石皿に接して認められる。

(出土遺物) 口縁には連続の爪、半竹連続押引が施される。地文では細沈線の他に貝殻腹条痕が表裏面に認められ、指頭痕が顕著である。垂下する陸帯文には接合部の段同様に範状工具連続刺突が施される。繊維土器は口縁部に平行して隆帯が一周して、地文には撫糸文が施される。



第12図 立石第17号住居址

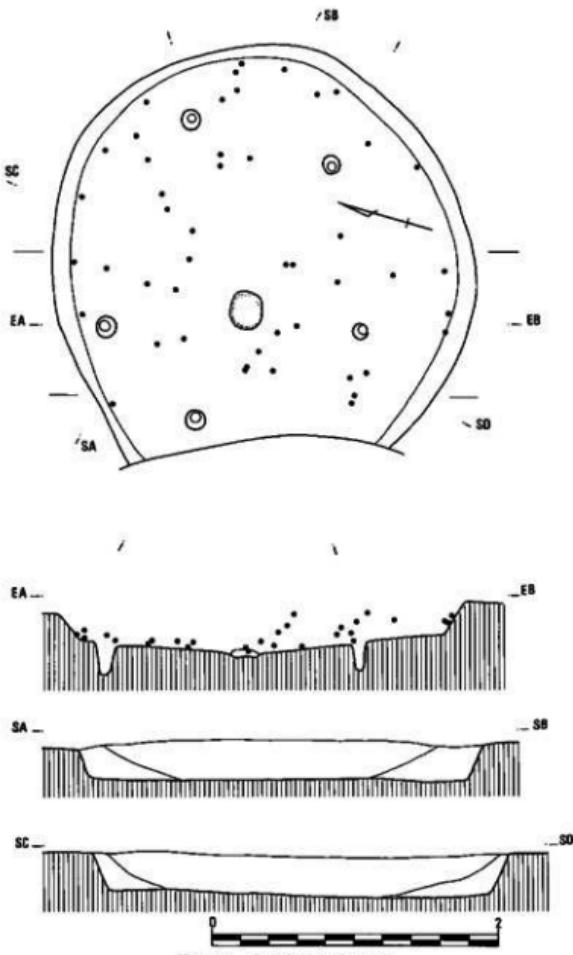
第25号住居址（第 図）

(概観) 立石遺跡の北側部分に位置し、第 1 号方形周溝墓の方台部に乗る。弥生終末期の第24号

住居址に壁南部の一部が切られる。

(形状・規模) 短径2.9m、長径3.06m前後を計測する。住居中央から東部にかけての外壁は整った弧を描いているが、西部よりでは外側に細長く張り出すように認められる不正円形である。

(壁・床) ソフトロームを基本的に垂直に掘り込んでいるが斜めに認められる部分も目立つ。壁高28cmで、床面は炉付近にむかって僅かな傾斜を呈しているが、全体的には平坦であるといえる。



第13図 立石第25号住居址

(柱穴) 5本の主柱穴が検出される。炉を囲むように五角形に近い状態で配されているが全体的にやや北寄りに位置する。径14cm、深さ22cm前後を計測する。

(炉址) 住居中央より西に僅かにずれる箇所に位置する。炉全体を石皿が蓋状に覆っている。石皿は自身の重みの為、炉内に5cm前後食い込んで認められ、石皿を取り除くと真っ赤な焼土が現れる。炉内には焼土が充填する。

(覆土) 2層が認められる。I層は黒色土で、ローム粒子を多量に含んでいる以外は、基本的に第II層と質的には変化は認められない。II層は、黒褐色土でサラサラした土壤層である。

(出土状況) 住居内全体に、散漫に検出される。床面に接して出土する例もあるが、多くは床面より浮上して認められる例が多い。

(出土遺物) 土器と僅かな石器類が主体である。前者はいずれも、前期初頭に位置付けられる東海地域の木島式系の土器で薄手土器と纖維を胎土中に含む縄文・無文系土器の2種類が混在して検出された。木島式系では、口唇部では、指先で軽く押し潰し平坦面を作りだしている(1)。口縁部では矢羽状細線(1、3)斜細線(4、7)が顕著である。口縁部と胴部との境目では輪積の接合段が形成される。境目には指先と爪部でつまんで、高まりと窓状の窓を造る例(4)と、箋状工具による押引状突による刻み目(3)の2種類が認められた。内面は指頭圧痕が前面に認められる。土器厚は0.38~0.42cmで色調は暗褐色~茶褐色である。纖維を胎土中に含む土器の多くは斜縄文が認められ無節Lr、Rℓ回転で施文される。条の幅は太いもので4mm(20)、細いもので1mm(2)を計測する。石器類は、凹石(磨面有)1点、磨石1点、剥片2点である。

第26号住居址(第14図)

(概観) 立石遺跡の北側部分に位置し、住居址の中央部で第1号方形周溝墓により分断され、住居の東半分は方台部の南端に乗る。

(形状・規模) 長径3.8m、短径3.1m、住居南壁で最大径を計測し、北壁で極端に狭まる卵形に近い形態を呈する。

(壁・床) ソフトロームを、ほぼ垂直34cm掘り込んで床面に達する。床面は炉付近で固く踏み固められるが、それ以外では軟弱である。

(柱穴) 北壁付近に1ヶ所検出されるが、他は柱穴予想箇所が方形周溝墓により破壊を受けるなどの作用の為、検出されない。

(炉址) 卵形住居のはば中央に位置しており、南半分は第1号方形周溝墓により切り取られている。炉内には、32×26cm、厚さ11cmの石皿が存在する。石皿は住居廃絶と同様に設置された可能性が高い。

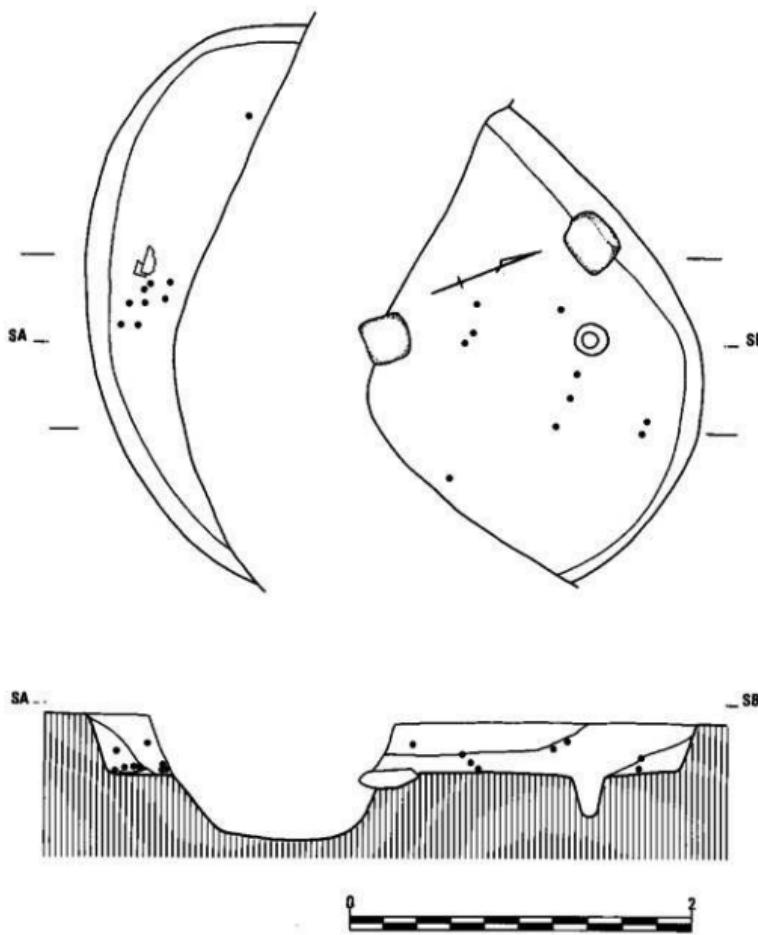
(覆土) 3層でレンズ状堆積が認められる。第I層は黒色土で、ローム粒子を混入する。第II層は黒褐色土で、サラサラした土壤層で少量の木炭を含んでいる。第III層は基本的には第II層と同様であるが、これに多量のローム塊を含む。

(出土状況) 破片状態で住居全体に出土するが小破片で図示可能なものは少ないが、特に南壁付近では集中して出土する。床面直上出土例も認められるが、多くは床浮上で、第II、III層に多く含まれる。

(出土遺物：第23図) 木島式系薄手土器と縄文・無文系の纖維土器が混在して出土する。1～4は胴部下位の破片である。垂下する集合沈線(1)、不規則に条線が交差して格子目状をなすもの(3)や無文(4)のものなどが認められる。5～9はいずれも、胎土に纖維を混入した無文土器である。石器類の出土は少なく、剥片1点、磨石1点、石皿1点である。

第27号住居址(第15図)

(概観) 立石遺跡住居群の中央部やや北よりに位置する。第28、29号と切り合い関係にあり、3軒の関係では最も新しく構築されている。



第14図 立石第26号住居址

(形状・規模) 長径3.08m、短径2.56mである。西壁辺で外側に若干張り出し弧状となるが、他は基本的に直線に近く、四隅が丸みをもつ隅丸方形に近い形態を呈する。

(壁・床) ソフトロームを斜めに30cm掘り込んで床面に達する。床面は踏み固められた痕跡は認められず全体的に軟弱であるといえる。

(柱穴) 柱穴は6本認められるが実際は重複の為28、29号に伴うものが含められ、4本が本住居辺に伴うものであり、この4本は住居のほぼ四隅に対角線状に配置され均整のとれた状態である。

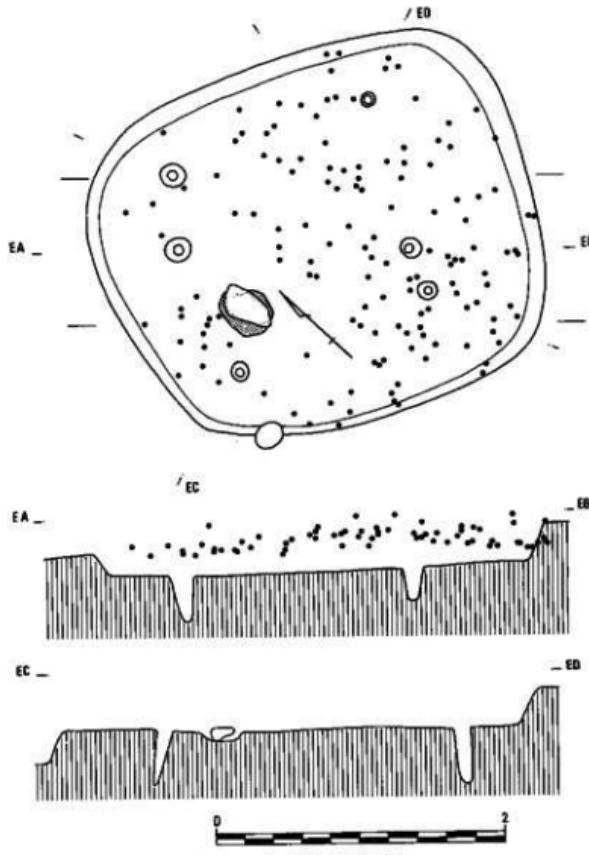
(炉址) 炉は長軸40cm、短軸30cm、深さ16cmを計測し、炉内には石皿が蓋状に配されて、焼土が充填している。石皿は、住居廃絶と同時に設置された可能性が高い。

(覆土) 3層に分けられ、レンズ状堆積が認められる。第Ⅰ層は黒色土で、ローム粒、木炭粒を多量に含んでいる。第Ⅱ層は黒褐色土のサラサラした土壤層で、木炭粒を少量含んでいる。

第Ⅲ層は、Ⅱ層と質的には変化はないが、多量のローム粒を含みやや黄色を帯びる事から線引きを行った。

(出土状況) 本遺跡の木島期の中では遺物量が最も多い例である。炉址を中心に東西に幅40cm前後の空白部を除くと住居全面に遺物は散布している。また床面に接して出土する例は少なく15cm前後床面から浮上する。

(出土遺物：第23・24図) 土器では、前期初頭に位置付けられる東海地域の木島式系土器と繊維を胎土の中に含む縄文・無文系土器が混在して検出される。石器類は本遺跡の中では量的に最も多く石錐8点、スクレイパー1点、剥片4点、楔状石器2点、磨石8点で内



第15図 立石第27号住居跡

容も豊富である。

木鳥式系土器は、口縁部と胴部の境目で輪積の接合による段を形成するもの（1、7、9、11～15）と、顯著な段は形成せずに、指先によりつまんで隆起状のものを形成する例や（1）、口縁部と胴部の境目を意識して口縁部に平行する1条の半裁竹管状工具による押引文が施される例が認められる。段の刻み目も竪、先端刷毛状工具、半裁竹管等が用いられる。口唇部は、親指で土器内側を支え人差し指で口唇部を軽く調整して平坦にした後、半竹状工具により連続押引がなされる（11、12）ものや、口縁部上端から口唇部の縁にかけて押引状刺突される例（13～19）、口縁部上端に竪状工具により押引状刺突による刻み目等が認められる。口縁部では斜位（10、15、18、1～5）、格子（13、17）、山形（12）、弧状（8）の条線を地文としたものが看取される。11は、斜位方向の条線を施した後、口縁部に平行して五段以上の押引状刺突を充填したものである。胴部では条線が縱位、斜位に認められ、さらにそれらが交差する例が認められる。織維土器では口縁部で1本の隆起を有するものが認められる（2、3）。胴部では、二段繩文（条幅2.9×3.5cm、12～23）無節繩文（条幅0.2mm、8）無文（4、7、9）、弧状沈線（5）、押圧による細線からなる格子目文（6）が認められる。

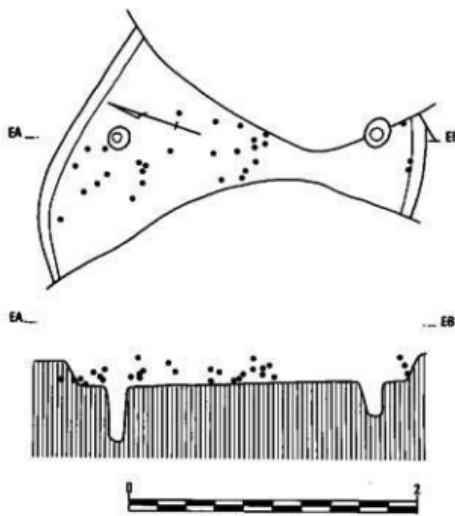
第28号住居址（第16図）

（概観）立石遺跡中央部や北よりに位置する。27、29、2号と切り合い関係を示し、特に第2、27号により住居東・西側の大部分を切られる。

（形状・規模）住居平面の大部分を消失しているが、残存部分の状況からは、壁は外側に張り出さず、北壁及び南壁で直線と認められることから27号同様の小型方形プランが推定可能である。規模は、短軸と考えられる箇所で2.38mを計測する。

（壁・床）壁高は20cm前後で、ソフトロームを斜めに掘り込んで床面に達する。床面は軟弱であり、踏み固められた痕跡は認められない。

（柱穴）2本が認められ、径16cm、深さ40cm前後で、一方は垂直に認められるが、残りの1個は住居中央に向かって傾斜する。

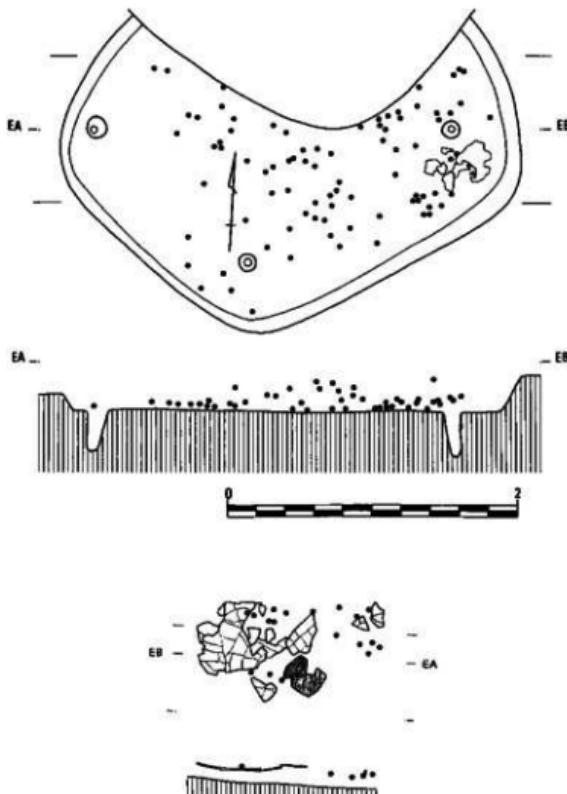


第16図 立石第28号住居址

(炉址) 重複により、消失したものと考えられる。

(出土状況) 住居の東・西部が重複により大幅に切り取られ中央を僅かに残した状況であり、全体の把握は困難なものとなっているが、残存部では住居北部には遺物の密度が濃く、東部は空白部が目立つ。床直上は少なく、多くは床浮上である。

(出土遺物：第25図) 木島式系の薄手土器と縄文の繊維土器が混在して出土している。石器類は磨石2点が検出された。図示される土器類は1～5で、口唇部は土器内側を親指で支え、人差し指で軽く押えて平坦にした後、半竹状工具による押引状刺突(2)が認められる。口縁部上端には、地文に条線を施した後、1は條の押引状刺突が横位に一周する。繊維土器は、二段縄文で条の幅は0.35cmを計測する。色調黒茶褐色を呈する。



第17図 立石第29号住居址

第29号住居址（第17図）

（概観）立石遺跡住居群の中央部より、やや北寄りに位置し、第27号と重複関係にありその前後関係は29号が27号に切られることより29号—27号となる。

（形状・規模）一部が第28号住居により切られ全長は不明である。住居南側の二辺は直線を呈するが27号に切られる北側二辺はやや外側に張り出しが、四隅が丸身をもつ隅丸方形となることは明白である。長径2.8m、短径2.5mである。

（壁・床）ソフトロームをやや斜めに28cm掘り込んで床面に達する。床面は固く踏み固められた痕跡は認められずやや軟弱である。

（柱穴）重複の為一部不明確であるが、住居の四隅に対角線上に配されている。径14cm、深さ32cmで内側に傾斜する。

（炉址）第27号住居址の構築の際に消失したものと考えられる。

（覆土）2層に分けられる。I層は黒色土でローム粒と僅かな木炭粒を含む。

（出土状況）住居西側の一部で空白部を観るが、遺物の広がりは全面に認められ、東側隅に口縁部を欠くが復元可能な個体がまとまって出土する。床面に接して出土する例は少なく、大半は床面から5~10cm前後浮上して認められる。

（出土遺物：第25・26図）前期初頭に位置付けられる東海地域の木島式系土器と胎土に纖維含む土器が混在して、少量の石器を伴って出土している。木島式系土器は、口縁部と胴部の境目で輪積により段を形成した後、箆状工具あるいは半裁竹管状工具によって押引状刺突を施し、刻み目を施している（18~23）。口唇部から口縁部上端では半裁竹管状工具により押し引きが認められる（6~14）。口縁部では矢羽状（11,16,17,22）、格子目（9）、斜位（8,10,14）の条線が顕著であるが、中には矢羽状に施した後、縦位の沈線を施した例も認められる（13）。30は、27号で検出されたNo27の口縁部に横位の押引状刺突が五段認められたものと、施文方法、色調、胎土等から同一固体資料と考えられるもので、口縁部と胴部の境目の部分資料である。斜位の条線を施した後横位の押引状刺突が認められ、輪積により段を形成した後、箆状工具により押引状刺突が施される。土器内面には整形を目的とした指頭圧痕が認められる。

図は口縁部に粗い矢羽沈線を施し、横位の押引状刺突を一周して地文を施した後、4単位の垂下する隆帯とその間に垂下する半竹状工具による押引状刺突文を施す。隆帯上にはやはり半竹状工具により押引状刺突される。口縁部と胴部の接合部は輪積の接合で隆帯となり、その上に半裁竹管状工具により押引状刺突される。纖維土器は口縁部に隆帯文を施すもの（25）や、表面に土器整型の際の箆調整痕が認められる（27）。29は二段繩文R L、28は一段繩文L Rが認められる。石器類は、量的には少ないが、スクレイパー1点、磨石3点が検出され、スクレイパーは27号住居で認められたNo17と製作技法を共有する。

第30号住居址（第18図）

（概観）立石遺跡の最北端に位置する。保存状況は悪く、削平により壁は消失し、炉址も南部の一部が切られる。このような状況からは、住居平面は確認されず、炉址の存在で住居址と確認されたものである。時期決定も有効な遺物も検出されないことから、炉体内に石皿を保持することで、縄文前期末葉木島式期の所産と断定した。

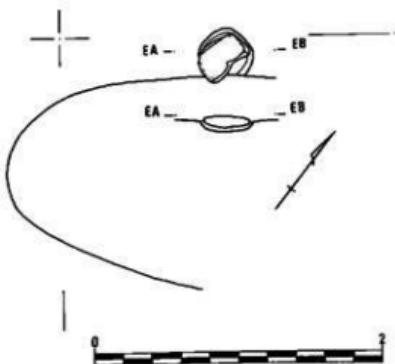
（形状）削平により不明。

（規模）不明。

（壁・床）床面と考えられる固く踏み固められた箇所が炉址を中心に確認された。壁は消失。

（柱穴）不明。

（炉址）長径38cm、短径36cm、深さ8cmで形態は円形を呈する。炉内には石皿が蓋状に配されて、それを取り除くと真っ赤な炉床が現れる。住居廃絶後と同時に石皿を炉址に蓋をするように覆ったものと考える。



第18図 立石第30号住居址

縄文前期石器類（第27～32図）

今回の発掘で、発見された石器類は総数22点であり、その内訳は、石錐8点、スクレイパー2点、楔状石器2点、剥片7点、磨石16点、石皿5点である。この内、石皿の出土状況は、例外なく地床炉に蓋をするように直上から出土しているのが特徴的である。

石錐（第27図）

石錐は、11点が出土している。その内、完形2点、先端欠損品4点、脚部欠損品4点である。この為本遺跡出土の石錐の観察を困難なものとしているが、現状からの観察を試み以下にその

特徴をまとめます。

本遺跡の石器は、体部に刃を有する物が大部分で、刃をもたない物は1点にすぎずそれも石器の未製品の可能性が大きいものである。刃の深さは石器本体の $\frac{1}{4}$ を越えるものは1点であり、それ以外は $\frac{1}{4}$ 未満である。側縁部では直線状を呈するもの3点、外側に湾曲するもの4点、内側に湾曲するもの3点である。先端角度は、 80° 以上の鈍角を呈するものは1点であり、これは刃が $\frac{1}{4}$ 以上を計測するものに対応する。 70° 前後を計測するものは、側縁が外側に湾曲するものに対応する。先端角度が比較的鋭利な $30\sim40^{\circ}$ を示すものは、側縁湾曲内側のものにそれぞれ対応する。

製作技法は、石器製作にあたって、薄い剥片を用意しているものと考えるが、未製品からの観察からは比較的厚手の物も加工対象とされており、素材の剥片剥離技法はランダムなものと想定される。加工はある程度形を整えた後、両側縁、基部の順で調整加工が行われている。

スクレイパー（第27図）

第27、29号住居址より各1点の計2点が検出されている。これらは、素材となる剥片を石核からある程度固定された打面から連続して剥取している。この剥離作業よりは、巾広もしくは横長剥片が剥取される。横長剥片の利用は打面を上部にし、剥片末端全体に加工を施し刃部に用いる。第27号住居出土例・No.17は調整剥離痕は面的に広がり一部は両面から調整が加えられ、断面がレンズ状を呈する箇所も認められ、剥片の形態を大きく変形する。一方29号住居例・No.23での調整は、背面からやや急斜な打撃で調整が行われており、剥片の形態は大きく変わらない。以上のように本遺跡の2点のスクレイパーは石器調整技術に若干の差異が認められるものの、一連の製作過程の基盤内にあるものと考えられる。

楔状石器（第27図）

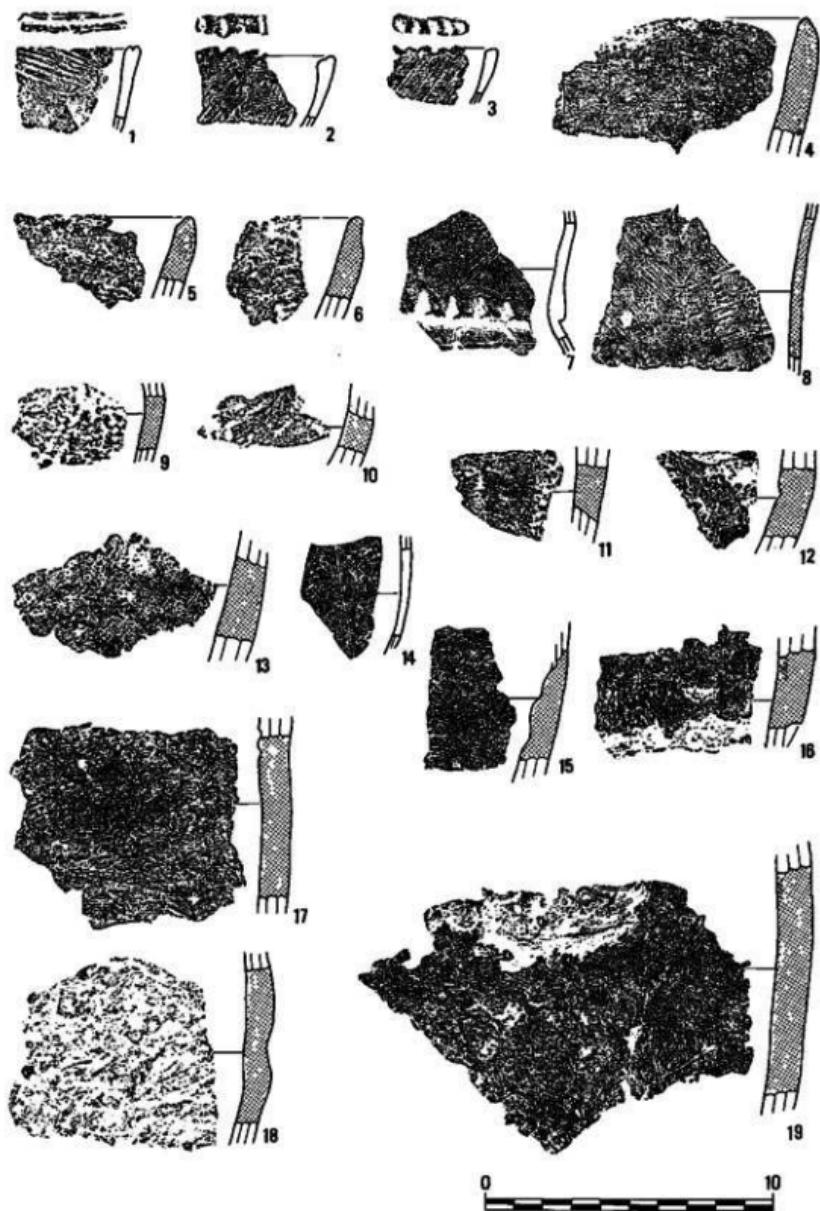
形態の異なる2点が、第27号住居址から検出されている。No.12は、平面形は五角形に近い形態で縦断面は紡錘形に近い。調整加工は上下方向から行われている。No.13は、平面・側面形が、紡錘状に近い形態のものである。両面共に上方からの剥離が伸びており、上下端からは衝撃の際に生じたと考えられる小剥離痕が認められる。

剥片（第27図）

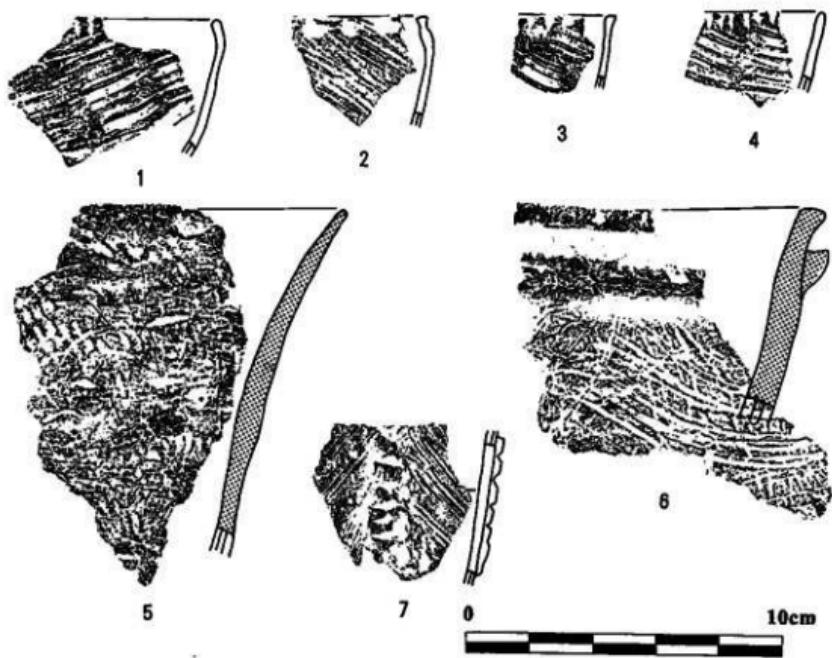
図示可能なものは7点であり、出土量は多くない。石材は黒曜石5点、ホルンフェルス2点である。第25号住居址からは2点が検出される。やや厚手であり不規則な剥離作業により剥取された後、2点共に腹面に丁寧な平坦加工が看取されることより、未製品の可能性が高い。

第26号住居址では、No.3の巾広剥片が検出される。石材はホルンフェルスである。打面は平坦な節理面を利用して、そこから数枚を剥取した後、本品が剥取され調整加工は認められない。

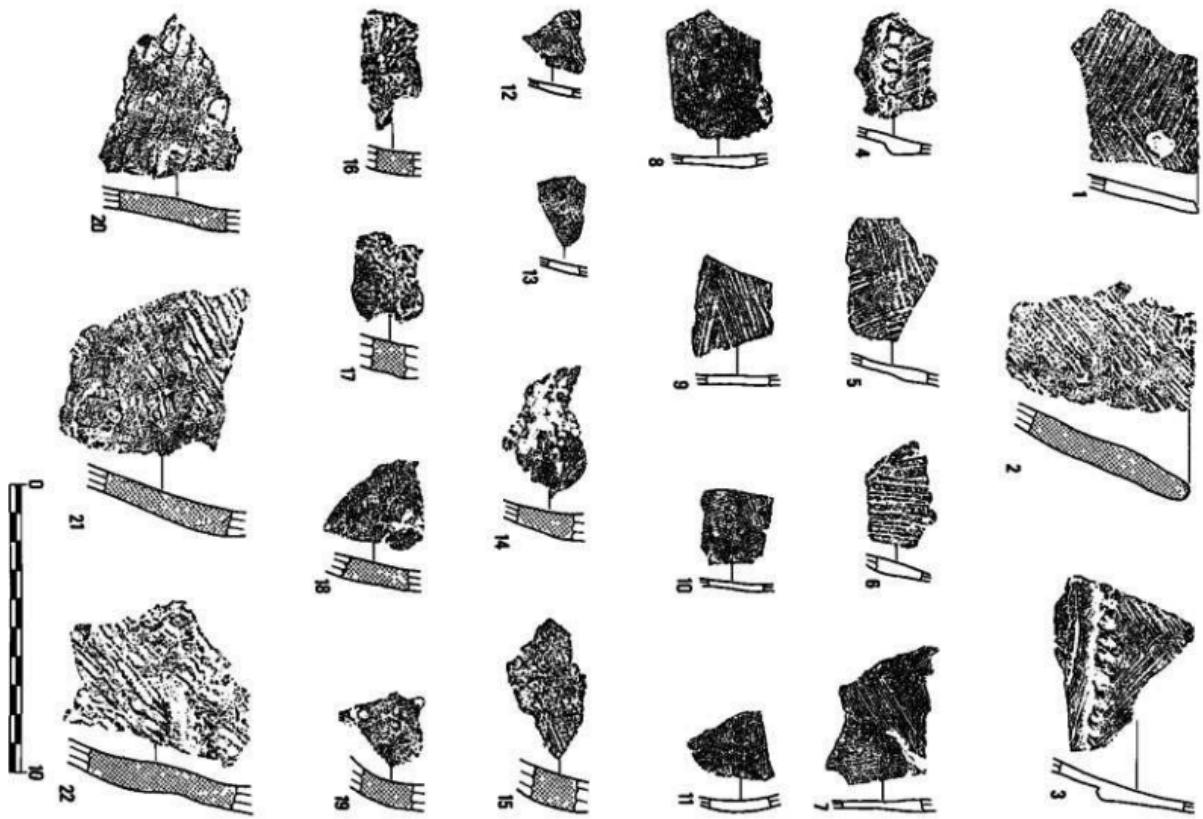
第27号住居址からは、ホルンフェルス1点（No.16）、黒曜石3点（No.14、15、18）が検出された。No.16は、剥片剥離作業の際に剥片頭部が欠損している。背面には、腹面からの調整が縦・横方向から加えられ剥離面が全体の半分程度まで広がっており、石器の未製品の可能性が高い。



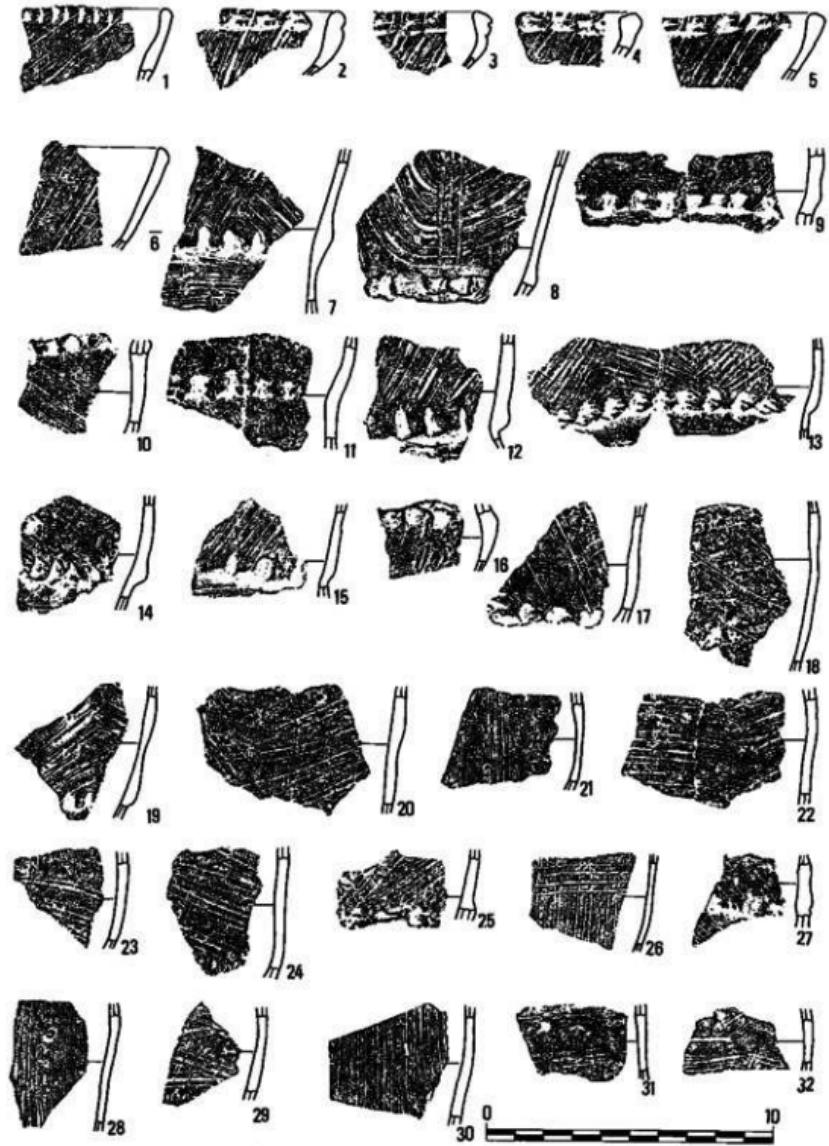
第19图 立石第16号住居址出土遗物



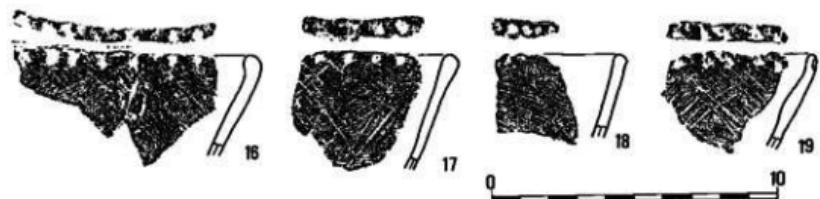
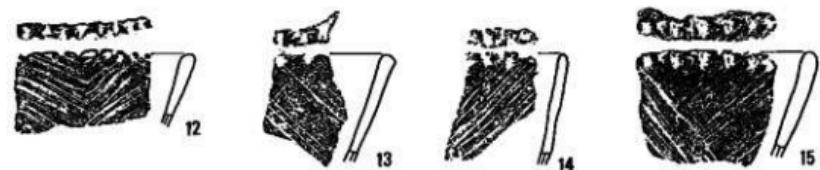
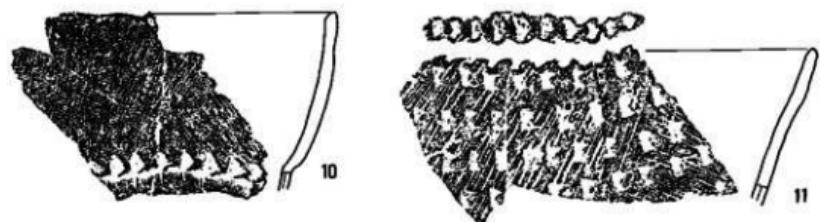
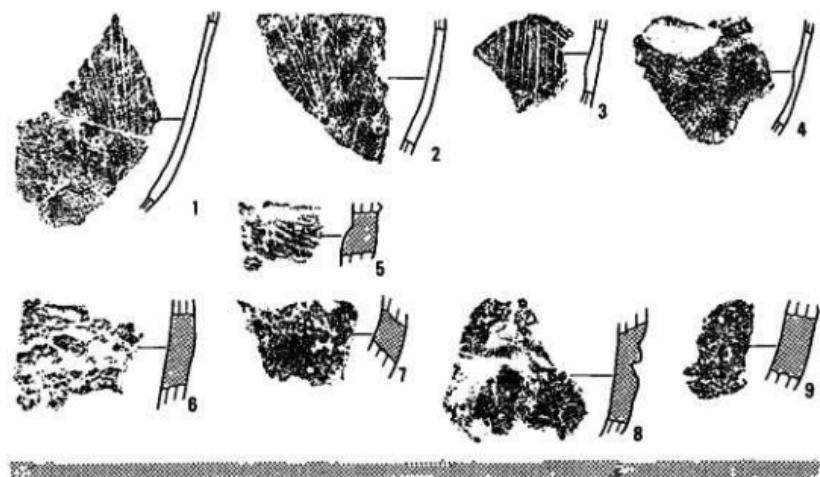
第20図 立石第17号住居址出土遺物



第21圖 立石第25号住居址出土遺物



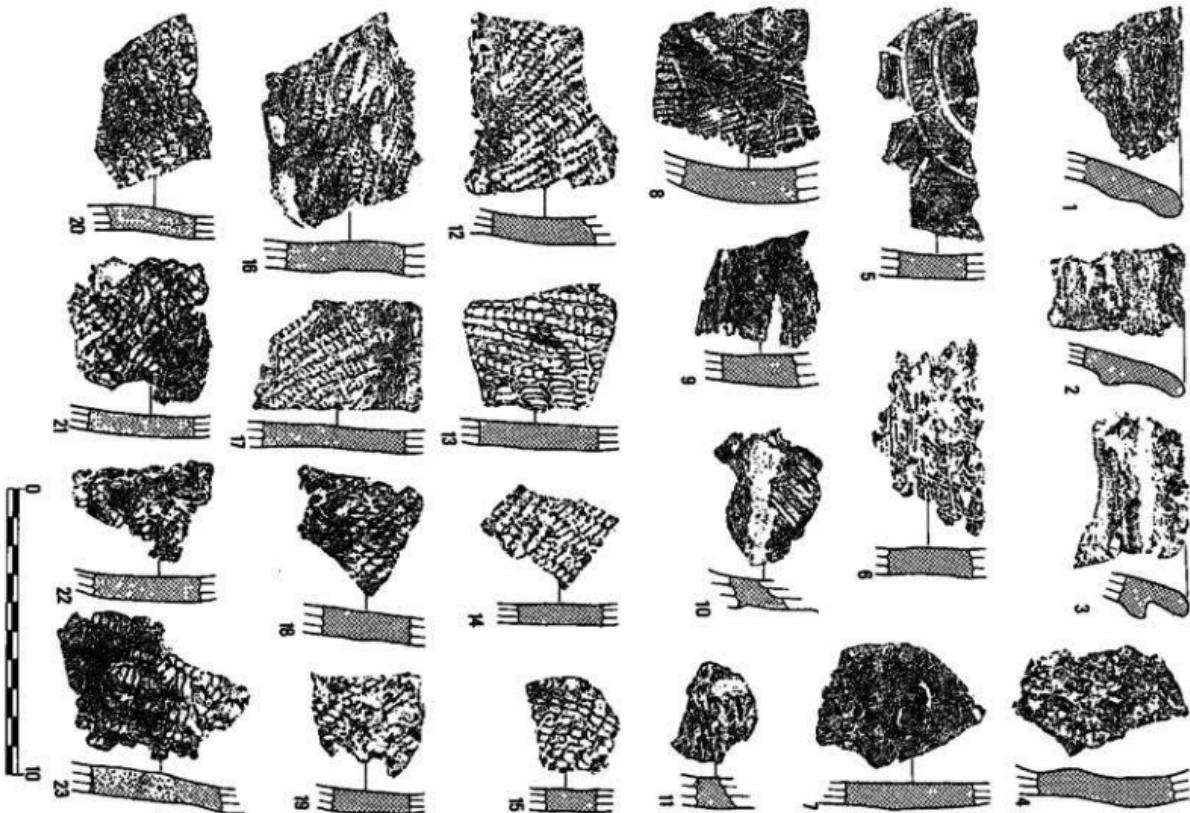
第22図 立石第27号住居址出土遺物

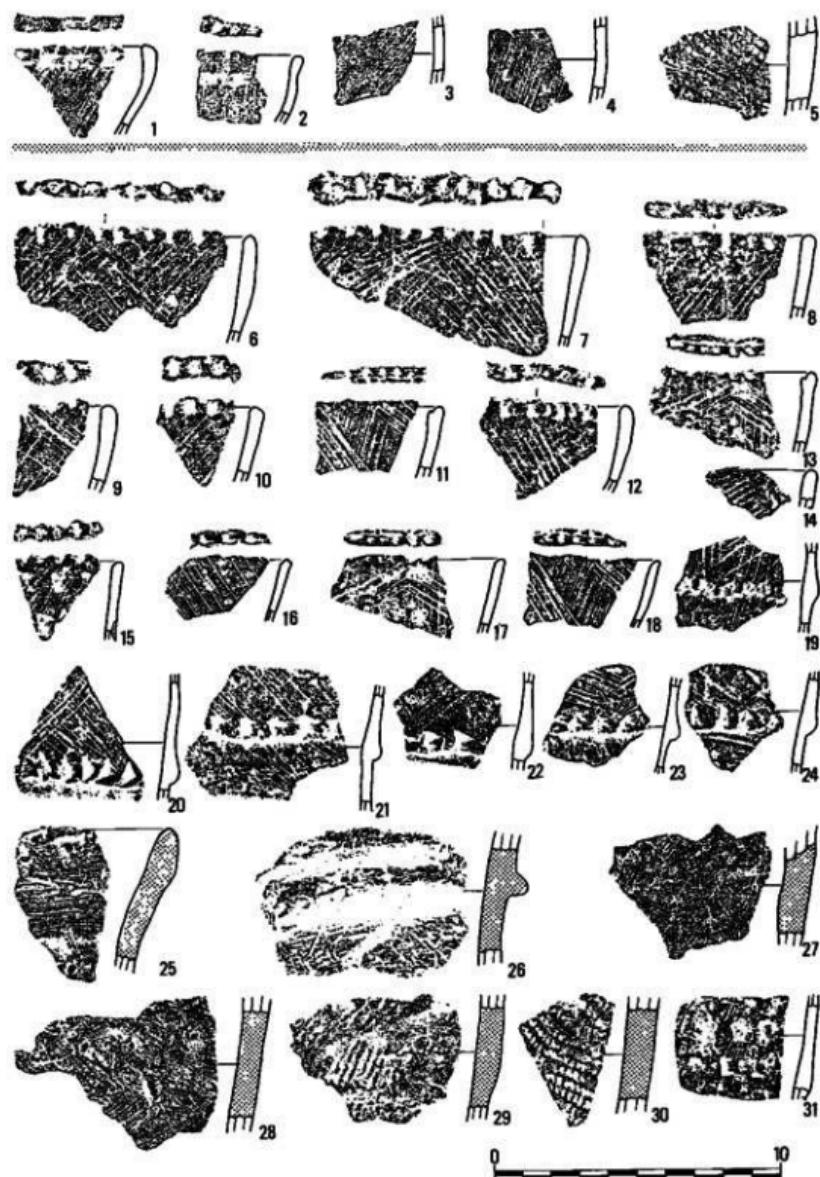


0 10

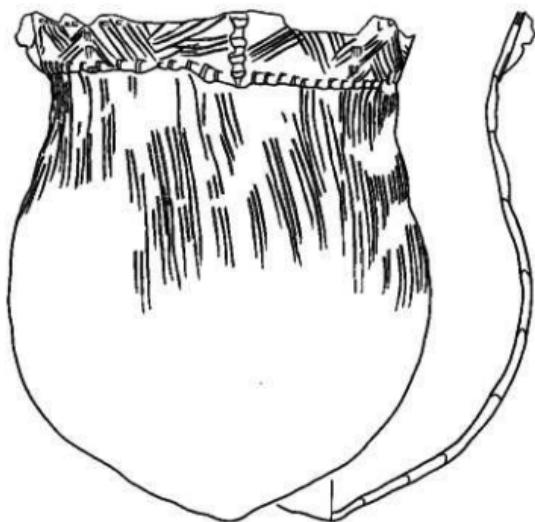
第23図 立石第26・27号住居址出土遺物

第24図 立石第27号住居址出土遺物

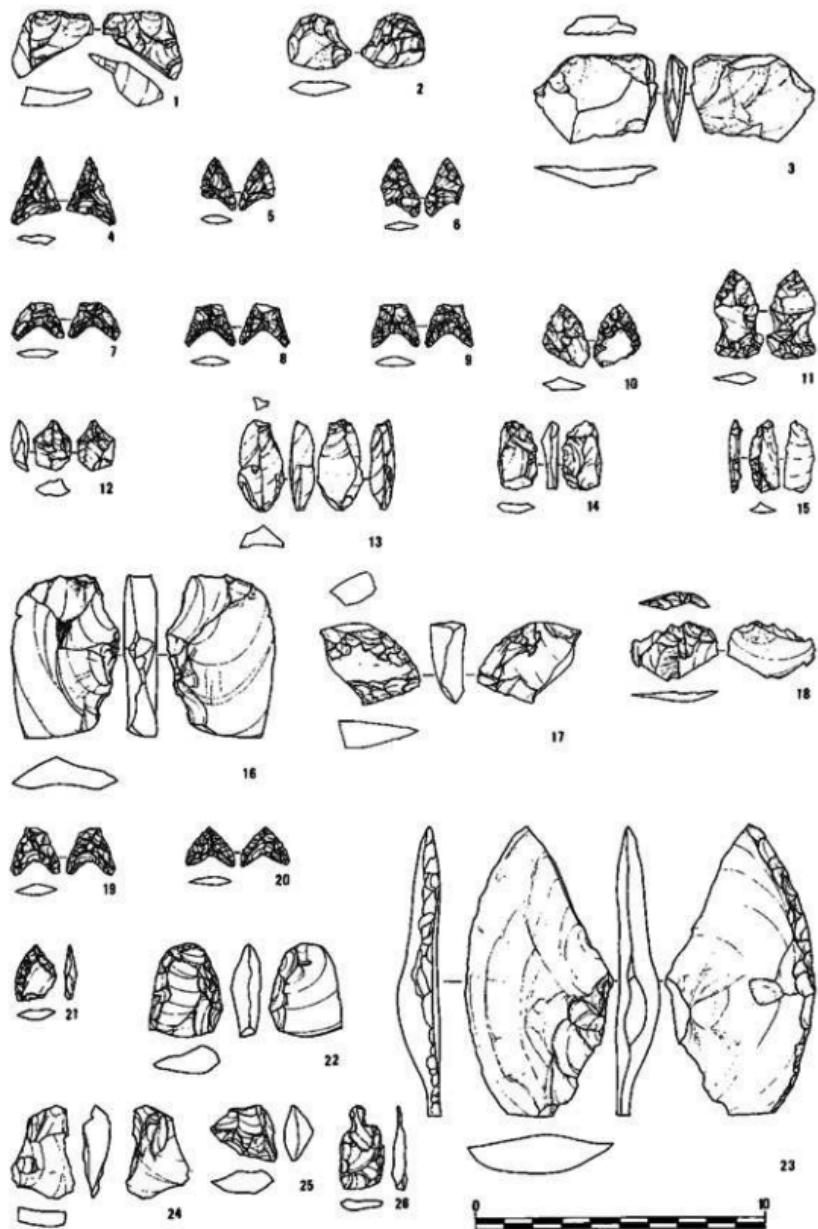




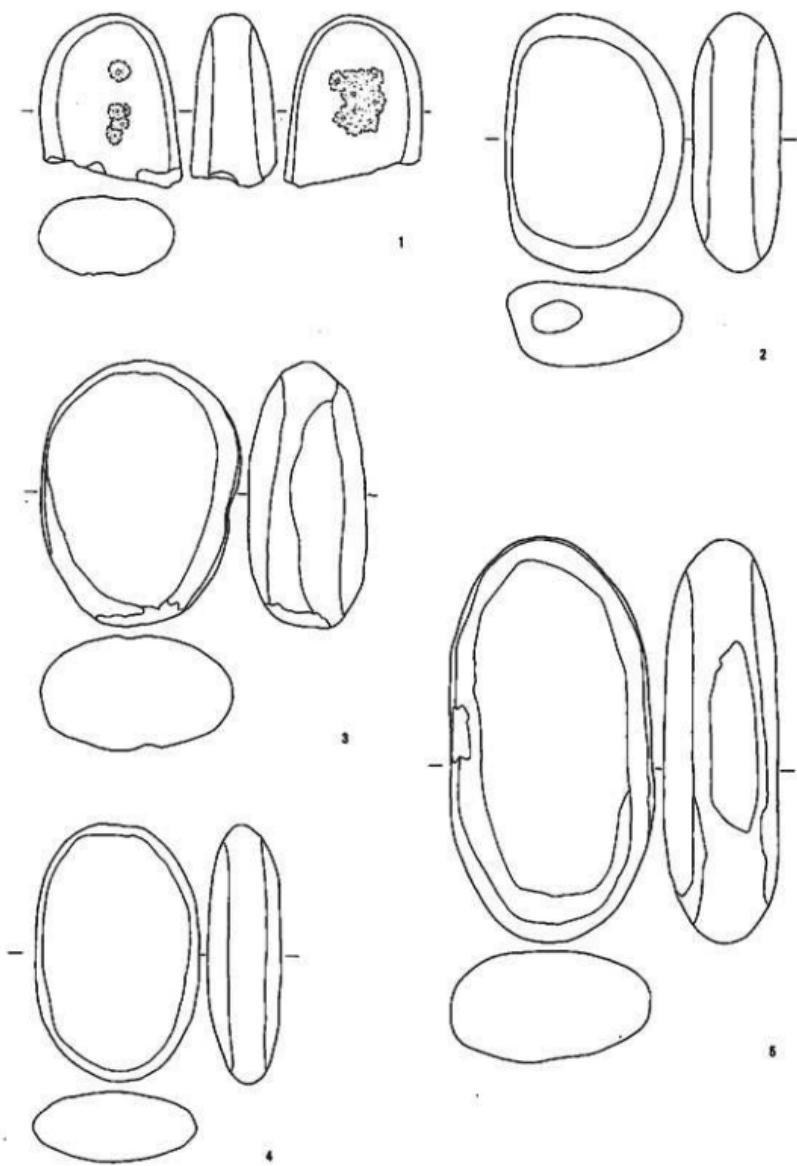
第25图 立石第28·29号住居址出土遗物



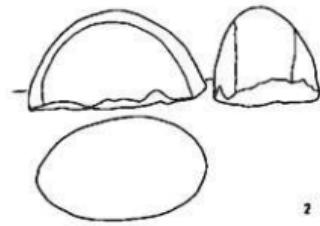
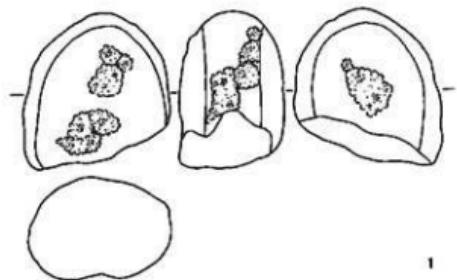
第26図 立石第29号住居址出土遺物



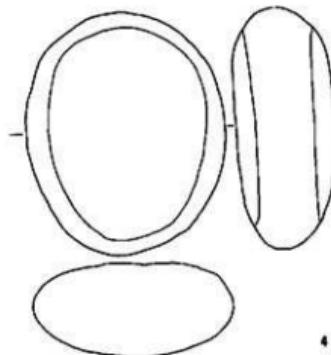
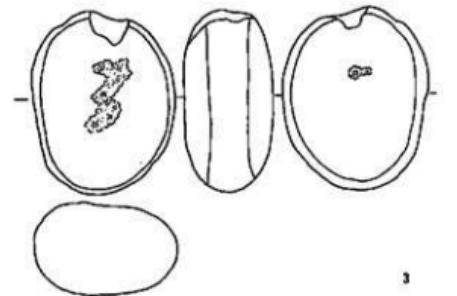
第27図 立石縄文前期出土石器(1)



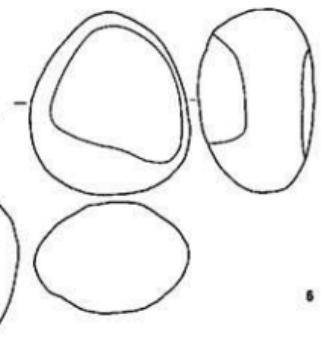
第28図 立石縄文前期出土石器 (2)



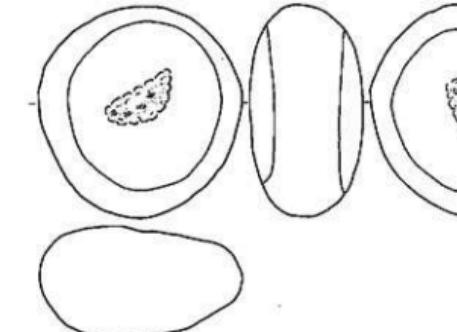
1



3



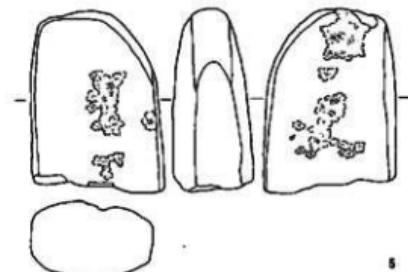
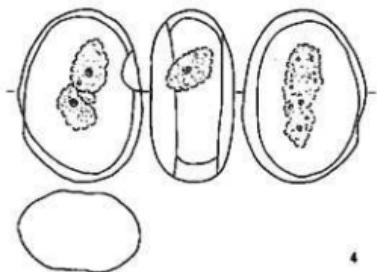
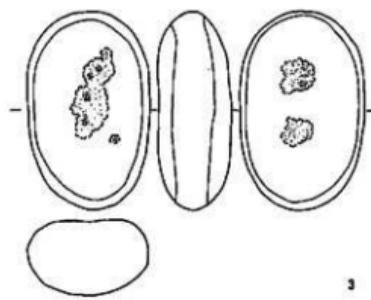
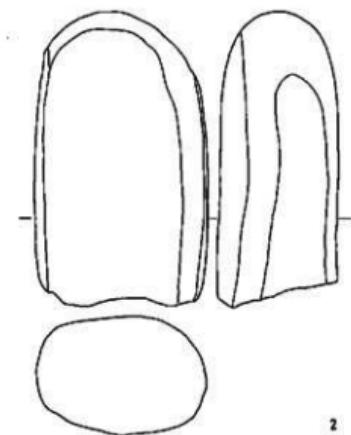
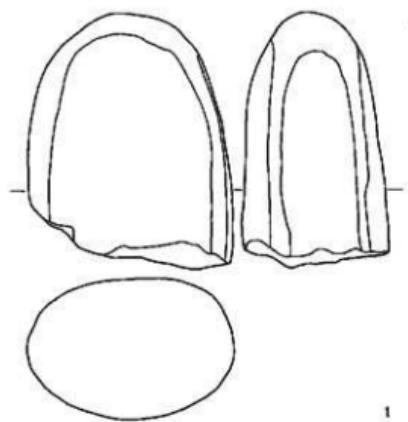
6



5

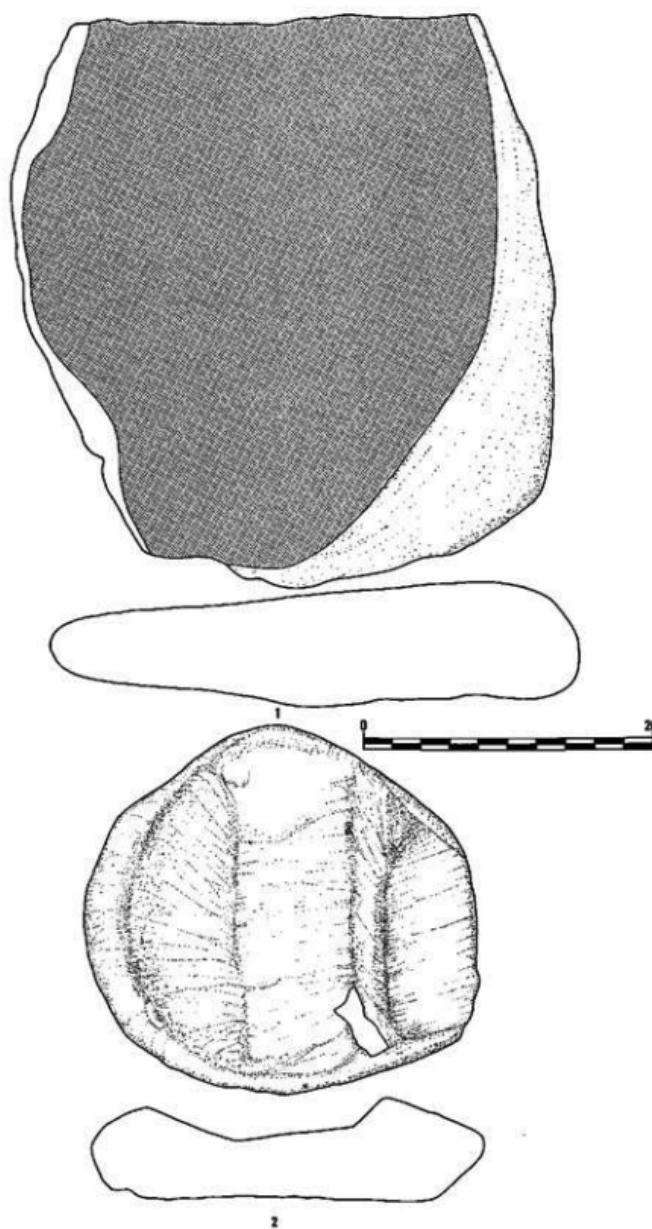


第29図 立石縄文前期出土石器 (3)

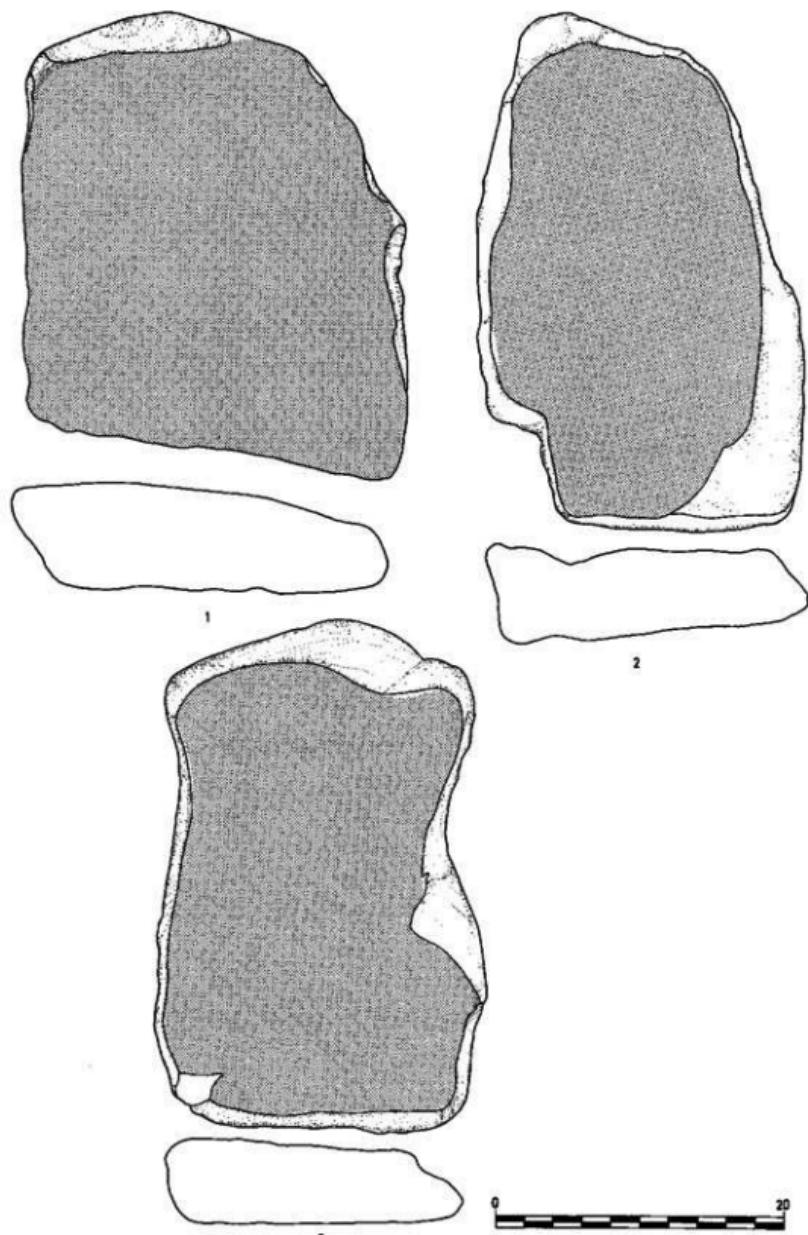


0 10

第30図 立石縄文前期出土石器 (4)



第31図 立石繩文前期出土石器 (5)



第32図 立石縄文前期出土石器 (6)

小 結

立石遺跡から検出された前期初頭の住居址は8軒で内7軒より純粹な形で木島式系土器が出士した。

器形は、口縁が平口縁もしくは波状口縁を呈する。口縁部と胴部とのつなぎ部が最もくびれ、胴部のやや下半でふくらみ尖底に達する。口縁部はくびれ部から緩やかに外反する。

口縁部帶は5cm前後を計測して幅広傾向となる。器壁は2~3.5mm前後できわめて薄く製作される。口縁部と胴部とのつなぎ部は段を有するが27、29号例の中には段は退化して消失するものも現れている。

施文方法は、口唇部では、箇状工具による連続刺突、半竹状工具による連続押し引き、貝殻腹縁連続刺突があり、施文されない場合でも指頭により平坦に調整される例が多い。住居ごとの組み合わせは、以下のとくとなる。

第16号住居址		半竹状工具連続押引	貝殻腹縁連続刺突	沈線
第17号住居址	箇状工具連続刺突			指頭平坦調整
第25号住居址				指頭平坦調整
第27号住居址	箇状工具連続刺突	半竹状工具連続押引		指頭平坦調整
第28号住居址		半竹状工具連続押引		指頭平坦調整
第29号住居址		半竹状工具連続押引		

口縁部では、口縁端に半竹状工具による連続押し引き、爪形連続刺突、箇状工具連続刺突、口縁から口唇部にかけて連続押し引きする例がある。住居ごとでは次のとくとなる。

第17号住居址		半竹状工具連続押引	爪形連続刺突
第27号住居址	箇状工具連続刺突	半竹状工具連続押引	口唇・口縁連続押引
第28号住居址		半竹状工具連続押引	
第29号住居址		半竹状工具連続押引	口唇・口縁連続押引

口縁部帶では、線刻の浅い乱れた格子、矢羽状文が細線により施文されたものが主体をしめるが、貝殻腹縁かそれに近い施文具による条痕(17号1,3,4)や、口縁に平行して5段以上の連続刺突が施文されるものも認められる(27号)。

口縁部と胴部とのつなぎ目の段では、箇状工具連続刺突、刷毛状工具連続刺突、半竹状工具連続押引、指先つまみ出し例がある。住居ごとでは次のとくとなる。

第16号住居址	箇状工具連続刺突		
第17号住居址	箇状工具連続刺突		
第25号住居址	箇状工具連続刺突		指先つまみ出し
第27号住居址	箇状工具連続刺突	半竹状工具連続押引	指先つまみ出し
第29号住居址	箇状工具連続刺突	半竹状工具連続押引	

以上の立石遺跡での土器観察からは、広い口縁部帶をもつ。つなぎ部での施文は指先つまみ

出しは認められるが僅かであり、篦状工具連続刺突に主体は移行しており、段の退化傾向も一部認知され、半竹状工具連続押し引きとともに認められた。さらに器壁は2mm～3.5mmと薄く製作されている。このような土器様相は、東海系木島式土器の第Ⅳ期の範疇に組み入れられるものと考えられる。

本県では、金生遺跡、甲ツ原遺跡、塩川遺跡と山梨県北部に当該期の集落が検出されるが、各遺跡ともに土器内容に差異が存在して時間的変遷が認められる。このグループの中で古く位置付けられるのは金生遺跡2号住居址である。ここでは口縁部に粘土紐を貼付した後、細線を施しているもので、木島Ⅱ・Ⅲ期に比定され、これら一群の中では先行する。残る立石を含めた3遺跡は木島Ⅳ期の所産であるが、塩川遺跡での土器内容に僅かに差異が見いだされる。すなわち塩川遺跡での細線は、立石、甲ツ原に比較して印刻が深く乱れが少なく、さらにつなぎ目の段での施文は指先つまみ出しが顕著である。一方立石、甲ツ原でのつなぎ部ではつまみ出しの手法は残るもの、篦状工具連続刺突を多用している事実や段の退化が認知されることより木島第Ⅳ期の中で塩川遺跡－立石、甲ツ原遺跡の順がとらえられる。以上、甲府盆地での木島系遺跡は、金生－塩川－立石、甲ツ原の時間的変遷をたどることとなる。

参考文献

1976年	山下勝年他	清水ノ上貝塚	南知多町教育委員会
1981年	渋谷昌彦他	木島	富士川町教育委員会
1982年	渋谷昌彦	木島式土器の研究	静岡県考古学研究
1985年	池谷信之	平沼吹上遺跡発掘調査報告書	沼津市教育委員会
1989年	新津健	金生遺跡Ⅱ	山梨県教育委員会
1992年	今福利恵	甲ツ原遺跡概報告Ⅰ	山梨県教育委員会

第2節 繩文中期の遺構と遺物

第32号住居址（第33図）

（概観）立石遺跡の南端に位置する。付近では該期に属する住居址は300m先の上ノ平遺跡に確認されているだけで、分布状況は散漫で、本住居址は現状では単独で立地するものと考えられる。さて、本住居址で特筆すべき事項は、前期末と中期初頭の2基の時代の異なる炉址が検出されている事実である。ここで住居内の出土遺物は前期末の炉体土器を除けば大部分が中期初頭の遺物であるところから、前期末の廃絶後、本住居址は中期初頭期に再利用された可能性が高い。このような在り方を示すものとして上の平第34号住居址がある。また、床面精査中に2基の土壙が検出され、土壤内上面には沈線文系の土器が1固体ずつ認められ、前期末資料を除く住居内出土土器との型式間に時間的差は認められない。

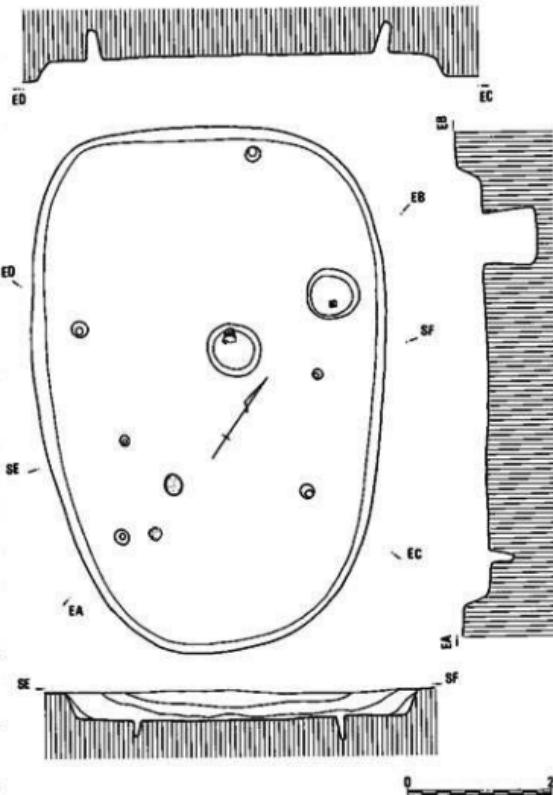
（形態・規模）長軸7.2m×短軸3.5m、深さ36cmで、精円形を呈する堅穴住居址である。

（壁・床）黄褐色ソフトロームを垂直に掘り込んでいる。床面は踏み固められ平坦である。

（柱穴）北壁沿いに3本、南壁沿いに3本と計6本が検出され、その配列は不規則である。

（炉址）住居南側の同一レベル上に、前期末葉期と中期初頭期の1基づつが認められるが、前者の廃棄後、中期初頭期が掘り込み再利用を行った結果として把握できる。

（覆土）4層に分けられ、レンズ状に堆積しているのが確認される。第Ⅰ層は暗茶褐色土で均質であり、長年にわたり堆積した土壤層である。第Ⅱ層は暗黄褐色土で、微細なローム粒子を含んでいる。第Ⅲ層は黒褐色土で暗灰褐色土をブロック状に含む交互層である。第Ⅳ層は黒褐色土とロームブロックとの交互層である。



第33図 立石縄文中期第32号住居址

(遺物出土状況) 出土遺物の分布は薄く、住居内全体から約10cm~15cm程度浮いた状態で出土している。

(出土遺物) 第35・36図：地文に縄文を施すものと、沈線文系のものの二種が出土している。1は、縄文系の唯一の出土例である。炉壁として用いられる炉体土器で胴部のみである。埋設前に上半、胴下半部は欠損していたものと考えられる。地文には空白部分を多く残す粗い縄文Rしが認められ、口縁部と胴部の接合部には一条の押圧隆帯文が一周する。前期末葉の扇平III類併行と考えられる。沈線文系土器（第35図2~15）は、中期初頭・五領ヶ台I式併行と考えられ、その特徴は、口縁部が大きく外反し直立するものと、内湾するものとの二種が認められる。口縁部には連続爪形文、原体撲糸の連続押圧に近いもの、沈線による羽状文、格子目文が認められる。括部では、直線による波状集合沈線が横帯で施され、胴部以下では垂下する集合沈線や弧状文等が施文されている。

土壤

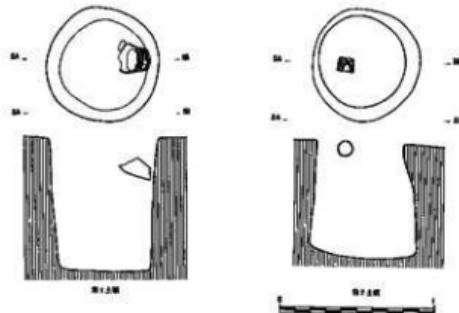
第32号住居址の床面精査中に、住居中央よりやや北側と北部壁寄りの2カ所に検出されたものであり、住居と土壤の時間的先後関係は不明であるが、位置、土壤の形態、遺物出土状況からは1号土壤は、縄文土壤祭式施設、2号土壤は貯蔵穴に近い性格が与えられる。

第1号土壤（第34図）

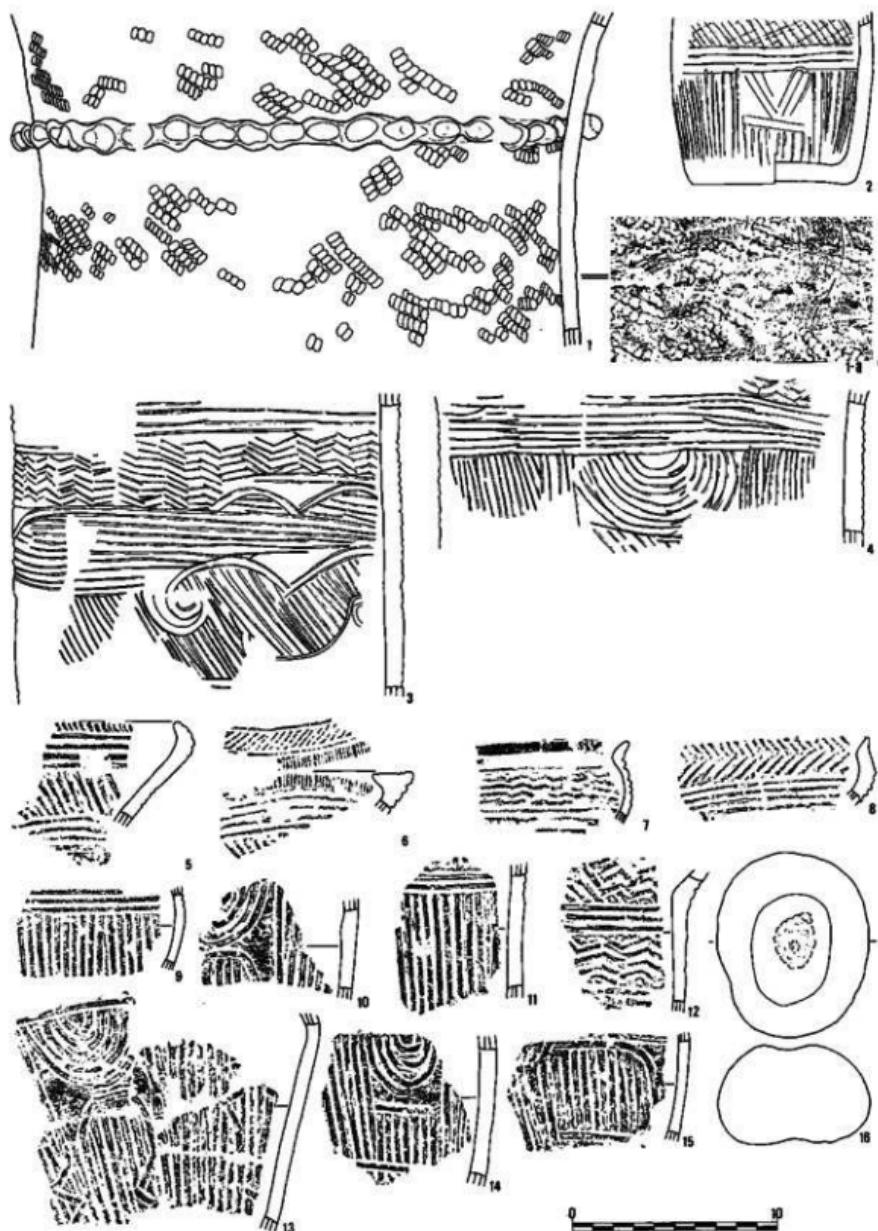
住居中央より、やや北側に位置する。径74×72cm、深さ85cm、57×55cmを計測する。土壤壁は垂直に掘削され底部にいたる。底部は、ほぼ平坦である。遺物は、五領ヶ台I式の沈線文系の土器1個体（第34図3）が口縁部と胴部以下を欠損する形で出土した。その状況は、土壤底部より約55cm浮上して、口縁部部分をやや上方に斜位に認められた。

第2号土壤（第34図）

住居北より、壁に20cm弱で到達する位置に認められた。径55×59cm、深さ76cm、底径72×69cmを計測して、底部径の方が広いフラスコ状に近い形態を示している。底面は平坦ではなく、壁沿いが高くやや湾曲したものとなっている。遺物は、五領ヶ台I式の沈線文系の小型土器（第34図2）で、胴上半を欠き、横位に1号同様に浮上して、土壤最上面に認められた。



第34図 立石縄文中期第32号住居址内土壤



第35図 立石縄文中期第32号住居址出土遺物 (1)

第96圖 立石繩文中期第32号居住址出土遺物(2)



第3節 弥生時代の遺構と遺物

第1号住居址（第37図）

（概観）立石遺跡住居群の中央部より北側7mに位置して、弥生終末期の第4、2号址に隣接する。発掘区の西側であるが完掘される。

（形状・規模）長径7.35m、短径4.1mである。形状は整った小判形である。

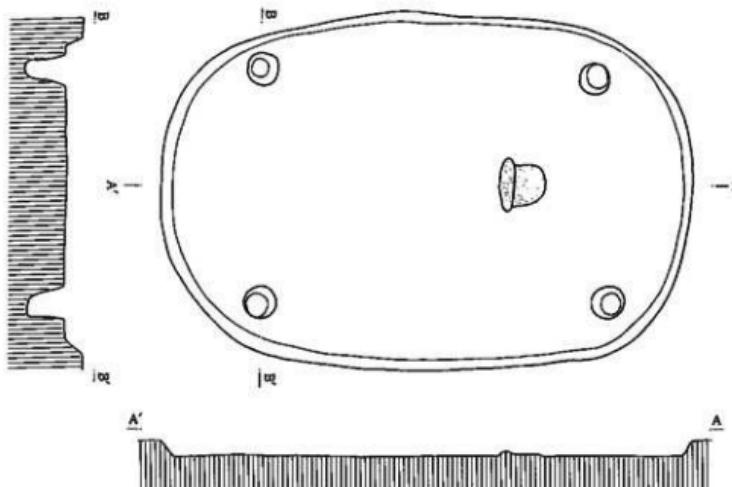
（壁・床）黄褐色のソフトロームを15cm前後掘り込んだ後、床面を平坦にする為、ローム層を全体に敷き調整して踏み固められる張床である。

（柱穴）主柱穴4本が、対角線上に配置される。

（炉址）30×45cm、梢円形、炉床粘土張り。

（覆土）3層に分けられる。第I層黒色土でサラサラした土壤層である。第II層暗茶褐色土で小量ローム粒子を含む。第III層は暗茶褐色土に多量のカーボンローム粒子を含む。

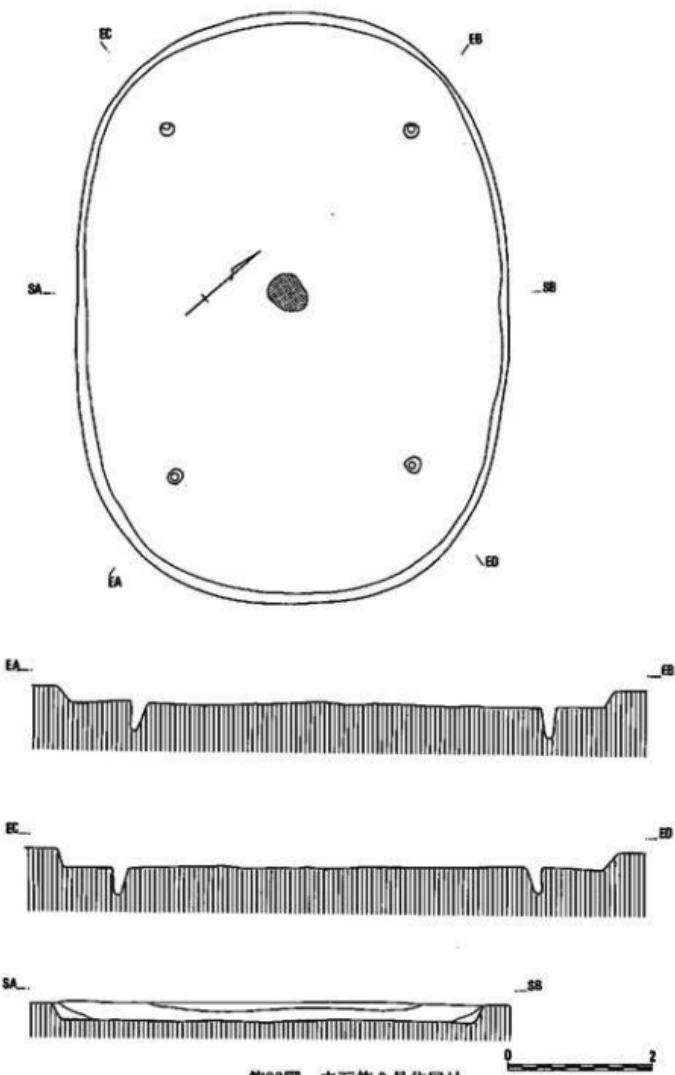
（出土状況）遺物料は少なく集中箇所は認められない。（出土遺物）遺物は、広口壺、小型壺が出土している（第58図1～5）。1は広口壺で、括れ部から大きく開き外反する。外面は肩部で継位、斜位、横位の刷毛調整が、内面肩部から上位にかけて斜位、横位の刷毛調整が認められる。小型壺は括れ部から直線的に外反する。体部は胴中央に最大径を有する球形に近い形態を呈するものと推察される。外面は斜位、継位の刷毛調整が丁寧に施され、内面では口縁部で丁寧な横刷毛調整が認められる。



第37図 立石第1号住居址

第2号住居址（第38図）

（概観）縄文前期の住居址群の北西の一部と重複関係にある。南3mに4号と隣接して、発掘区のほぼ中央に位置する。



第38図 立石第2号住居址

(形状・規模) 長軸4.06m、短軸3mで梢円形を呈する大型な竪穴住居跡であるといえる。

(壁・床) ソフトロームをほぼ垂直に掘り込んで床面に達する。床面は全面に固く踏み固められて平坦である。

(柱穴) 主柱穴4本が対角線上に認められる。

(炉址) 50×30cmの不正円形を呈して、中には焼土が充填する。

(覆土) 3層に分けられ、レンズ状堆積が認められる。第Ⅰ層は黒褐色土で赤色スコリア、黄色粒子を含む。第Ⅱ層は暗褐色土でブロック状の暗黄色土との交互層である。第Ⅲ層は黒褐色土とロームブロックの交互層である。

出土遺物は、本住居の時期決定となる資料は検出されなかった。

第3号住居跡（第39図）

(概観) 立石遺跡北部住居群の東南端に位置して、東南の至近距離第に22号住居跡が、又南西に第20号住居跡が存在する。

(形状・規模) 長径4.08m、短径3.08mを計測する。住居西側で最大径を測り、東側で最短で、北・南辺の計測値は一致する。南辺のみが外側に大きく張り出し弧状となるが他の辺は直線に近い状態である。四隅は丸みを呈しており、隅丸の台形状を呈する竪穴住居跡である。

(壁・床) ソフトロームを40cm、ほぼ垂直に掘り込んで床面に達する。床面は住居中央を中心的に部分的に踏み固められた箇所も認められるが、全体的に軟弱であるといえる。

(柱穴) 主柱穴は4本がほぼ対角線上に配置されている。この内南側に位置する1本は梯子受穴の付属施設と考えられ、土手状の高まりの中央を掘り込んでいる。平均径15cm、深さ45cmでしっかりした柱穴である。

(炉址) 長径80cm、短径44cm、深さ10cmの梢円形を呈し中には焼土が充填する。住居の北東寄りに位置して北側の2本の主柱穴間に配置されている。

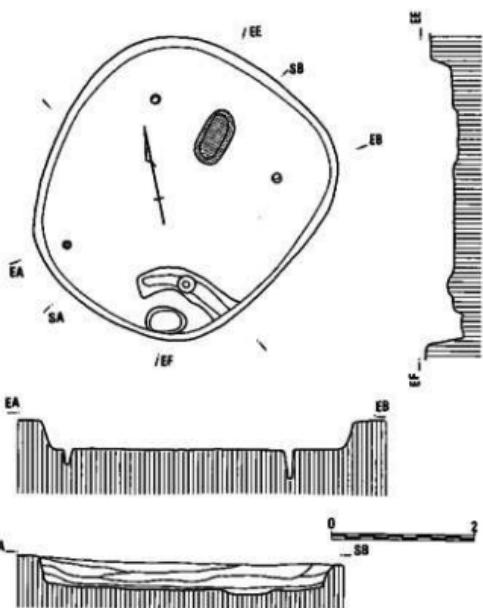
(その他) 南壁沿いには径56×36cm、深さ20cmの梯子受穴とそれを囲むように（白色粘土による土手状施設が幅40cm、高さ10cm）が弧状に認められる。

(覆土) 5層に分けられる。第Ⅰ層は黄褐色土であり均質であるが一部にロームブロックを混入する箇所も認められる。第Ⅱ層は暗褐色土であり、黄色バミス、木炭粒子を含む。第Ⅲ層は黄茶褐色土で木炭粒子を含み緻密である。第Ⅳ層は暗褐色土で赤色バミス、木炭粒子を含む。

第V層は黒褐色土とロームブロックとの交互層である。

(出土状況) 遺物は極めて少なく、住居東南隅より破碎された礫数個とともに、壺形土器破片1点が床面より5cm程度浮上して認められた。

(出土遺物) 出土遺物は少量であり、図示可能なものは1点である（第58図3）。壺形土器の胴部中央より下半部で、底部から大きく開く形態である。土器外面は刷毛調整後、丁寧な磨きが施され、刷毛調整は胴部下端に僅かにその痕跡を認める程度である。内面は胴部下位に横



位の刷毛調整が認められるが、それより上方では認められない。色調は黄赤褐色である。

第39図 立石第3号住居址

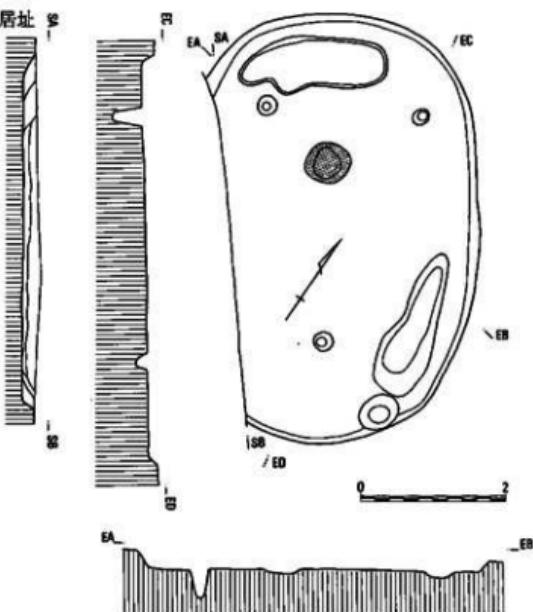
第4号住居址（第40図）

（概観）立石住居群の中央やや北よりに位置し第1・2号住居址が北側に位置する。発掘区の西側に寄るため住居の一部は未発掘となる。

（形状・規模）長径5.92mを計測する整った椭円形を呈する竪穴住居址である。

（壁・床）壁はやや傾斜に平均20cm掘り込んで床面に達する。床面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。

（柱穴）完掘されないが、現状では平均径28cm、深さ45cm前後を計測する主柱穴3本が認められる。



第40図 立石第4号住居址

第5号住居址（第41図）

（概観）本住居址は北に3号住居址、南に7号住居址がある。それぞれの距離は約8mとなっている。

（形状・規模）長径6.1m、短径5.0mを計測する。整った梢円形を呈する竪穴住居址である。

（壁・床）ソフトロームをほぼ垂直に掘り込んで床面に達する。南壁側で約50cm、北壁側で約30cmとなる。

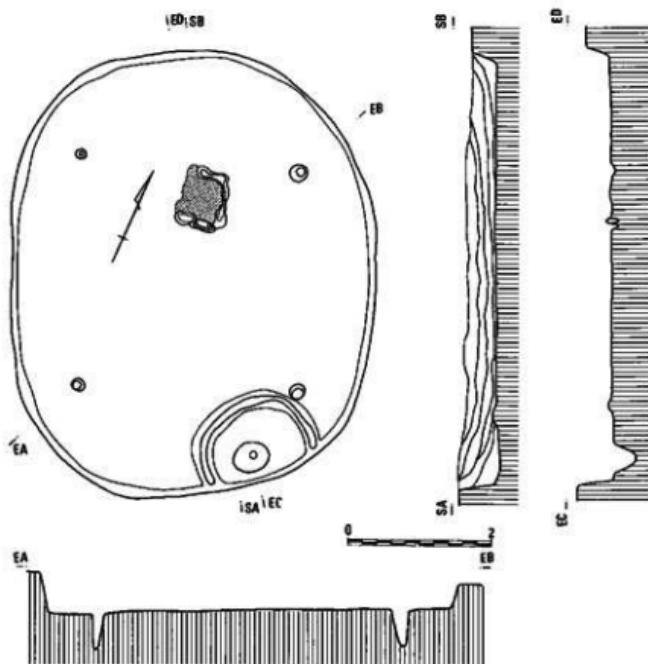
（柱穴）主柱穴は4本が対角線上に配置されている。柱穴の深さは約50cmである。

（炉址）長径80cm、短径60cmで長方形を呈し、中に焼土がある。南辺の一部には炉を囲っていた石が残る。

（その他）南壁沿いには径50×40cm、深さ30cmの梯子受穴とそれを囲むように幅30cm、高さ10cmの土手状施設が弧状に認められる。

（出土状況）遺物量は少なく、小破片が出土している。

（出土遺物）遺物は、台付き甕、甕破片である（第59図15～27）。16は台付き甕口縁部であり、口縁上端には刻み目が施されている。



第41図 立石第5号住居址

第7号住居址（第42図）

（概観）本住居は5号住居址から南8mの空白地帯を経て存在する。住居南半分は歴史時代に属する8号住居址と重複関係にある。発掘区のほぼ中央に位置する。

（形状・規模）住居平面の一部を消失しているが、残存部分より椭円形プランが推定可能である。最大残存長6.8m、短径4.2mである。

（壁・床）ほぼ垂直に掘り込んで床面に達する。床面は固く踏み固められた箇所も認められるが軟弱箇所が目立つ。削平が進んでおり保存状態は悪く現状での壁高は平均20cmである。

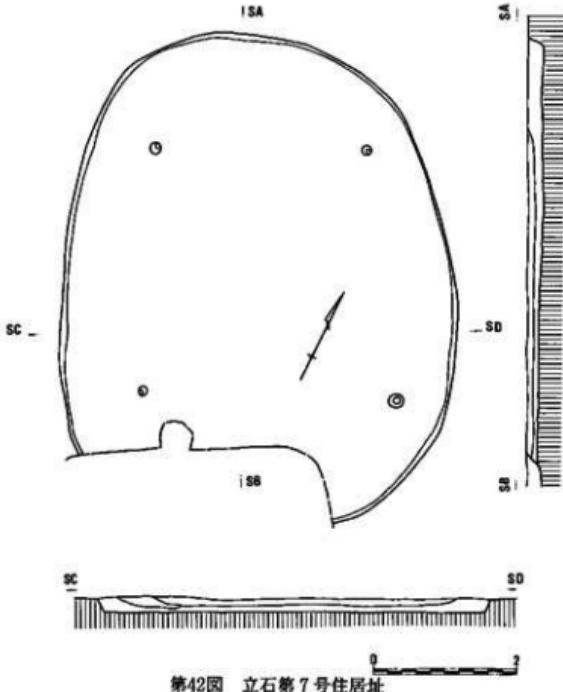
（柱穴）4本（径15cm、深さ40cm）が対角線に認められ、均整のとれた配置といえる。

（炉址）8号住居と重複関係にあり、恐らくこの際に削平され消失したものと考えられる。

（覆土）3層に分けられる。第Ⅰ層は黒色土でサラサラした土壤層であり長年にわたり堆積したもので焼土、木炭粒を含む。第Ⅱ層は茶褐色土であり黒褐色土およびロームブロックとを含む交互層である。第Ⅲ層は暗褐色土であり、ロームブロックを混入する交互層である。

（出土状況）遺物量は少なく、住居内全域に認められる。

（出土遺物）遺物は、高坏、S字甕、甕、台付甕であり、いずれも破片である（第60図1～11）。高坏は1、3脚部と坏部の接合点より直ちに外反して、坏部の器高は小さく浅い。丁寧な磨きが、縱方向に認められNo.3では内外面に顯著である。



第42図 立石第7号住居址

第11号住居址（第43図）

（概観）立石遺跡住居群の最北端に位置して、第1号方形周溝墓と重複関係にある。これより、宮ノ上住居群まで100m近く住居址の痕跡は検出されない。

（形状・規模）長径7.64m、短径6.44mの橢円形を呈する。

（壁・床）削平の為、壁高は16cm程度しか認められず北部ではすでに消失している。壁はやや傾斜をもって掘り込まれて床面に達する。

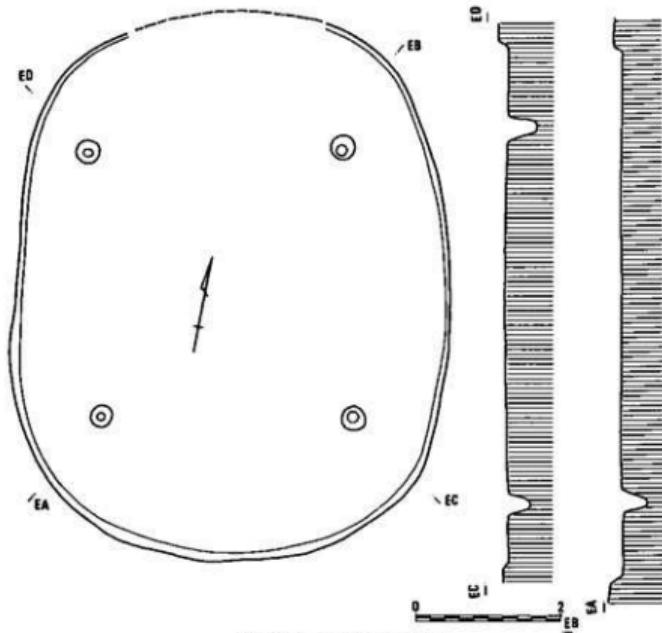
（柱穴）径32cm、深さ40cmの主柱穴が対角線上に配置されている。

（炉址）住居中央が第1号方形周溝墓と重複関係にあり破壊されている為検出されない。

（覆土）確認面が浅く削平の為、壁および覆土は消失して床直上のI層のみが残存している。黒褐色土のサラサラした土壤層で均質であり、僅かに黄色スコリア、木炭粒が含まれる。壁際ではロームブロックを含む交互層となる。

（出土状況）遺物量は少なく、僅かな破片が住居北側にかけて床浮上で出土している。

（出土遺物）遺物は高坏、甕、台付甕でいずれも破片で出土している（第61図4～13）。4、5は台付甕口縁部破片で口唇部に刻目を配し内外面には丁寧な刷毛調整が認められる。6は大きく外反する口縁部を有する。両面に刷毛調整が施され、表面では縦位に近い方向で、裏面では横位方向に認められる。



第43図 立石第11号住居址

第15号住居址（第44図）

（概観）立石北側住居群の南部を形成する。東側の21号住居址と重複関係にあり、すぐ北側には、1号方形周溝墓が位置する。立石・宮の上遺跡の発掘区のはば中央に存在する。

（形状・規模）最大径6.32m、短径4.8mである。西壁が直線状を呈するほかは、壁全体が外側に僅かに張り出す弧状を呈しており橢円形に近い形態である。

（壁・床）固く踏み固められた箇所も認められるが、軟弱箇所が目立つ。壁高は15cm前後である。

（柱穴）柱穴25cm~40cm深さ45cmの4本が対角線上に検出されたが、北側2本が壁際から住居の内側に南側2本が壁際に位置する為、柱穴対角線は全体的に南寄りとなる。

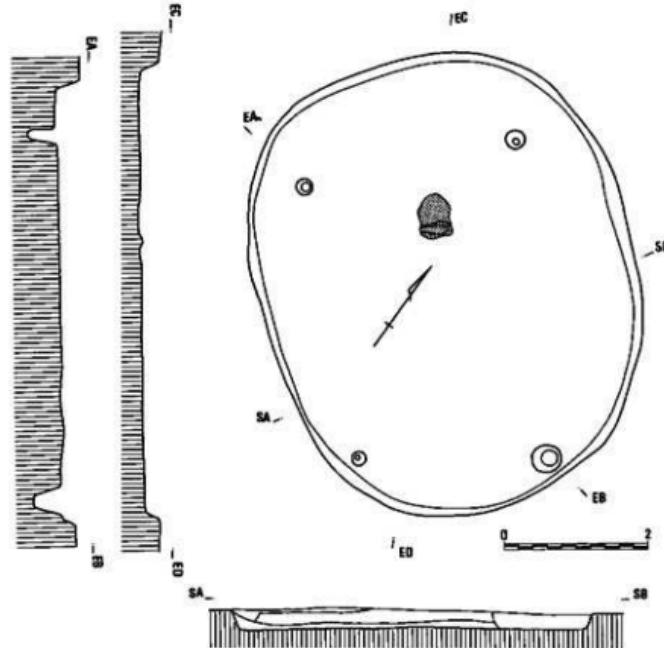
（炉址）炉は長径60cm、短径40cmで南端には粘土による枕状の高まりを形成し、炉床も白色粘土を張る。炉床面は赤色に酸化している。住居中央よりやや北寄りに位置する。

（覆土）自然堆積は2層が認められる。第Ⅰ層は耕作による擾乱である。第Ⅱ層は黄褐色土で長年にわたりゆっくり堆積した土壤層である。僅かにローム粒、木炭粒が含まれる。第Ⅲ層は、茶褐色土とロームブロックとの交互層であり、わずかに赤色スコリアを含む。

（出土状態）遺物量は少なく、破片状で住居全体に散漫に検出される。磨製石鎌1点が住居より検出される。

（出土遺物）遺物は甕、台付甕と磨製石鎌1点が出土する（第62図7~18）。7、9、11は甕の口縁部破片である。

7、9では胴部との接合部で急に外反する。刷毛調整後磨きが施されるものや、内外面に刷毛調整を残すものとが認められる。8は口唇部に刻み目が施され前面に縦位の刷毛調整が認められる。15は磨製石鎌、薄手で鋭利な先端を有する。胴部下半の基部よりに有孔をもつ。



第44図 立石第15号住居址

第20号住居址（第45図）

（概観）北側住居群の南部に位置する。北東に位置する15、3号住居が最も近く、本住居の周辺の遺構分布は散漫である。発掘区の西寄りに位置して、西半分は未調整である。

（形状・規模）未調査部分が多いが直径3.02mの推定円形を呈する竪穴住居跡である。

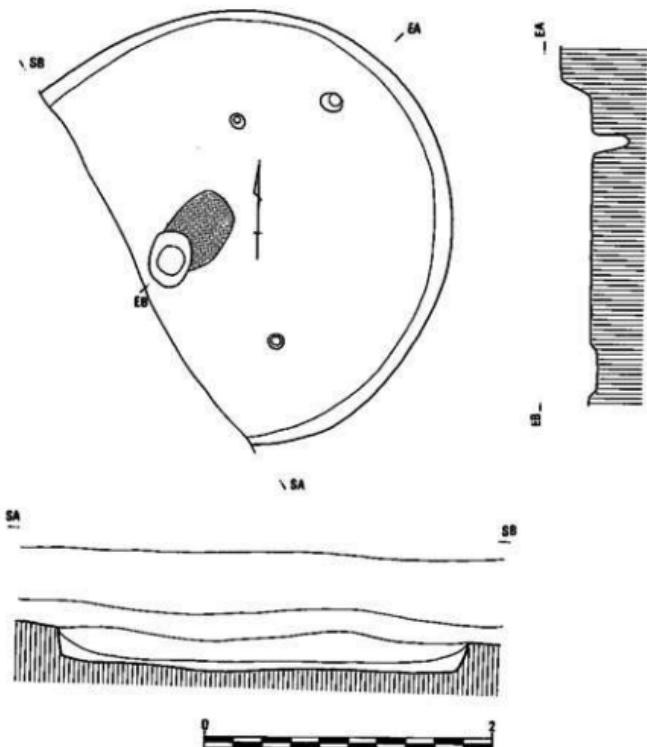
（壁・床）ソフトロームを垂直に平均40cm掘り込んで床面に達している。床面は踏み固められた痕跡は認められず全体に軟弱である。

（柱穴）西側の大部分を未発掘で残すが、検出された3本は不規則な配列である。

（炉址）長軸56cm、短軸36cmの楕円形を呈し住居中央部に位置する。内部には焼土が充填する。

（その他）炉址南部に長径38cm、短径28cm、深さ30cmの皿状ピットが認められるが、炉を切って掘削していることより、住居廃絶後に掘削行為がなされたものと考える。

（覆土）第Ⅰ・Ⅱ層は住居上面の堆積土であり、茶褐色土、明茶褐色土である。第Ⅲ・Ⅳ層が



第45図 立石第20号住居址

住居覆土であり、レンズ状堆積が認められる。第Ⅲ層は黒色土のサラサラした土壤層であり、ローム粒、木炭粒を含むが均質である。第Ⅳ層はやはりサラサラした茶褐色を呈する土壤層であり均質であるが壁際付近ではローム粒の混入が多く認められる交互層である。

(遺物出土状況) 遺物量は僅かである。住居やや西側で土器口縁部(No.20)と数点の土器片の集中出土が認められた。

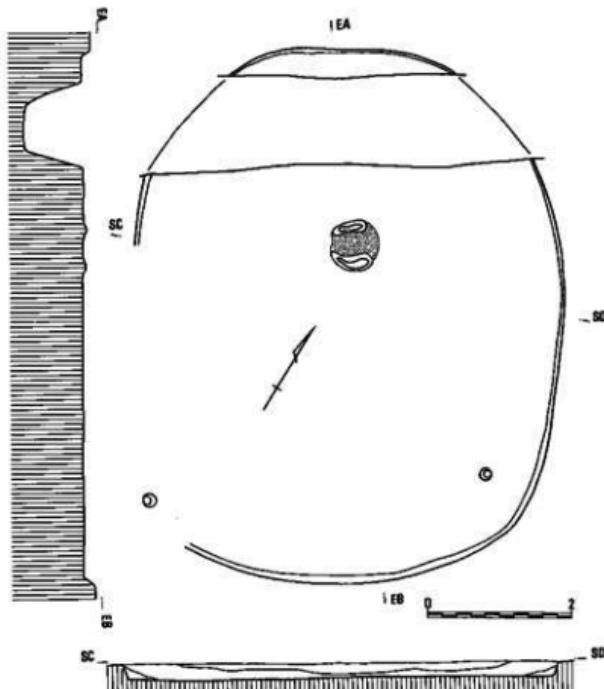
(出土遺物) 遺物は、壺、台付壺破片である(第63図20~25)。20は口縁部から肩部上端部破片である。口縁は体部の接合部から湾曲気味に垂直に立ち上がり上半で極端に外反する。口縁上端は折り返して段状となる。外面は刷毛調整後磨きが加えられる。肩上端では5条の波状の櫛描文を施し2個一単位の円形浮文を配する。内面では刷毛調整後磨きが施され、口縁部では波状文が加えられるが磨きの際に潰れた様相を呈している。21、22は口縁部に刻み目を有する台付壺口縁部である。外面は縦位、内面横位の刷毛調整が認められる。外反度は21は強く、22は緩い。23は肩部で縱方向の刷毛調整後斜位方向の刷毛調整が認められる。

第21号住居址(第46図)

(概観) 立石北側住居群の南部に位置し発掘区の中央に存在する。

15、22号住居、1号方形周溝墓と重複関係にあり、住居北部が北壁付近を残して幅1.5m前後で切られている。

(形状・規模) 長径7.36m、短径6mを計測する。南壁は緩やかな弧状で外側に張り出す。南側コーナーは西部では削平され消失するが、東部コーナーは隅丸でそのまま緩やかな弧で外に張り出し東辺に移行するが、北辺での状況からは切り合い関係にある第1号方形周溝墓外縁部付近から極端に内湾する為形態は卵



第46図 立石第21号住居址

形に近いものとなる。

(壁・床) ソフトロームをやや傾斜に平均25cm前後掘り込んで床面に達する。床面は炉周辺に固く踏み固められた箇所も認められるが全体的には軟弱である。

(柱穴) 南壁沿いの2本径20cm、深さ45cmが認められしっかりした柱穴である。北壁沿いの柱穴は1号方形周溝墓との重複の為検出不可能である。

(炉址) 住居の北側に位置する。長径68cm、短径56cmの円形に近い形態を呈する。炉床には白色粘土を張り両端には粘土の枕状の高まりを平行に配置している。

(覆土) 3層に分けられ、レンズ状堆積が認められる。第Ⅰ層は土壤層で黒色を呈している。第Ⅱ層は床直上に堆積したサラサラした黒茶褐色を呈する土壤層であり、均質であるが少量の木炭粒を含んでいる。第Ⅲ層は第Ⅱ層にロームブロックを多量に含む交疊層である。

(出土状況) 遺物量は少なく集中出土ではなく、住居全般に散漫に認められる。遺物は第Ⅱ層中位から下部にかけて出土するが床面出土は認められない。

(出土遺物) 遺物は広口壺、台付壺、鉢(第64図1~9)である。1は広口壺の胴下半部で底部から大きく外反する。最大径が胴下半にある。外面は刷毛調整後丁寧な磨きが施され、下端部では範調整痕が残る。内面は刷毛調整後の磨きが認められる。2は底部から直に大きく開き外反する形態の小型の鉢である。外面は刷毛調整が一部認められるが撫で整形により殆ど認められない。内面は斜位、横位方向の刷毛調整が認められる。3は折り返しの口縁部を有して大きく外反する。4、8は、台付壺の口縁部、脚部破片である。口縁部は曲線を保ちながら外反する。

第22号住居址(第47図)

(概観) 北側住居群の南東を占め、21号住居址の南東で重複関係にある。発掘区のやや東寄りに存在する。

(形状・規模) 長径5.34m、短径4.06mを計測する。形態は北辺で直線を呈するが、残りの大部分は外側に緩く張り出した弧状となるため梢円形に近い形態を呈する。

(壁・床) ソフトロームを斜めにやや掘り込んで床面に達する。床面は炉付近では固く踏み固められているが、壁付近では軟弱であり踏み固めた痕跡は認められない。

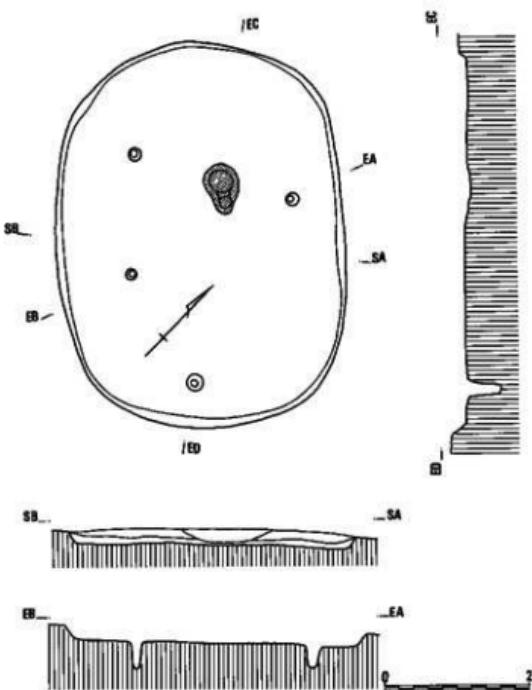
(柱穴) 柱穴は径16~22cm、深さ40~45cmの4本が認められるが、配置は不規則である。

(炉址) 住居北東寄りに位置する。長径70cm、短径40cmの梢円形を呈し、炉内には焼土が充填する。

(覆土) 2層に分けられレンズ状に堆積し、一部住居中央のⅡ層下部に達する擾乱が認められる。第Ⅰ層は茶褐色土の土壤層であり、木炭粒、ローム微粒子を含む。第Ⅱ層茶褐色土とロームブロック、黒色土を交互に含む交疊層である。

(出土状況) 遺物量は少なく、住居内に散漫に第Ⅱ層下部を中心に認められる。

(出土遺物) 遺物は広口壺、台付壺の破片である(第図10~15)。10、12~15は台付壺の破片で、1、2、15は胴部破片である。口縁部上端には刻み目が施され14は押し引きが顕著である。11は口縁部が直線的に外反する広口壺で内外面に丁寧な刷毛調整が施される。



第47図 立石第22号住居址

第23号住居址（第48図）

（概観）立石南側住居群の北部に位置し16号住居南の至近距離に認められる。発掘区の西寄りに位置して、西側の大半は未調査である。

（形状・規模）未調査部分が大部分であるが、長軸6.44m前後を計測するものと考えられる。東辺はほぼ直線を呈すが、北辺では隅丸で辺中央にかけて僅かに弧状となり外側に張り出しており橢円形に近い形態を呈するものと考えられる。

（壁・床）ソフトロームを垂直に20cm掘り下げ床面に達する。

（柱穴）未調査部分が大半を占め全容は不明であるが、住居四隅に設置されたと考えられる内の2カ所が、住居北東、南東に1本づつ計2本が検出された。

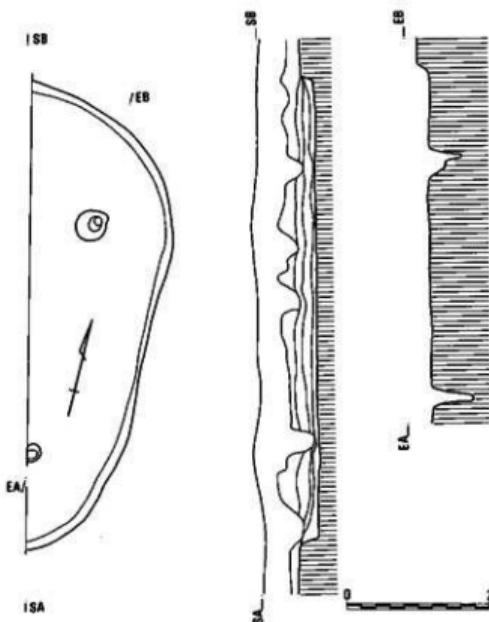
（炉址）未調査。

（覆土）表土から断面を作成をおこなった。そのうちの第Ⅲ層以下が覆土である。覆土は3層に分けられ、レンズ状堆積を示す。Ⅰ層は、耕作土である。第Ⅱ層は明黄褐色土で、ロームブロックを含む。第Ⅲ層は暗黄褐色土層で、ほぼ均一な土壤層であるが、木炭粒、赤色粒を混入

する。第IV層は茶褐色の土壤層であるが、僅かにローム粒子、赤色スコリアを含む。第V層は暗茶褐色土とロームブロックとの交互層である。

(出土状況) 住居の半分以上は未発掘で、遺物の出土量も少ない。遺物は床面より5cm前後浮いた状態で検出される。

(出土遺物) 遺物はS字甕、甕、台付甕（第図16～22）である。16は口縁部上端に刻み目を施している。外面は縦位、斜位の刷毛調整が、内面では口縁部付近に横位の刷毛調整が施され



第48図 立石第23号住居址

る。17は肩部以下を欠損する。内外面に粗い刷毛調整が認められる。

第24号住居址（第49図）

(概観) 立石遺跡の北部住居群に位置して、第1号方形周溝墓の右軸右位溝と重複関係にある。

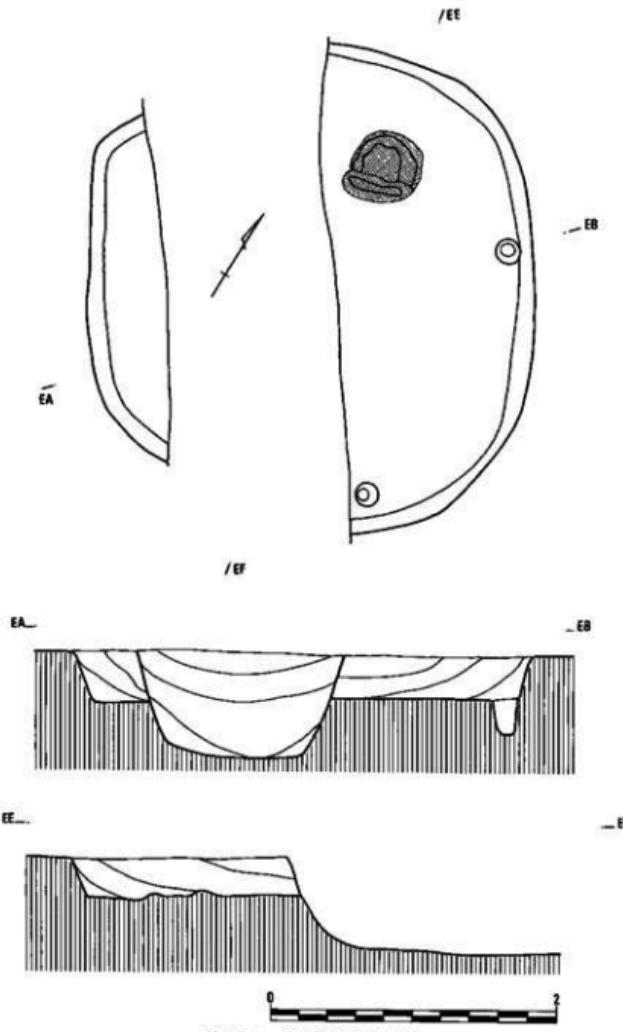
また、方台部にのる25号住居址と接するが重複はない。

(形状・規模) 長径3.4m、短径3.1mを計測する。第1号方形周溝墓に切られて不明確である。住居西側では、直線に近い二辺が100°以上の角度で交わる。南・北辺は溝に切られるが、残り部分からは直線に近い様相を呈し、東辺では僅かに外に張り出しが直線状となる。住居の隅は西側の1カ所を除き丸みをもち、不正円形に近い形状を呈する。

(壁・床) ソフトロームを垂直に平均30cm前後掘り下げ床面に達する。床面は固く踏み固られ平坦であるが、壁周辺では軟弱であるといえる。

(柱穴) 北側部分の2本が壁際に検出されたが、残り2本は住居南部が第1号方形周溝墓に切られており、位置的にはその部分に存在した可能性が高く、周溝墓構築の際に消失したものと考えられる。

(炉址) 住居北側に位置する。径50cmを計測する不正円形を呈する。炉床には白色粘土を張り、炉端には枕状の高まりとドーナツ状の高まりが組み合わされて中央部の窪地を形成している。



第49図 立石第24号住居址

(覆土) 4層に分けられ、レンズ状堆積を示す。第Ⅰ層は黒茶褐色土で均質な土壤層である。第Ⅱ層は、基本的に第Ⅰ層と同質な土壤層であるが、やや暗茶褐色を帯びる。第Ⅲ層は暗黄褐色土で、黒色土がブロック状に混入する交互層である。第Ⅳ層は多量のローム塊と基本的に第Ⅲ層とが混入する交互層である。

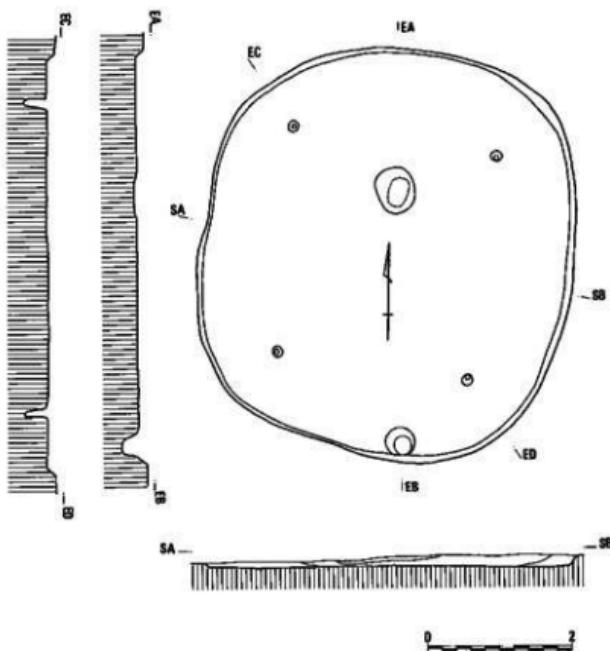
(出土状況) 遺物量は少なく、炉周辺で僅かに図示した破片が検出された。Ⅱ層下部から床面に接して認められる。

(出土遺物) 遺物は複合口縁壺、台付壺破片である(第図23~26)。23は垂直に近い口縁部で、下端で幅の広い折り返し段を形成する。口縁部外面は刷毛調整後、縦列沈線が施される。24~26は台付壺口縁部であり、口縁上端には刻み目が施されている。

第31号住居址(第50図)

(概観) 立石遺跡廃土置き場建設伴う調査、および上の平遺跡範囲確認調査で確認した。

(形状・規模) 長径5.64m、短径5.1mを計測する。南・西壁では辺中央が直線に近く隅は丸みを呈する。北、東辺は外側に張り出し緩やかな弧状となる。このため住居全体の形状は円形に近い形態を呈する。



第50図 立石第31号住居址

(壁・床) ソフトロームを斜めに平均20cm掘り込んで床面に達する。炉周辺は固く踏み固められているが、それ以外では軟弱である。

(柱穴) 径16cm、深さ36cmの4本が対角線上に配置されている。

(炉址) 住居中央より北側に位置する。長径60cm、短径48cmの梢円形を呈し、中には焼土が充填している。

(その他) 南壁際に径40cm、深さ20cmの梯子受穴が認められる。

(覆土) 3層に分かれ。第Ⅰ層は暗茶褐色土で均質であり、サラサラした土壤層である。第Ⅱ層は茶褐色土であり黒色土をブロック状に含む交互層である。第Ⅲ層は、黒褐色土の土壤層にロームブロックを混入する交互層である。

(出土状況) 床面にやや浮上して底部を欠損する広口壺等が住居中央部に集中して認められる。

(出土遺物) 遺物は、広口壺、甕、器台脚部である(第図1~9)。1は折り返し口縁で、口縁部上端には幅の狭い段を形成し、その下には刻み目が施される。体部は胴部中央に最大径があり、球形に近い形態を呈する。外面は刷毛調整後磨きが丁寧に施され、肩部には3個一単位の円形浮文を4単位施している。内面では、主に横方向の刷毛調整が認められる。2、3は接合部で「く」字状に開く甕である。4、5、8、9は広口壺、7は台付甕である。

第4節 古墳時代の遺構と遺物

立石遺跡住居群の最南端に位置して、住居址5軒の内3軒までが重複しており、まとまって存在する。上の平、宮の上遺跡では該期の遺構は宮の上遺跡の方形周溝墓が検出されており、調査区の進展によって、当地域で墓域空間と住居空間があらたに加えられる可能性を示唆している。

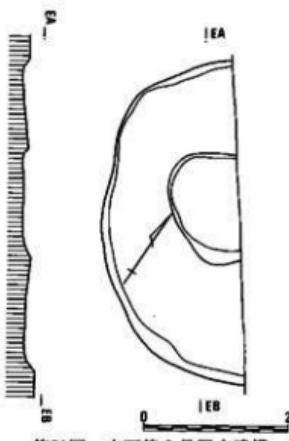
第9号竪穴遺構(第51図)

(概観) 遺跡中央より8号住居址の東側に位置し、発掘区の東よりに位置するため遺構の大半は未発掘である。

(形状・規模) 未発掘部分が大部分の為全容は明らかにすることはできないが、現状からは長径4.04mの不正円形である。

(壁・床) 壁は傾斜に掘り込んで、16cmで底面に達する。遺構中央にはさらに径1.6mの円形の掘り込みが認められる。底面は軟弱であり踏み固めた痕跡は全く認められない。柱穴・炉址は検出されない。

(覆土) 削平の為、2層が認められる。第Ⅰ層は、サラサラした茶褐色を呈する土壤層である。



第51図 立石第9号竪穴遺構

第10号住居址（第52図）

（概観）遺跡の東側住居群の北部を形成して重複は認められず単独出土である。発掘区のやや東側に寄るため、遺構の一部が未調査である。

（形状・規模）北東隅を未調査で残すが、長径6.04m、短径5.64mの隅丸方形を呈する。

（壁・床）ソフトロームを垂直に26cm掘り込んで床面に達する。床面は固く踏み固められており、平坦面を形成している。

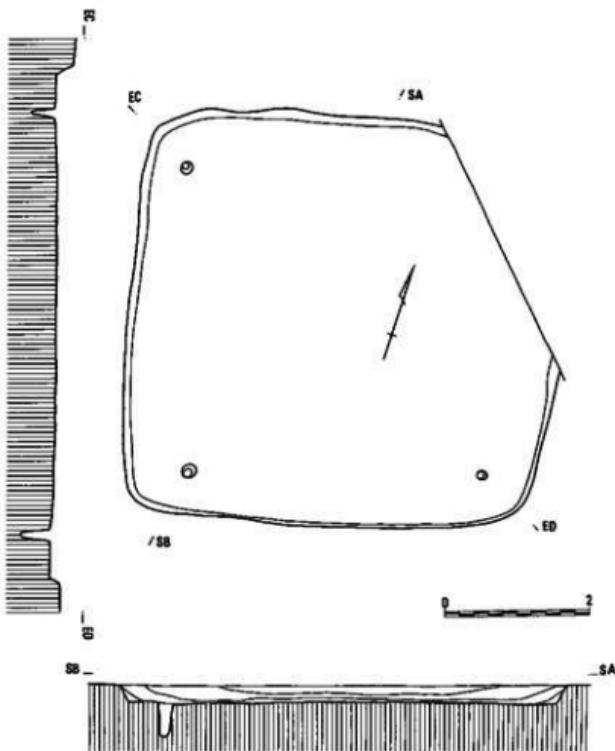
（柱穴）一部が発掘の為、検出された柱穴は3本であるが、対角線上に配置されているものと考える。

（炉址）住居中央部分に僅かに焼土が認められる程度で、炉床は検出されなかった。

（覆土）4層に分けられ、ほぼレンズ状に堆積が認められる。第Ⅰ層は黒褐色土であり、緻密でありサラサラした土壤層である。第Ⅱ層は暗褐色土であり、黒褐色土がブロック状に認められる交互層である。第Ⅲ層は茶褐色土であり、ローム粒子、木炭粒子を多量に含んでいる。

（出土状況）遺物量は多くないが、壁際床密着で完形の壊、高壊、器台と研石1点が出土する。残りの小破片は床面から10cm前後浮上して住居内に散漫して認められる。

（出土遺物）遺物は椀形高壊、壺、器台と研石1点が検出される（第60図22～30、第61図1～3）。壊（図1、2）は器壁は薄く精製化されている。形態は器高が低く、底部で丸底を呈して、体部中央で屈折し大きく外反する。内面では、刷毛調整（No.1）、磨き（No.2）が認められる。椀形高壊は、小型品であり、器高は低く脚部との接合部から大きく外反する形態である。器壁は薄く精製化されている。外面では壊



第52図 立石第10号住居址

体部との接合付近で範調整痕がのこる。内面では丁寧な磨きが顕著である。器台(28)は、坏部体部が屈折して外反するもので、器壁は薄く精製化されている。

第Ⅱ層は造構内中央の円形の掘り込み中に認められるもので、第Ⅰ層と同質であるが、僅かにローム粒、木炭粒を含む点、色調がやや灰褐色を帯びる点で異なる。

(出土状況) 遺物の集中箇所は認められず散漫である。第Ⅰ層下部に管玉の装饰品1点が認められる。

(出土遺物) 遺物は管玉(本体直径1.32cm、孔0.65cm)1点の他はS字型の小破片である(第図17~21)。

第12号住居址(第53図)

(概観) 立石南側住居群のほぼ中央に位置する。同時期と考えられる隅丸方形を呈する住居群が南北に重複して検出され、その一角を占める。発掘区の東寄りに位置して住居半分は未調整である。

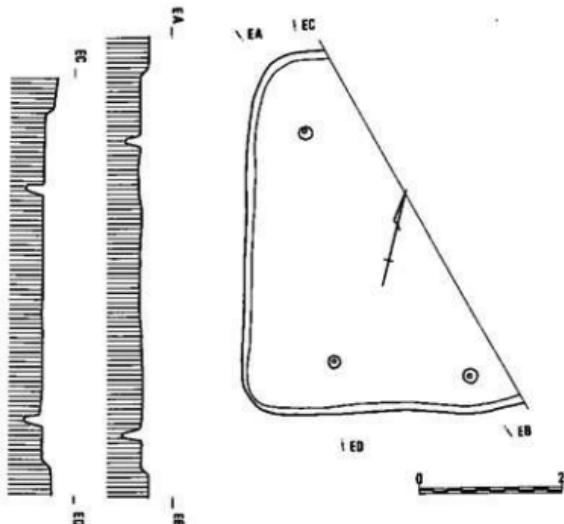
(形状・規模) 二辺4.96mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。住居北半は未調査である。

(壁・床) ソフトロームをほぼ垂直20cm前後掘り込んでいる。北側では削平が進んで壁高が低い。床面は固く踏み固められている。

(柱穴) 住居半分が未調査であるが3本の柱穴が検出され、径20cm~16cm、深さ28cmの主柱穴が、ほぼ対角線上に配置されるのが確認される。

(覆土) 黒茶褐色のサラサラした土壤層1枚が認められる。覆土全般にわたり僅かな木炭粒、スコリア粒が混入する。壁際に土壤層にローム塊が混入する交互層となる。

(遺物出土状況) 遺物量は少なく、炉周辺の住居南側に散漫して検出された。



第53図 立石第12号住居址

(出土遺物) 遺物は壺、坏、台付壺で坏以外はいずれも小破片である(第図14~20)。

坏(14)は丸底で体部上半で屈折して大きく外反する。器壁は薄く精製化されている。内外面共に磨きが施されるが、内面は特に丁寧に施される。15はS字壺、16~20は台付壺の小破片である。

第13号住居址(第54図)

(概観) 立石住居群の南側に位置する。住居北側の一部が14号住居と重複関係にあり、その新旧関係は13号~14号となる。

(形状・規模) 長径5.04m、短径4.68mの隅丸方形を呈する堅穴住居址である。

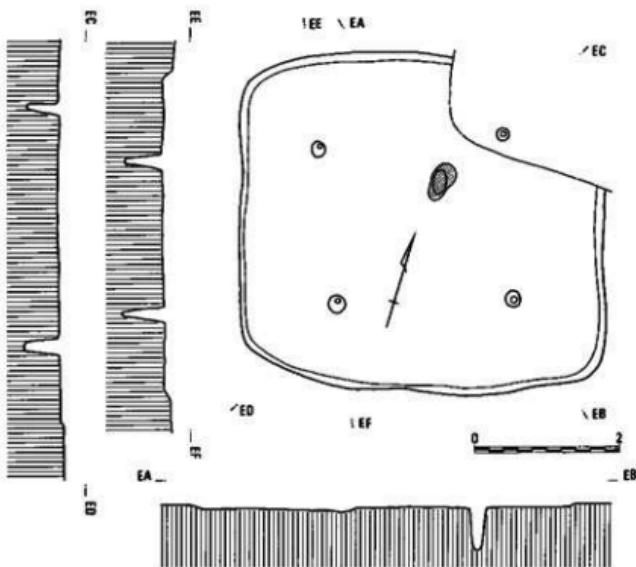
(壁・床) ソフトロームをやや傾斜気味に掘り込んでいる。削平が著しく進んでいる為現状での壁高は16cmが認められるにすぎない。床面は固く踏み固められ平坦である。

(柱穴) 径24cm、深さ60cmの主柱穴4本が対角線上に検出され、整然と配置されている。

(炉址) 住居北寄りに配置される長径36cm、短径28cmの地床炉で椭円形を呈し中には焼土が充填している。

(覆土) 開墾等農作業の削平の為、床面に直接堆積する黒茶褐色土の1枚のみが残存する。サラサラした土壌層であり全体的に均一であるが壁際で僅かにローム粒子が混入する。

(出土状況) 高坏、器台の各1点づつが住居西側の床直上で横たわって検出された他は、遺物量は僅かであり、大部分は破片で住居全域に散漫して認められる。



第54図 立石第13号住居址

(出土遺物) 遺物は高坏、S字壺、壺?、器台である(第61図21~25)。高坏(21)は器壁が薄く精製化されている。脚部と坏部の接合箇所からただちに直線的に外反する。坏部の高さは低く浅い。また、坏部の両面には丁寧な継ぎ方の磨きが施され、脚部では、坏部と同様な磨きが外面に認められる。器台(22)は、小型で、器壁は薄く精製化されている。坏部は体部中央で屈折して大きく外反する。体部外面では脚部との接合部で範調整が認められ、内面では丁寧な磨きが認められる。脚部は欠損する。

第14号住居址(第55図)

(概観) 立石南側住居群を形成する。この中で12、13、14号が重複関係にあり14号はその中央に位置する。

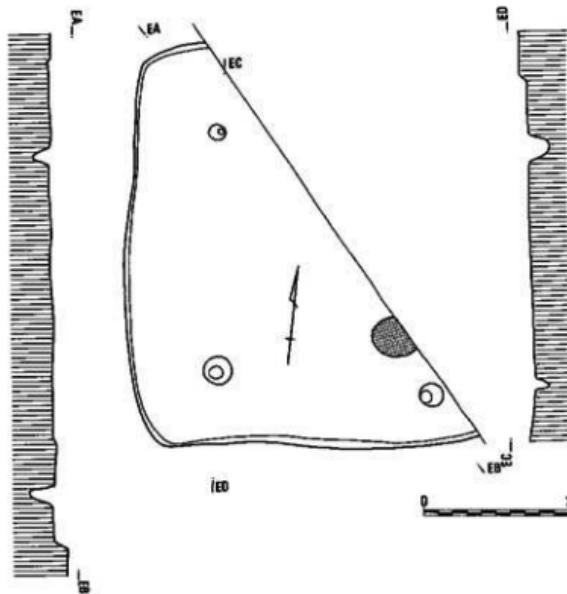
(形状・規模) 一辺が5.56mを計測する隅丸方形の整穴住居址である。ソフトロームをやや斜めに掘り込んで床面に達する。床面は固く踏み固められており、平坦である。

(壁・床) ソフトロームをやや斜めに平均20cm掘り込んで床面に達する。床面は固く踏み固められ平坦である。

(柱穴) 未調査部分が多く残り、検出された柱穴も3本であるが、現状からは、ほぼ対角線上に認められる。

(炉址) 住居北寄りの未調査箇所に配置されているものと考えられ、未確認である。

(覆土) 農作業等の削平により、13号住居同様、床面直上のI層のみが残存する。長期間にわ



第55図 立石第14号住居址

たり堆積した均質な土壤層で黒茶褐色を呈する。13号住居覆土と比較して色調は13号よりやや明るい。土質はほぼ同質である。

(出土状況) 遺物は極めて少なく、集中する事なく住居内に散漫して認められる。

(出土遺物) 遺物は高坏、S字状口縁甕の破片である(第図1~6)。1、2は口縁部から肩部にかけての破片である。口唇部は外反気味に立ち上がっている。肩部から胴部にかけては縱方向の刷毛調整が施される。5は高坏脚部である。器壁が薄く作られる精製化されたもので、内外面には僅かに刷毛調整痕が残る。

第18号址(第56図)

(概観) 立石南側住居群の最南端に位置する。北側の至近距離に19号住居址が存在する。這構内には炉の痕跡は認められず、床面も踏み固められた痕跡は認められず軟弱であり、他の住居と比較しても規模は小さく、住居址とは認定されない。

(形状・規模) 長径4.01m、短径3.2mの隅丸方形を呈している小建物である。

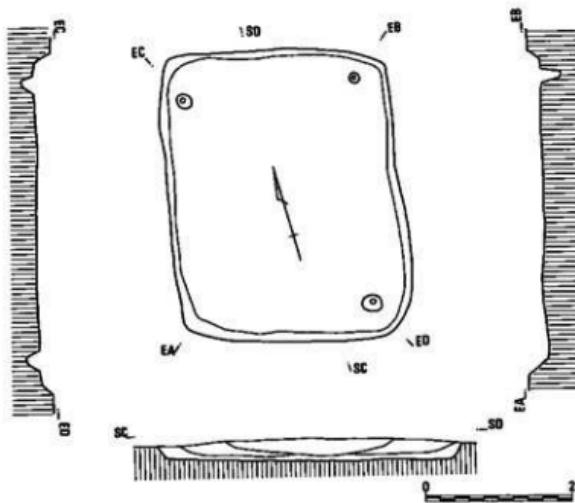
(壁・床) ソフトロームを斜めに平均28cm前後掘り込んで床面に達する。床面は軟弱で踏み固められた痕跡は認められず、凹凸が目立つ。

(柱穴) 3本が検出され対角線上に配置される。西南隅の柱穴は未発見である。

(炉址) 無し。

(覆土) 3層がレンズ状に認められる。第Ⅰ層は暗茶褐色上である。ローム粒子を多く含む。第Ⅱ層は黒色土で均質な土壤層であり、僅かに木炭粒、赤色スコリアを含む。第Ⅲ層は黒褐色のサラサラした土壤層で均質である。整際に僅かにローム粒が混入する。

(出土状態) 遺物量は僅かであり、いずれも破片で散漫に認められる。



第56図 立石第18号住居址

(出土遺物) 遺物は S 字状口縁壺破片および壺破片である(21~29)。21、28は口縁部から肩部の破片であり肩上端と口縁部との接合部から「く」字状に屈曲して外反する。刷毛調整は斜位気味に認められる。全体的に薄手の作りである。残りは壺の肩部~胴部の破片であり内外面共に刷毛調整が丁寧に認められる。

第19号住居址(第57図)

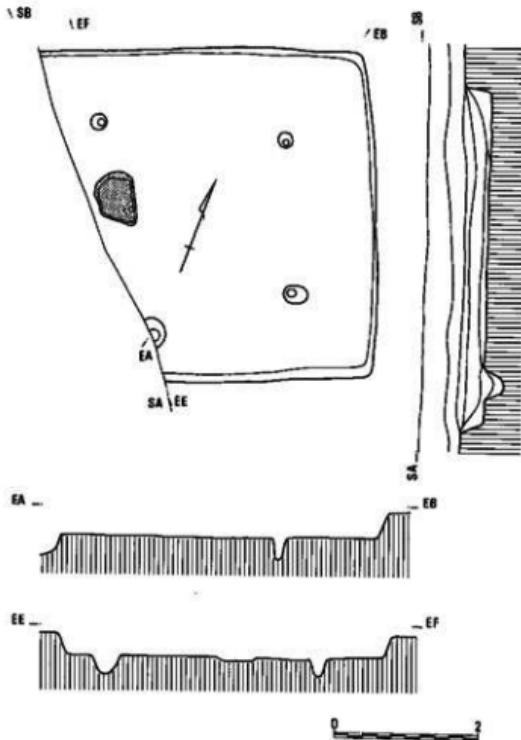
(概観) 18号と住居群の最南端に位置する。発掘区の西側に寄り、一部は未調査である。

(形状・規模) 一辺が4.52mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。

(壁・床) ソフトロームを垂直に平均36cm掘り込んで床面に達する。床面は固く踏み固められ平坦面を形成している。

(柱穴) 南側柱穴1本が他の3本に比べ位置が外寄りにずれるが、ほぼ対角線上に認められる。径40~22cm、深さ32cmを計測する。

(炉址) 住居西寄りに位置する。長径80cm、短径50cmの不整形を呈し、中には焼土が充填している。



第57図 立石第19号住居址

(覆土) 4層に分けられ、レンズ状に堆積している。第Ⅰ層は黒褐色土でローム粒子を多量に含む。第Ⅱ層は暗褐色土に黒褐色土のブロックとの交互層である。第Ⅲ層は茶褐色土で、粘質が強くロームブロックを混入する交互層である。第Ⅳ層は黒茶褐色土であり、木炭粒を多量に含みやや緻密さが欠ける。第Ⅴ層は柱穴の覆土で暗黄褐色土である。

(出土状況) 小型の台付甕 2点が、住居ほか中央の床面直上に倒れて検出された。他には手づくねのミニチュア土器 2点と僅かな破片が集中することなく散漫に認められた。

(出土遺物) 遺物は、S字状口縁甕、「く」字状口縁甕、台付甕、壺形土器および磨製石鎌 1点である(第63図 1~19)。1は小形の「く」字状口縁甕である。口縁部は大きく外傾して体部は球形である。整形技法は外面全面に斜位の刷毛調整が施され肩部上端には5段の横位の沈線が施される。内面では口縁部に刷毛調整が認められる。2はS字状口縁甕の小型品である。口唇部はやや外傾気味であるがほぼ垂直に立ち上がっている。体部の最大径は脚部上半の肩下端にある。刷毛調整は脚部上端から体部上端にやや傾斜気味に縱位に認められる。1、2とも薄手の製品である。5、6、10、12、13、14はS字状口縁甕の破片でやや外傾気味に立ち上がっている。磨製石鎌は大型品であり両側縁は鋭利に研磨される。先端は鋭利に研磨されるとおもわれるが欠損する。

小 結

古墳時代の遺構は、住居跡 5軒、その他遺構 2基が検出され、立石、住居群の東端を占める。土器様相から4世紀後以降の年代があたえられる。住居の形態はいずれも隅丸方形を呈して住居内に炉を有する。規模はいずれも近い数値を示しており、住居の方位も同一方向を向く傾向にあり、きわめて管理的に配置された意図が感じとれる。遺物は、豊富とはいえないが、土器類の他には、研石、磨製石鎌が出土している。9号址は不正円形の掘り込みに、さらに1m前後の小掘り込みを行っており、僅かな土器片の他に管玉が1点出土しており、本遺構の性格付けに手掛けりを与えるものといえよう。

第5節 歴史時代の遺構と遺物

第8号住居址（第58図）

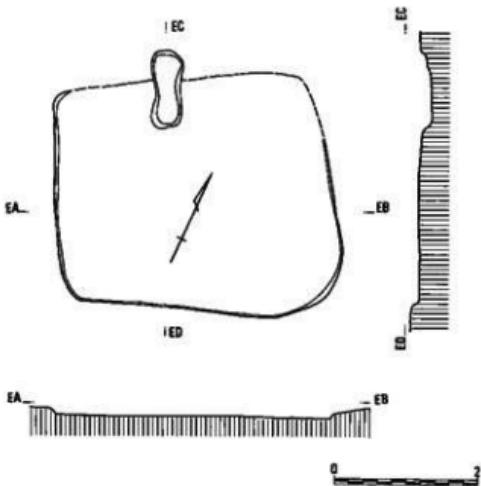
（概観）立石南側住居群の北部を占めて、第7号住居址と重複関係にありその新旧は第8号—第7号の順となる。

（形状・規模）長軸3.88m、短軸3.2m出、基本的には方形を呈するが東隅が極端に外側に張り出すため、四隅の角度は鋭角に近い様相を呈する不整形なものとなっている。

（壁・床）ソフトロームを垂直に掘り込んで床面に達する。削平作用の為壁高は10cm前後を計測するのみであり、住居北側部分の壁は7号を切る状態にあるが、消失している。

（カマド）カマドは、燃焼部の掘り込みで確認されたもので上部構造は既に消失している。カマド底部は赤色化する。

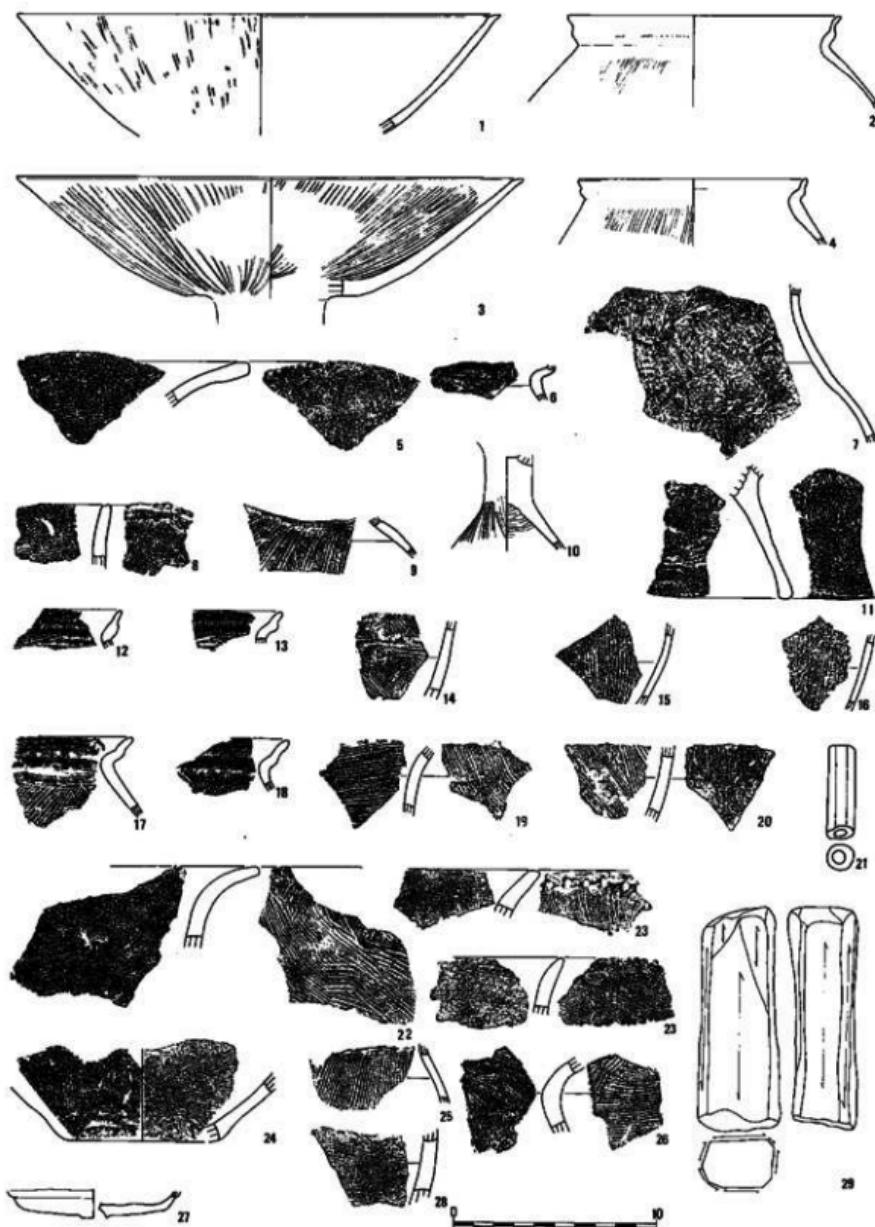
（覆土）覆土は、床面直上の黒色土が1枚認められる。均質な土壤層である。柱穴無し。



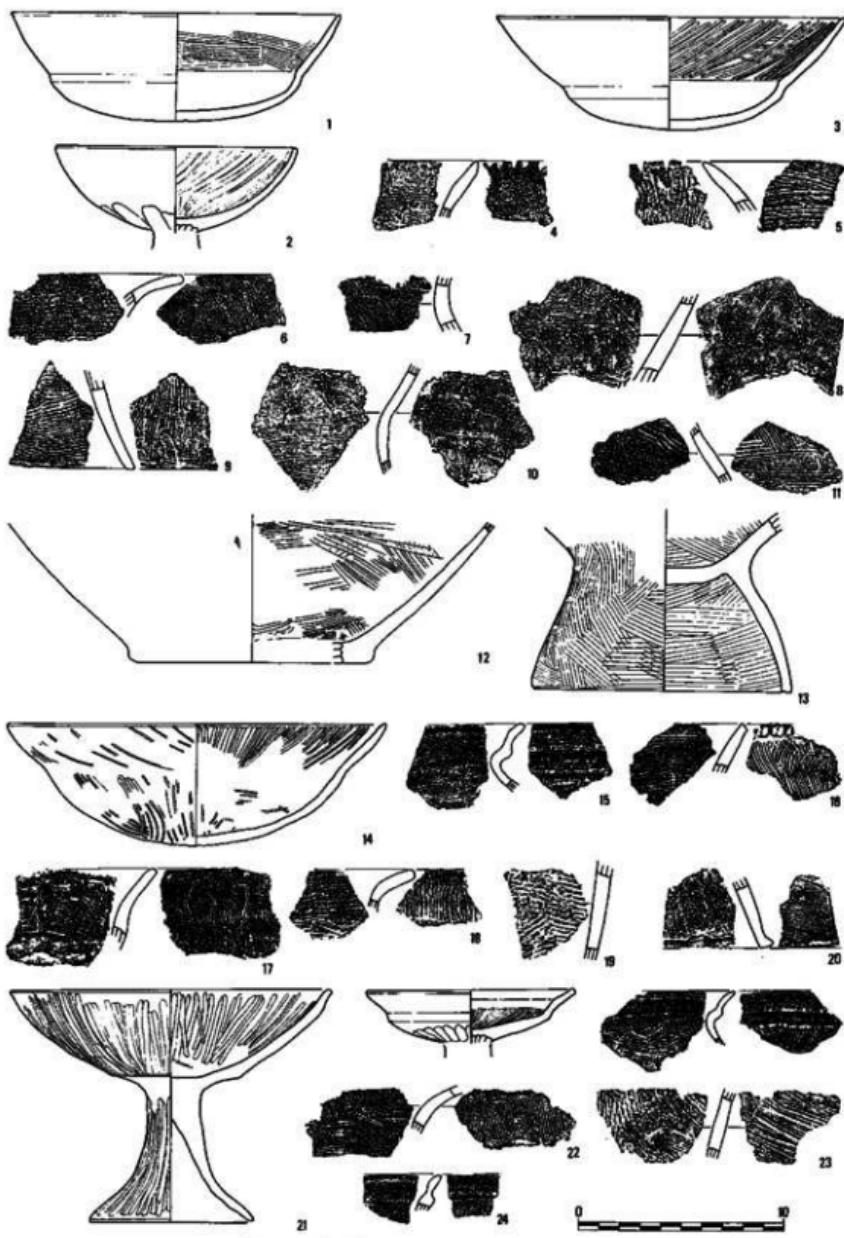
第58図 立石第8号住居址



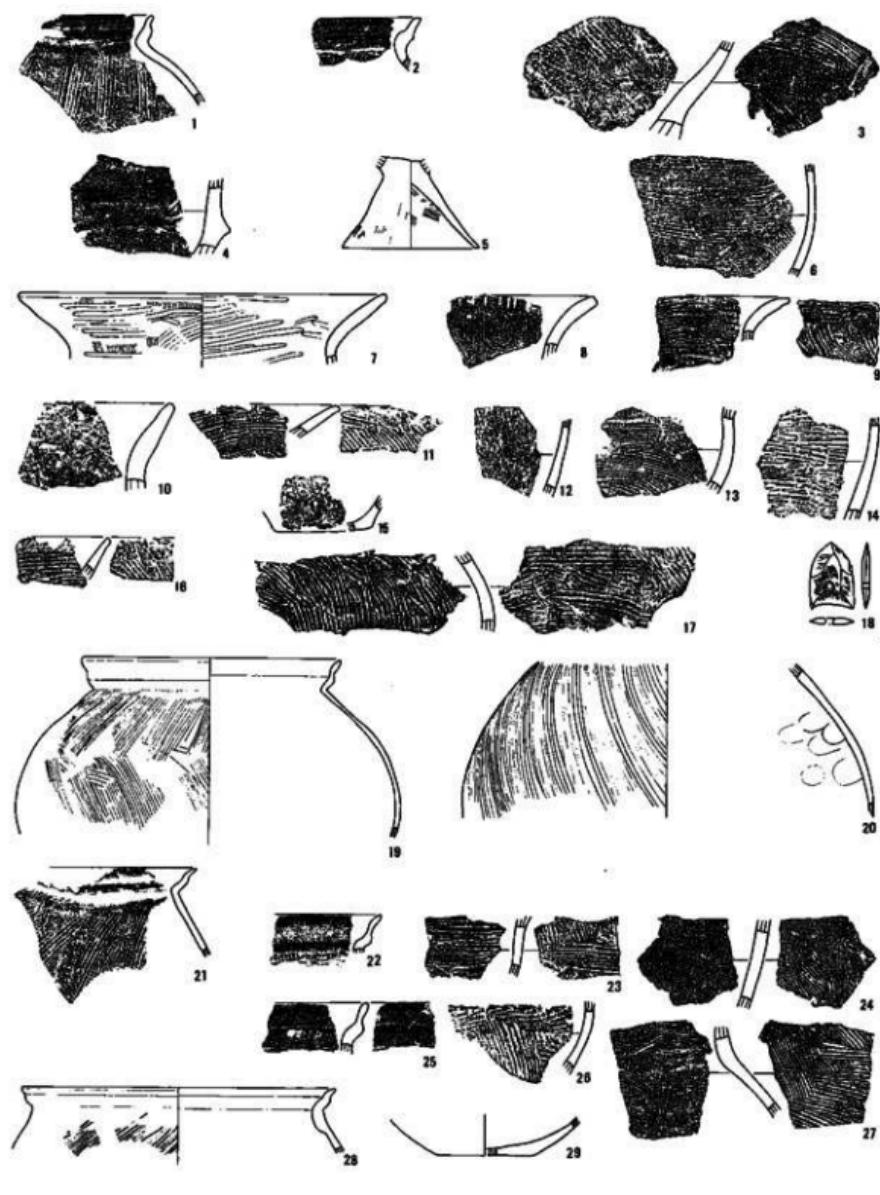
第59図 立石第1・3・4・5号住居址出土遺物



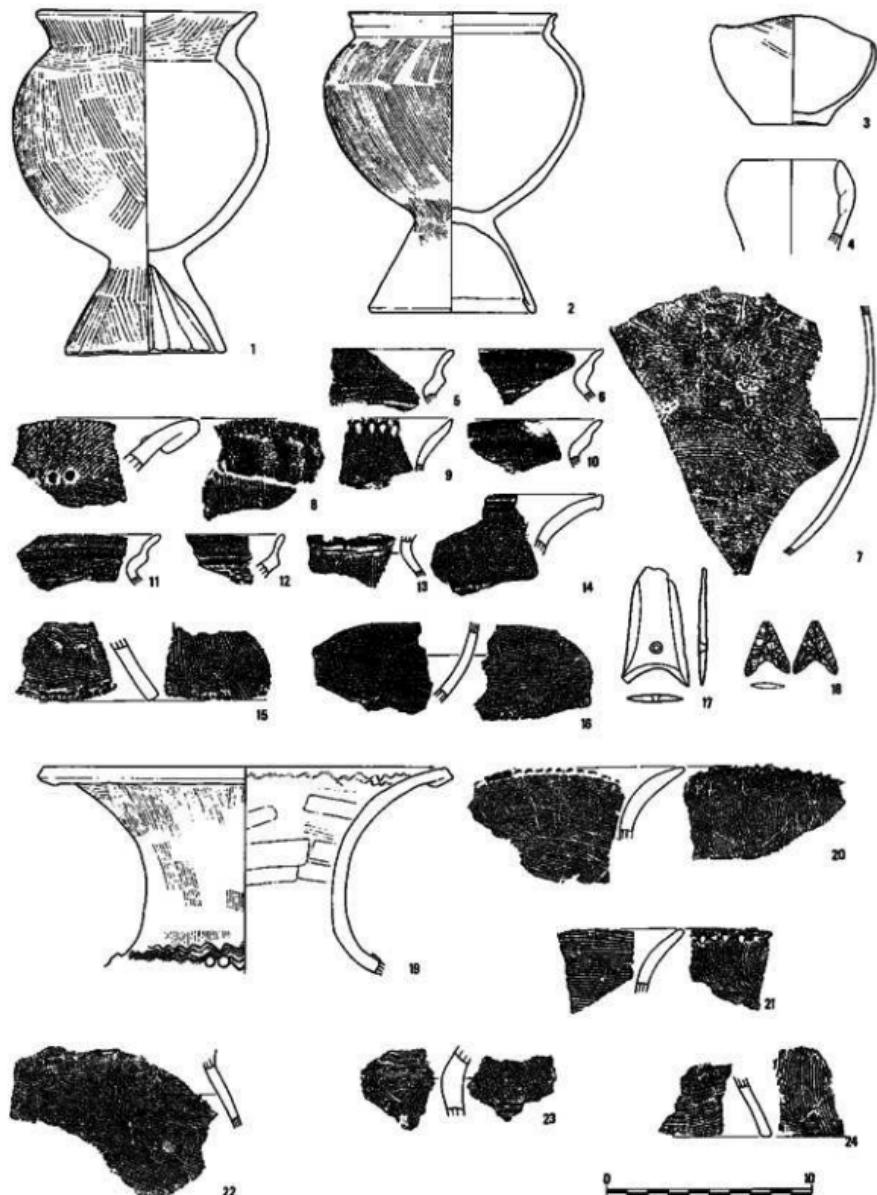
第60図 立石第7・8・9・10号住居址出土遺物



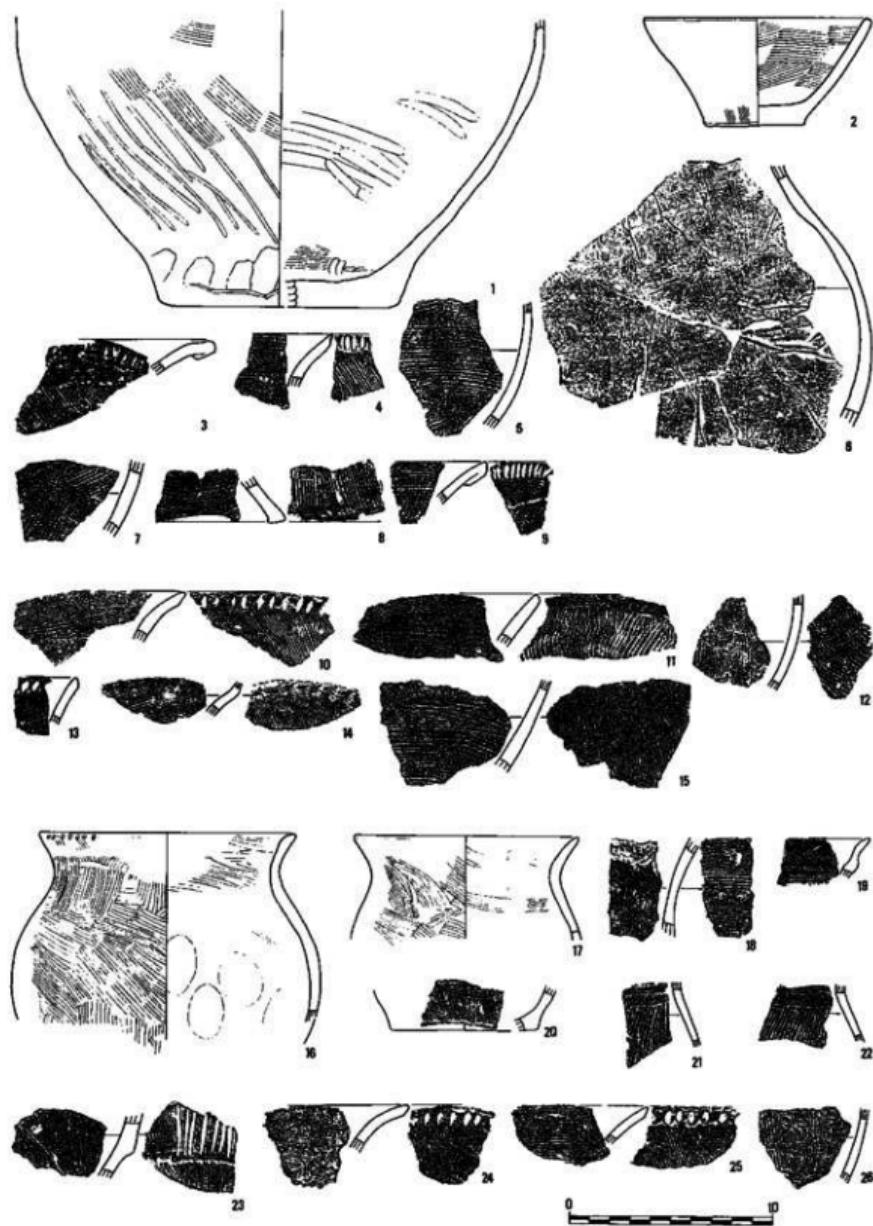
第61図 立石第10・11・12・13号住居址出土遺物



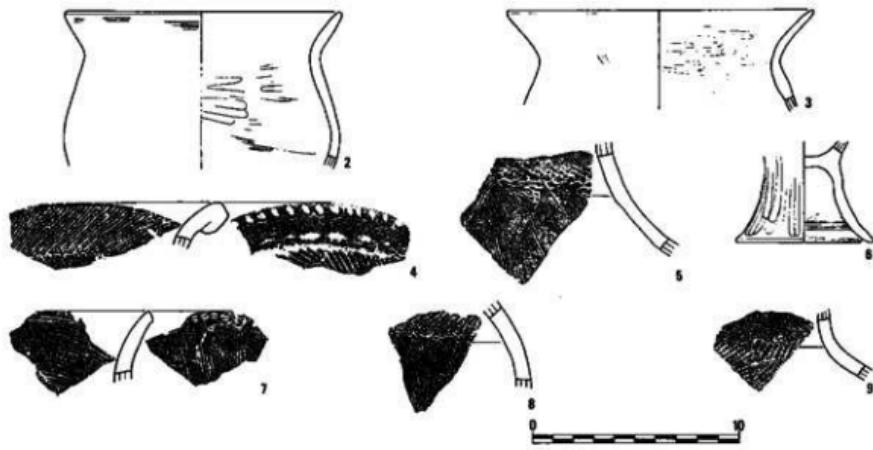
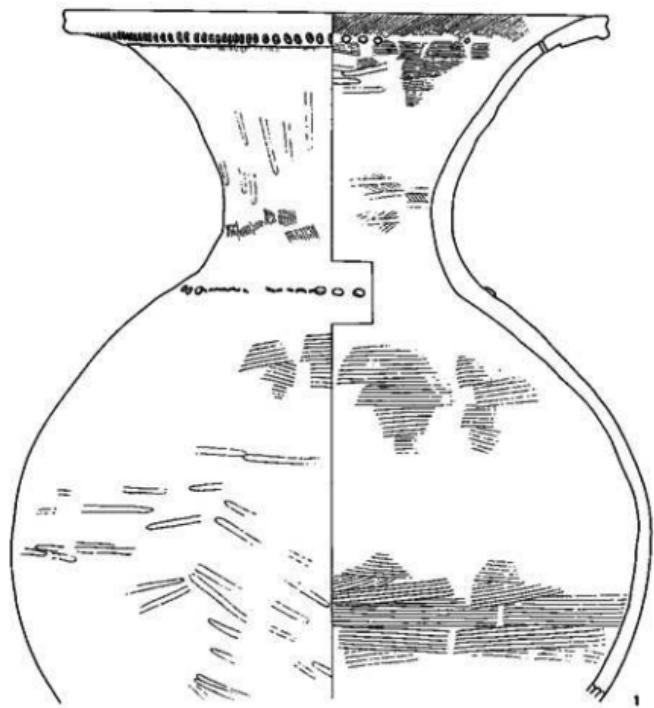
第62图 立石第14-15-17-18号住居址出土遗物



第63圖 立石第19·20號住居址出土遺物



第64图 立石第21·22·23·24号住居址出土遗物



第65圖 立石第31号住居址出土遺物

第Ⅲ章 宮の上遺跡の調査

第1節 弥生時代の遺構と遺物

山梨県遺跡台帳での登録上では、立石遺跡は、県道から第1号方形周溝墓までの間で、宮の上遺跡は第2号方形周溝墓から上ノ平遺跡直前までとされている。

住居址は総計9軒検出がされ、単独検出7軒、同時期の切り合い関係1例2軒である。方形周溝墓は7基であり、単独4基、重複1例2基である。住居址の確認範囲は発掘範囲の北端から50mの位置に限定されており、集落の広がりは現況からみれば発掘範囲に東西に直行し、さらに地形的制約からは西方に広がりを示すことが示唆され、本発掘区は集落遺跡の東端を形成するものと考えられる。

第1号住居址（第66図）

（概観）宮の上遺跡住居群の中央に位置する。6号住居址が南の至近距離で、北側では6m前後の空白地帯の後、第2・3・4・5号のグループが位置するように中では孤立している。

（形状・規模）長径5.16m、短径4.28mを計測する。北・東辺は直線に近いが、隅は円形を呈し、他の二辺も外側に張り出す弧状となり全体的には椭円形の平面形に近い形態の竪穴住居址である。

（壁・床）壁は黄褐色のソフトロームを28cmほど垂直に掘り込んで床面に達する。床面は踏み固められる箇所も部分的に認められるが全体的には軟弱である。壁高は15cm前後を計測する。

（柱穴）非常にしっかりした主柱穴径24cm、深さ40cmの4本が検出される。配列は住居北側に2カ所、西側に1カ所、南に1カ所であり不規則なものとなっている。

（炉址）住居中央よりやや北側に位置する。炉南端には粘土による枕状の高まりが東西に認められる。炉床には白色粘土が張られ熱を受け赤色に認められる。長径40cm、短径36cmで焼土が充填している。

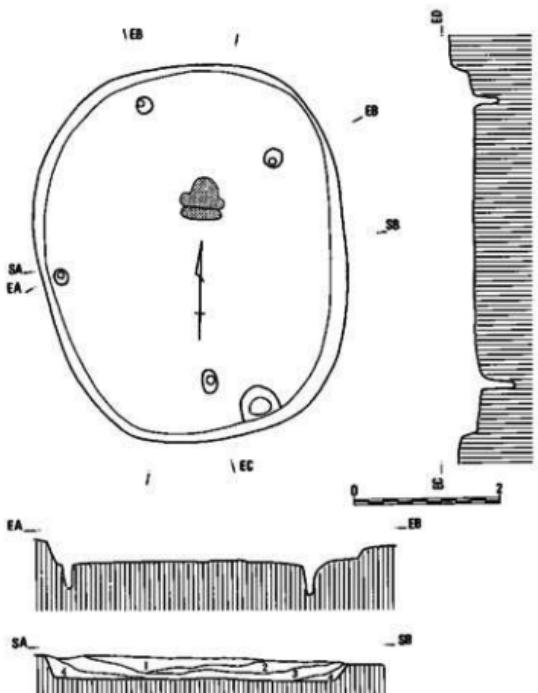
（その他）住居南壁際に、径56cm、深さ40cmの梯子受穴が1カ所認められる。

（覆土）4層に分けられる。第I層は黒褐色土で少量の黄色ブロック、赤色及び黄色粒子を含んでいる。第II層は茶褐色土で黄色ブロックを含んでいる。第III層は黄茶褐色土で黒色土及び黄色ブロックを多量に含む交互層である。第IV層は、暗茶褐色土と黒色土との交互層である。

（出土状況）遺物量は少なく集中箇所は認められない。No.1台付壺は住居南壁にそって床直上で検出された。他の土器片は第III層中位の範囲に出土している。

（出土遺物）遺物は、壺、台付壺、鉢である（第73図）。1は胴部下半が欠損する。最大径は胴部中央よりやや下位に存在する。口縁部は胴部接合部の括れ上部で外傾する。口唇部には刻み目が施され、両面に刷毛調整が認められ外面では斜位、内面では横位に施される。2、3は鉢形土器で共に小型品である。2は底部から直に直線的に外反する形態で、丁寧な磨きが施され

る。3は胸部が僅かに膨らむ形態で小さい口縁部が直線的に外反する。4は広口壺の口縁部片であり、内外面には刷毛調整後の磨きが認められる。



第66図 宮の上第1号住居址

第2号住居址（第67図）

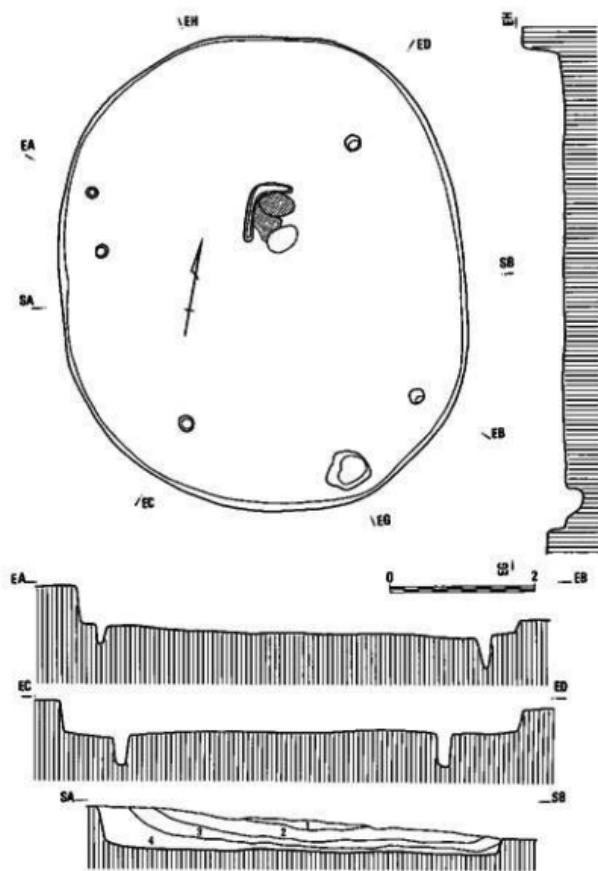
（外観）発掘区の北端グループにあり、中では大型の部類にあたる。グループの南東に位置して、北側に3、5号が隣接する。

（形状・規模）長径6.56m、短径5.64mを計測する。東辺部が直線に近いが全体的に緩やかに外に張り出す弧状となり、梢円形の平面に近い形態を呈する竪穴式住居址である。

（壁・床）壁はほぼ垂直にソフト・ロームを深いところで60cm掘り込んで床面に達している。床面は覆土とは明確に分離され、掘り込み作業は容易であるが、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は炉周辺意外は認められない。

（柱穴）柱穴5本が認められ、その内の4本はほぼ対角線状に認められる。

（炉址）外側に70cm×50cm幅10~20cmのL字状の溝を巡らせ、炉床には白色粘土を用いる。炉



第67図 宮の上第2号住居址

内には焼土が充填する。

(覆土) 4層に分けられる。第Ⅰ層は黒褐色土のサラサラした土壤層である。第Ⅱ層は茶褐色土で黄色ブロックが僅かに混入するが、サラサラする土壤層である。第Ⅲ層は黄茶褐色土であり、黄色土と黒色土がブロック状に認められる交互層である。第Ⅳ層は暗茶褐色土層で粘性が強くしまっている。黒色土と黄色土が交互に認められる。

(出土状況) 遺物量は少なく、集中出土は見られない。住居内炉址東側1m離れた床面上に広口壺1点が検出された。残りはⅢ層下部からⅣ層上面にかけて検出された。また、青銅製の鏡が1点住居中央のⅣ層上面より出土している。

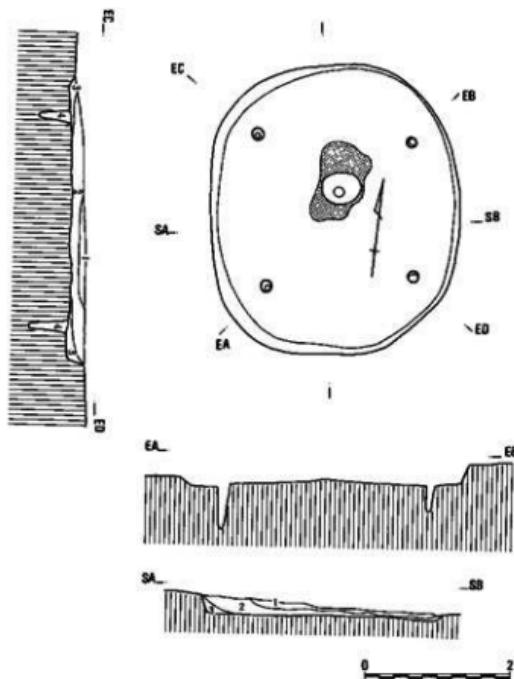
(出土遺物) 遺物は、S字壺、広口壺、台付壺である。(第73図6~15)。6、7、9、10、15は広口壺で口縁部は緩やかに外反して大きく開く形態を有する。10は幅の狭い折り返し口縁を有するが、他は折り返しは認められない。内外面とも刷毛調整のみが認められるもの(6~9、15)、刷毛調整後窓が施されるもの(10)とがある。11、13は台付壺の破片で体部と脚部との接合部位である。12はS字口縁壺破片で、口縁は緩やかに外反して体部は継位の刷毛調整が施される。青銅製鍵は全長5.2cmの有茎鍵である。

第3号住居址(第68図)

(概観) 遺跡の最北端で発掘区の東よりに位置する。5号住居址が西側に近接する。本住居址のすぐ東側からは急斜となっており、この地形の制約から集落の広がりは望めず、本住居址が集落東端ということになる。

(形状・規模) 長径3.96m、短径3.48mを計測する。西辺で直線を呈するが他辺は外側に緩やかに湾曲する弧状となり、ほぼ梢円形に近い形態を呈する。

(壁・床) 壁は黄褐色のソフトロームを24cm垂直に掘り込んでいる。床面は固く踏み固められているが、壁際付近は軟弱であるといえる。



第68図 宮の上第3号住居址

(柱穴) 炉を中心にはほぼ対角線状に認められる。

(炉址) 住居中央のやや北よりに位置する。長径108cm、短径68cmの範囲に焼土が検出されている。炉体は径56cm、深さ43cmの小ピットにより切られており消失する。

(覆土) 4層にわけられ、レンズ状に堆積する。第Ⅰ層は均一な茶褐色土で均質な土壤層である。第Ⅱ層は茶褐色土と黒褐色土との交互層である。第Ⅲ層は黒褐色土とロームブロックとの交互層である。出土遺物は時期決定となるものは検出されなかった。

第4号住居址（第69図）

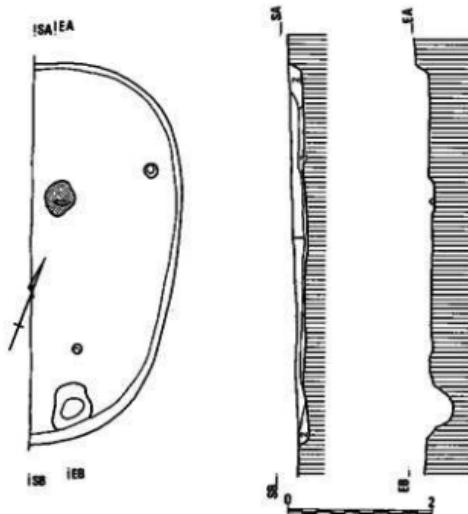
(概観) 宮の上遺跡の北部に位置して、4軒が集中する西端に位置する。住居跡西側は区域外の為未発掘となっている。

(形状・規模) 住居半分以上が未発掘である為全容は明らかでないが、東辺は緩やかな弧を描き外側に張り出し隅丸に統く。このことから、本住居は橢円に近い平面形を呈することは間違いないものと考える。長軸は5.28m以上とされる。

(壁・床) 壁はほぼ垂直に18cm掘り込んで床面に達している。床面は炉周辺を除き全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。

(柱穴) 現状では径20cm、深さ45cmの2本が認められる。東壁よりには、梯受穴径56×48cm、深さ40cmが認められる。

(炉址) 住居内の中央北よりに位置する。長軸48cm、短軸40cmで焼土が充填して、やや南寄りには炉内で使用されたと考えられる、長さ20cm、幅8cm、厚10cmの河原石1点が出土した。



第69図 宮の上第4号住居址

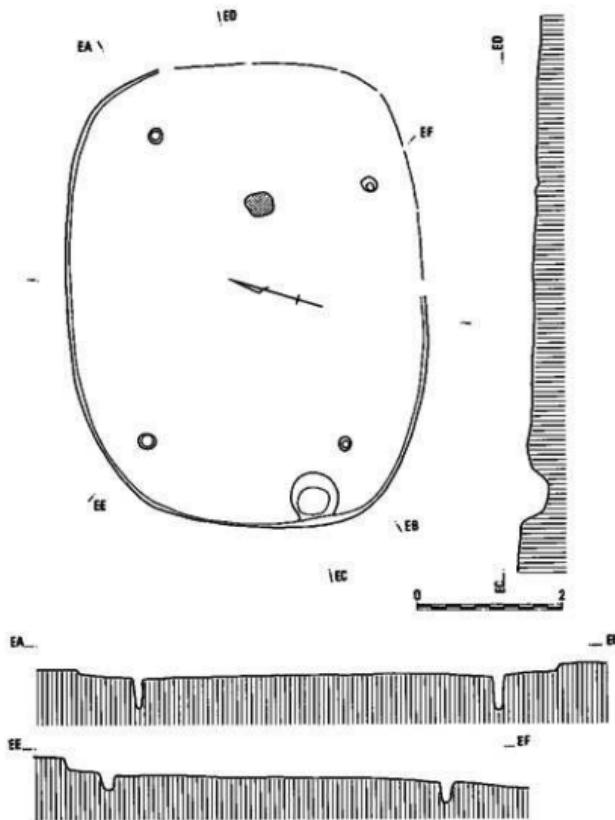
(覆土) 3層に分けられる。第Ⅰ層は茶褐色土であり、ロームブロック、木炭粒子が多量に含まれる。第Ⅱ層は床直上に堆積する黒茶褐色土層である。ロームブロック、木炭粒子を少量含む。第Ⅲ層は暗茶褐色土とロームブロックとの交互層であり、焼土、木炭粒子を含んでいる。

(出土状況) 出土量は少なく集中出土は見られず、図示した土器類がⅢ層上面より検出された。

(出土遺物) 遺物は高坏、広口壺、台付甕である(第73図16~21)。16は広口壺口縁部で肩部以下は欠損する。肩部直上から垂直気味に立ち上った後緩やかに外傾して広がる。口縁部上端は幅の狭い折り返しとなっている。外面は刷毛調整後撫で整形が認められる。高坏17は体部上半を欠いている。脚部は直線的に大きく広がる。刷毛調整は脚部の内外面に残り、体部では丁寧な撫でにより整形される。

第5号住居址(第70図)

(概観) 3号住居址が東側に隣接する。本住居址の、主軸は東西を向くが、他の3軒はほぼ南



第70図 宮の上第5号住居址

北を示しており特徴的である。

(形状・規模) 長径6m、短径5mで、長方形に近い梢円を呈する竪穴住居址である。

(壁・床) 黄褐色のソフトロームをほぼ垂直に掘り込んでいる。床面は全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

(柱穴) ほぼ対角線上に径20cm、深さ48cmが配置されているが、北東部の柱穴が外側東北に寄る。住居南部には梯受穴径60×64cm、深さ40cmが検出されている。

(炉址) 住居北側に位置している。長径40m、短径32mを測り、焼土が充填している。

(覆土) 削平の為、床面に直接堆積する下部のⅡ層のみが認められる。第Ⅰ層は灰茶褐色土で、黄色ブロック及び木炭粒子が多量に含まれる。第Ⅱ層は、黒褐色土であり粘性しまりは強く黄色ブロックが多量に混入する交互層である。

(出土状況) 住居南西部1.5mの範囲で一括集中して出土する。

(出土遺物) 遺物は壺、台付壺、片口形土器、双口形土器が検出される。(第75図1～7・第75図11～18)。台付壺(第75図1：第75図11)は口縁が垂直な括部から大きく開くように外反する形態を有する。最大径は胴部の中央にあり肩が張らず下部がやや窄む。刷毛調整は右下から左上に引き上げて全面に認められるが頸部には一部継刷毛が認められる。口縁上端には横刷毛後刻みが施される。内面では横位方向の刷毛調整が胴部から口縁部にかけて認められる。第図2は、口縁部が接合部から「く」状に外反する形態で、最大径は胴部中央より上半に位置して肩が張り下半部で極端に窄むため体部は無花果形に近い形態となる。外面では体部で縦方向、左下から右上、右下から左上の順で引き上げる刷毛調整が全面に認められる。口縁部刷毛調整は引き上げる方向で縦位に認められる。内面では括部から口縁にかけて横位、斜位に認められる。(第75図7：第75図1)は口縁部の開き具合が前記した二者の中間形態を示す。最大径は胴部の中央に位置して、肩は張らず下部がやや窄む形態である。器面は縦方向の刷毛調整が施されているが、その後の撫で整形により刷毛調整痕は摩滅する箇所が多い。内面は胴部で縦位、口縁部で横位方向に刷毛調整が施される。片口土器は底部から直線的に大きく開く鉢形土器(第75図3)と小型壺形土器が検出される。

第6号住居址(第71図)

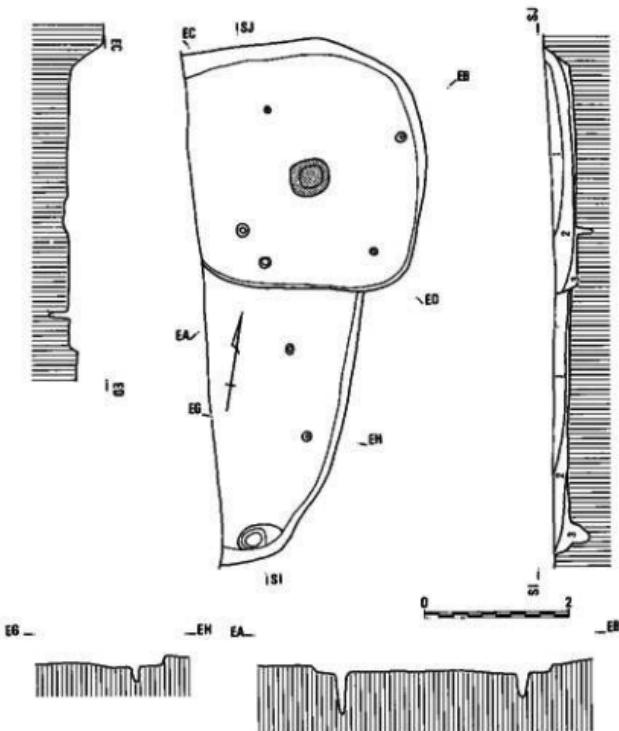
(概観) 第1号住居址の南側に存在して、発掘区の西側に位置する。住居址の一部は区画外の為未発掘である。8号住居址と重複して6号が8号を切っており、その新旧関係は8号-6号の順で構築される。

(形状・規模) 西側部分が未発掘であるため、全容は不明であるが不正円形を呈するものと考えられる。短径3.4mを計測する。

(壁・床) 固く踏み固められた箇所も認められるが、軟弱箇所が目立つ。壁高は36cmである。

(柱穴) 5本が認められ、その内4本(平均径18cm、深さ30cm)が炉を中心に対角線上に認められる。

(炉址) 住居中央寄りに位置している。長径52cm、短径48cmで焼土が充填している。



第71図 宮の上第6・8号住居址

(覆土) 3層に分けられる。第I層は黒色土で、均一でサラサラしており長年にわたり堆積した土壤層である。第II層は暗茶褐色土で、黄色粒子を多量に含んでいる。第III層は黒褐色土とロームブロックとの交互層である。

(出土状況) 遺物量は少なく、集中箇所は認められず住居内に散漫に認められた。

(出土遺物) 遺物は、広口壺、台付壺でいずれも破片である(第7図2~10)。2は広口壺の口縁部破片である。直線的に緩く大きく広がり、口縁上端ではやや幅の広い折り返し口縁を形成している。

第7号住居址(第72図)

(概観) 宮の上遺跡住居群の再南端に位置する。発掘区の西寄りに位置するため住居址の大半は未発掘となる。本住居地の東部は数mの平坦部を形成しているが、遺構の検出はなく、3号-8号を結んだラインが集落東端の限界線となる。

(形状・規模) 長径6mで、隅丸方形を呈するものと思われる。

(壁・床) 壁高は56cmではほぼ垂直に掘り込まれている。床面は固く踏み固められている。

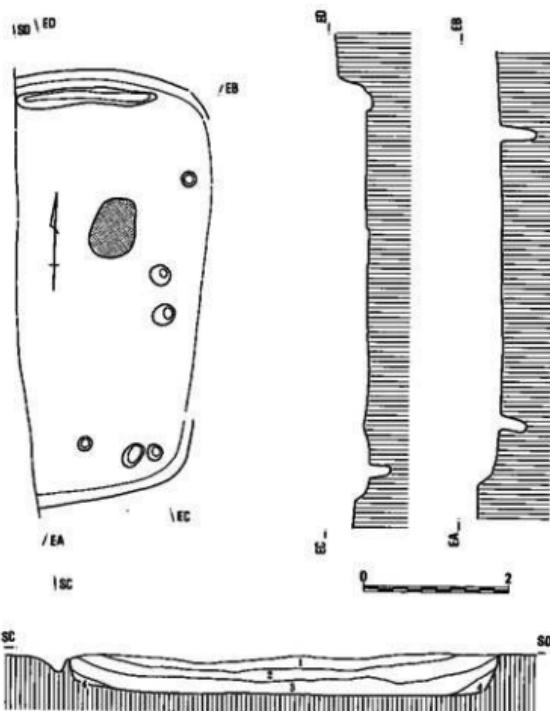
(柱穴) 6本が検出される。北壁に沿って幅15~20cmの溝が掘り込まれている。

(炉址) 住居北東寄りに検出され、長軸80cm、短軸42cmで台形に近い形態を呈する。焼土が充填する。

(覆土) 4層に分けられ、基本的にレンズ状に堆積する。第I層は暗茶褐色土でサラサラし、しまりを有する土壤層である。第II層は茶褐色土でロームブロックが混入する交互層である。

第III層は暗茶褐色土であり黄色土、黒色土が混入する交互層である。

第IV層は暗茶褐色土で黄色土、黒色土を多量に混入する交互層である。出土遺物は時期決定となるものは検出されなかった。



第72図 宮の上第7号住居址

第8号住居址(第72図)

(概観) 6号住居址と重複関係にあり、6号に切られることより、8号—6号の構築順となる。また、西側に位置するため区画外となり、大半は未発掘となる。

(形状) 6号と重複して切られるのと、西側地区の大半が未発掘の為、形状は不明な点が多いが、現状からは梢円形の近い形態が想定される。

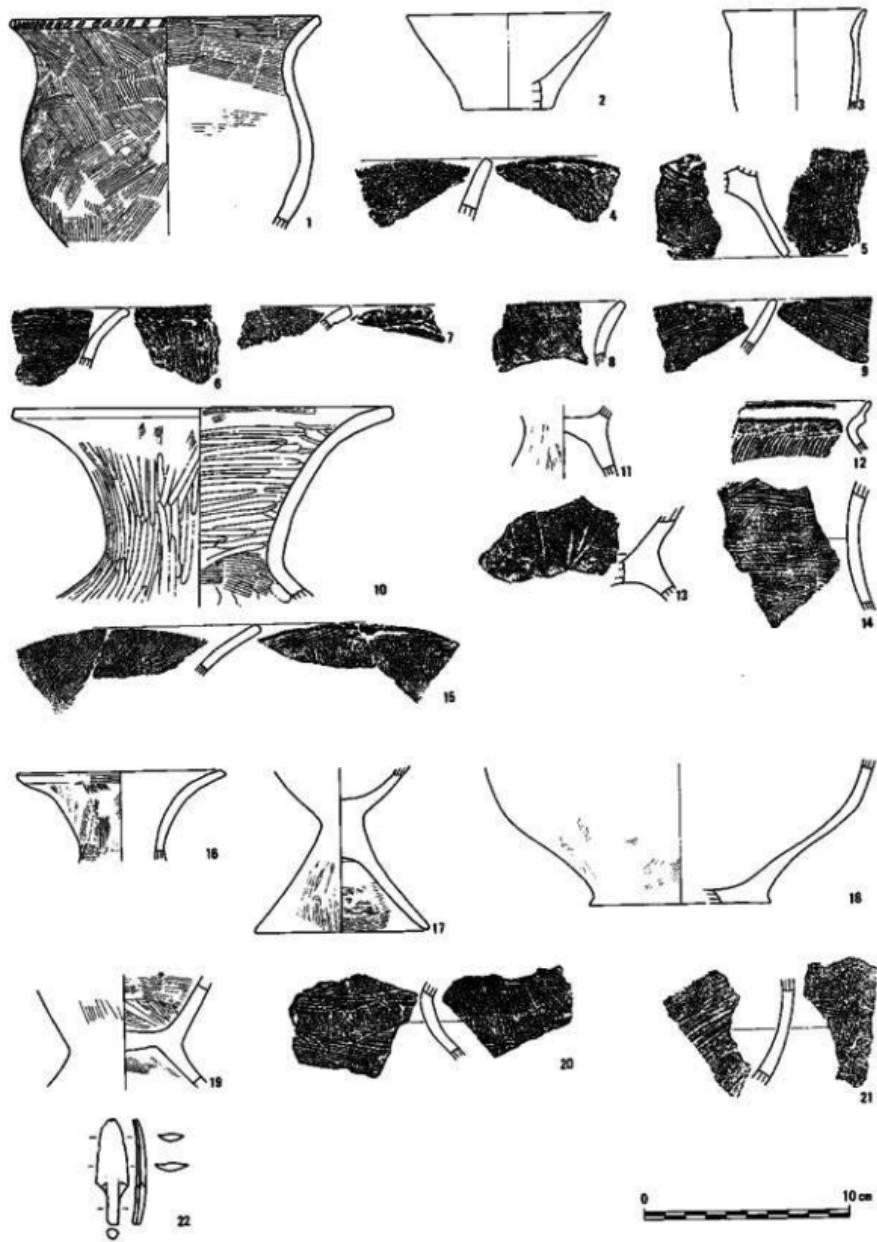
(規模) 不明。

(壁・床) 黄褐色のソフトロームをほぼ垂直12cm掘り込んでいる。床面は軟弱であり、踏み固めた痕跡は認められない。

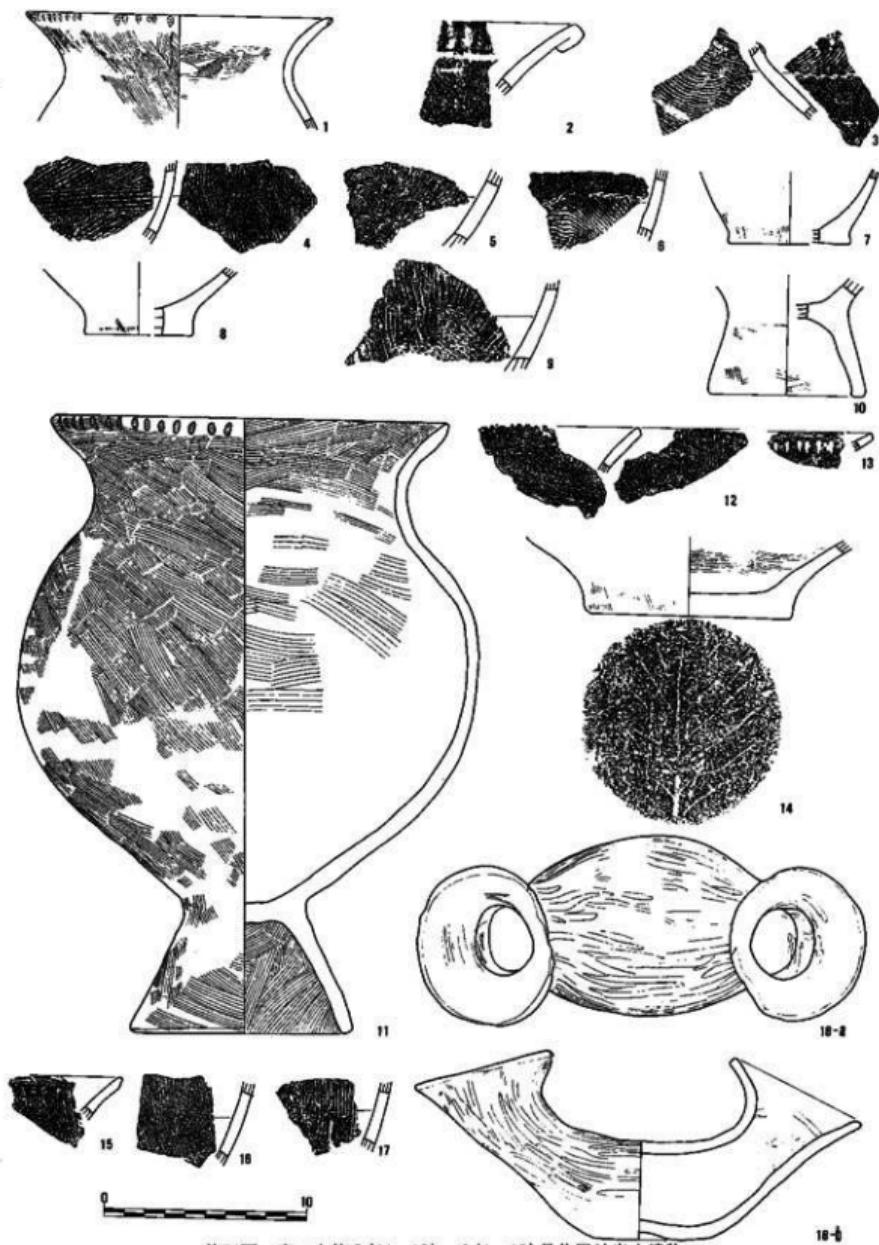
(柱穴) 不明。住居東隣に梯受け穴が認められる。

(炉址) 不明。

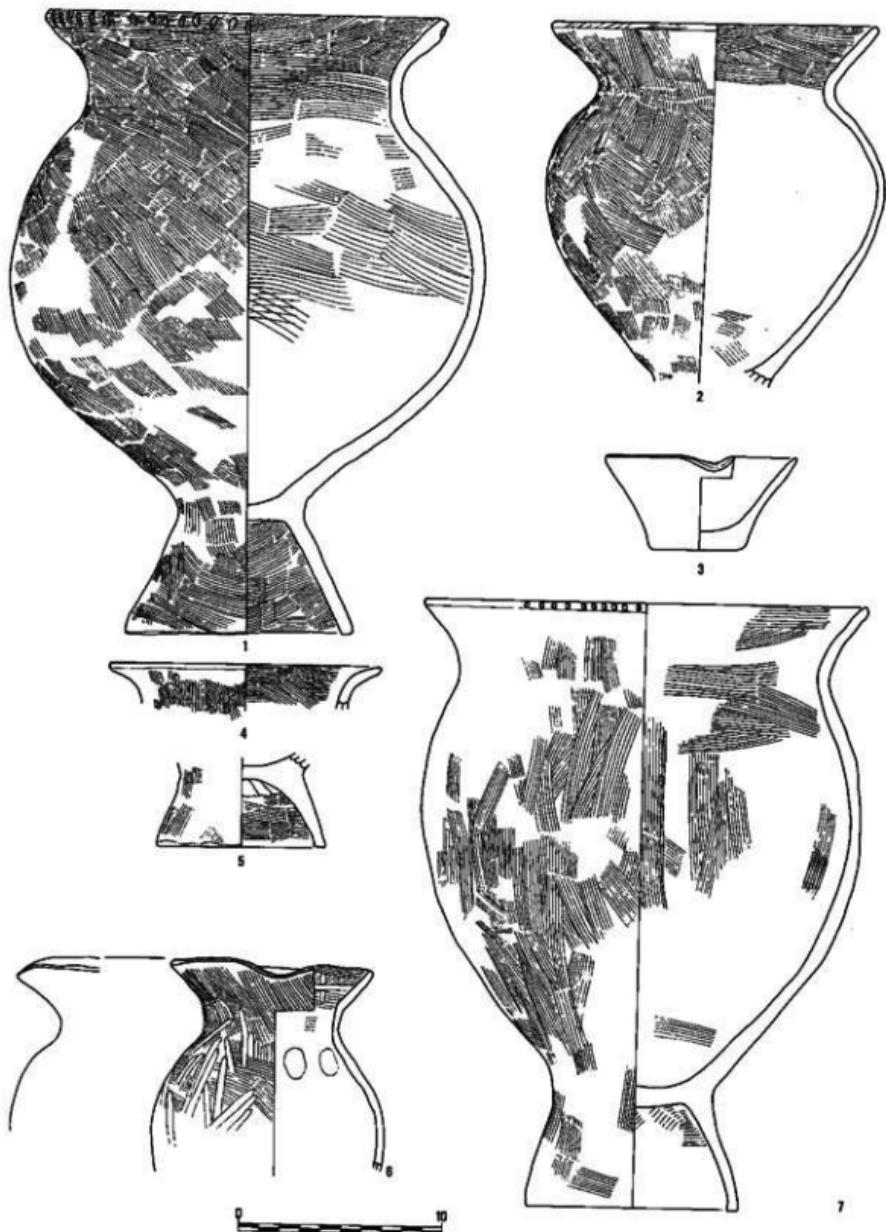
(覆土) 3層に分けられる。第I層は黒茶褐色土で黄色スコリア、木炭粒を含んでいる。第II層は暗茶褐色土であり、ロームブロックを混入する交互層である。第III層は黒褐色土と多量のロームブロックを混入する交互層である。出土遺物は時期決定となるものは検出されなかった。



第73図 宮の上第1(1~5)・2(6~15,22)・4(16~22)号住居址出土遺物



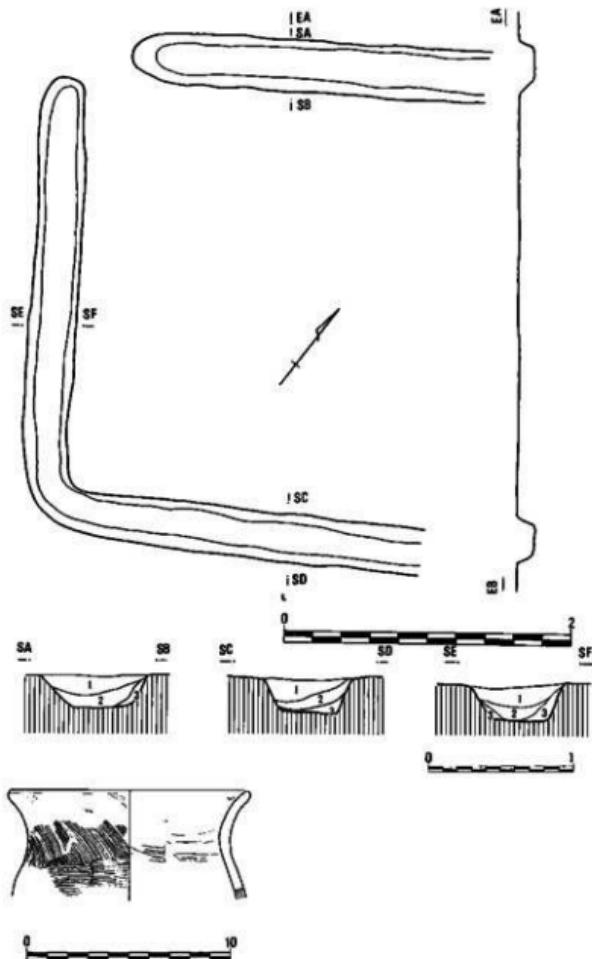
第74図 宮の上第5(11~18)・6(1~10)号住居址出土遺物



第75図 宮の上第5号住居址出土遺物

方形周溝墓

立石遺跡の最北端の一群と宮の上遺跡に位置する一群とに分けられそうであるが、発掘区は長さ100m、幅10mと極端に狭く一辺が10m以上の規模を有する方形周溝墓の分布域の推測を行うには困難なものとなっているが、発掘区西側に平坦面が広がり方形周溝墓の存在は西側方向に広がることを示唆するものである。このことから本周溝墓群は2分されず。今回発見された方形周溝墓は、立石、宮の上の兩遺跡にまたがる墓域とされること、上記より遺跡で分けることはせず一括してまとめる。



第76図 宮の上第1号方形周溝墓及び出土遺物

第1号方形周溝墓（第76図）

（概要）立石遺跡の再北端に位置して、方台部や周溝には、立石11、24、25号住居跡等が重複して認められる。方形周溝墓はこれより北西に分布の伸びが認められるが立石遺跡の住居群はこれより途絶え、宮の上住居群とは分離される様相を示す。

規模は、発掘区の東によるため、右軸左位方台辺及び左・右コーナー部分は未調査であり全容は不明である。推定左軸17.6m、右軸右位方台辺11.2m、深さ平均0.75mを計測する。埋葬施設は、農道の真下に存在してすでに削平作用により削減したと考える。溝覆土は、4層に分けられる。第Ⅰ層は黒色土で、均質なサラサラした、長期間にわたり堆積した土壤層である。第Ⅱ層は黒茶褐色土で黄色スコリア、木炭粒を僅かに含む。第Ⅲ層は暗黄褐色土でローム粒子を多量に含む。第Ⅳ層は茶褐色土とロームブロックとの交互層である。各辺は右軸右位方台辺で僅か凹凸が認められるが、基本的に直線状を呈しており、方台部の形態は隅丸方形を呈するものと考えられる。溝横断面は、底面が平坦に認められ台形状であるが、方台部よりが急斜で外側よりが緩やかな立ち上がりとなる。

（出土状況）遺物の出土量は少なく小型壺が1点、左軸左位溝のブリッジより第Ⅰ層上面から検出された。

（出土遺物）遺物は、小型壺（第76図）の1点である。肩部から以下は欠損する。接合部から湾曲しながら大きく外反する。外面は縦位方向から横位方向の刷毛調整が施される。内面は横位の刷毛調整後撫で整形が施される。

第3号方形周溝墓（第77図）

（概要）2号方形周溝墓の北側に位置する。本周溝墓4号方形周溝墓に至る間まで遺構の検出はない。

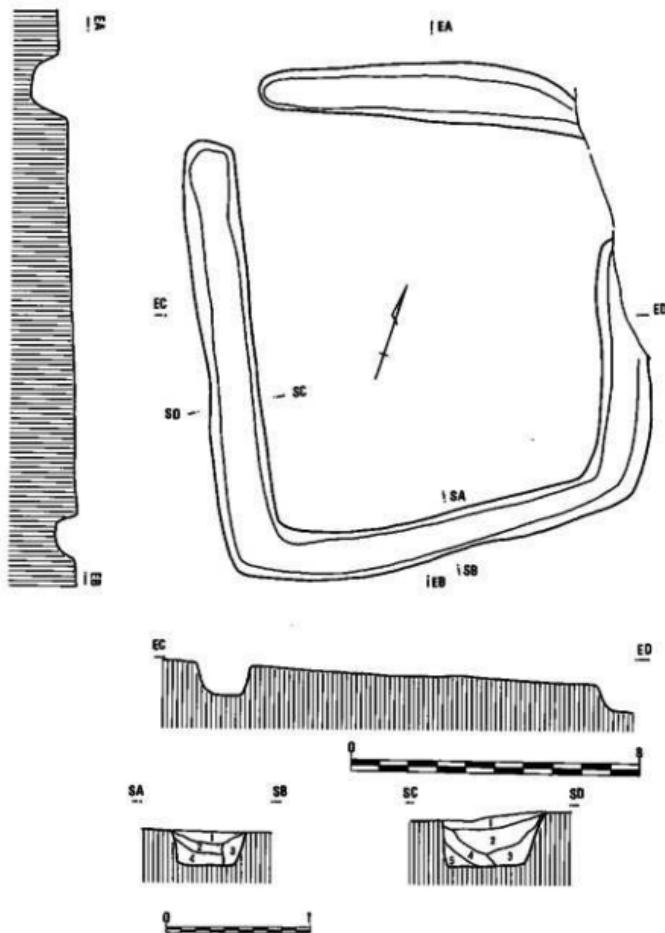
規模は、測点基準に従い計測すると、主軸14.24m、方台部右軸9.6m、方台部左軸10.72m、右軸右位方台辺11.6m、右軸左位方台辺9.2m、左軸左位方台辺10.24m、左軸右位方台辺8.56m、深さ0.72mを計測する。形態は、菱形に近い形を呈する。方台部の状況は、削平され平坦であり埋葬施設もすでに消失したものとされる。

溝覆土状態は、3～4層に分けられる。S P・A-Bでは、Ⅱ・Ⅲ層がレンズ状堆積を示すが溝外側ではⅣ層の存在があり不鮮明である。Ⅰ層は、黒色土でありサラサラした均質な土壤層である。第Ⅱ層は褐色土で、2mm大的黄色粒子を多量に含んでいる。第Ⅲ層は黒褐色土であり粘性が若干認められ、均質な土壤層である。Ⅳ層はⅠ層とロームブロックとの交互層である。S P・C-Dは、I～Ⅲ層がA-Dに対応する。Ⅲ層溝外よりは茶褐色土となる。Ⅳ層は、茶褐色土とロームブロックとの交互層である。

各辺は、右軸右位方台辺が僅かに外側に湾曲する以外はほぼ直線を呈している。溝横断面は、台形状を呈しており方台部よりが急激に立ち上がり外側は緩やかに立ち上がる。

（出土状況）遺物は2カ所に検出される。左軸左位溝ブリッジより3m付近に、広口壺2点が破壊され集中して検出される。出土位置はⅡ層最下部のⅢ層直前である。残りは左軸左位溝の

中央部で2点の小型壺を含む土器が集中して検出される。出土層位は、やはりII層最下部に当たる。



第77図 宮の上第3号方形周溝墓

(出土遺物) 遺物は広口壺、小型壺、台付甕(第85図11~14、第86図1~4)である。第86図1は接合部から大きく外反して、口縁上端では折り返され狭い段を形成する。肩部には、縄文が施され三個一単位の円形浮文が配される。刷毛調整は全面に施されるが丁寧な撫で磨きにより磨滅する。内面は横刷毛が顯著である。体部は最大径が中央に位置する球形である。第87図1は接合部で垂直に立ち上がり口縁付近で小さく外反する。口縁上端は折り返しで狭い段を形成する。内外面共に刷毛調整が顯著である。第87図2、3は小型壺で、整形は刷毛調整後丁寧な磨きが顯著である。2は肩部が長めの形態で、接合部では垂直に立ち、口縁は短く外反する。4は小型の台付甕で、接合部から「く」の字形に外反する。胴部は長めであるが最大径は中央に求められる。外面には粗い刷毛調整が顯著である。

第4号方形周溝墓(第78図)

(概要) 前記の3基を除いた宮の上遺跡の一群

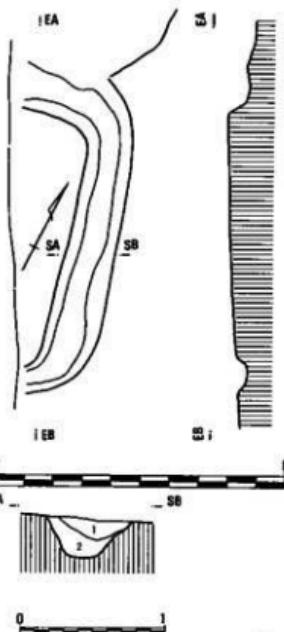
では、最南端に位置する。周溝北部では5号方形周溝墓と重複関係にあり、溝覆土の関係から、その新旧関係は5号-4号となる。

規模は、東側方台辺が6.64mを計測するが、他は未調査で計測不可能である。方台部の状況は平坦に削平され、方台部北部から南部にかけて僅かに傾斜する。埋葬施設は削平で消失する。

溝覆土の状態は、5号との切り合い関係箇所では6層に分けられる。第I層暗褐色土、第II層灰褐色土、第III層暗灰褐色土、第V層黒褐色土、第VI層暗茶褐色土である。ここでの、堆積状況は、断面中央に第I層の暗褐色土が認められ、しかも整然としたレンズ状堆積に認められるため、溝の新旧の判断は第III層が4号方形周溝墓側から伸びII層の北側下部で接する点から第III層は4号方形周溝墓の堆積土と考え、4号が5号を切る状態にあるものとした。方台辺は多くが未調査の為、計測不可能であった。溝横断面は5号との重複関係箇所を除くとU字状となり、方台部寄りが急斜に外側が緩やかな立ち上がりとなる。

(出土状況) 遺物は極端に少なく台付甕1点が検出されたのみである。出土層位は第I層上面である。

(出土遺物) 台付甕(第88図1)は接合部で「く」字形に大きく外反する形態であり、口縁部上端には刻み目を有する。



第78図 宮の上第4号方形周溝墓

第5号方形周溝墓（第79図）

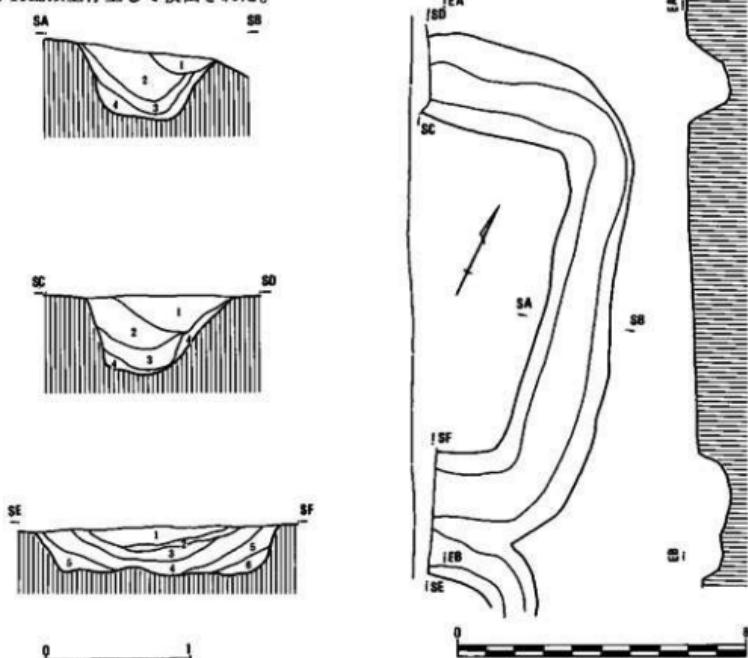
（概要）4号方形周溝墓と周溝において重複関係が認められ第4号方形周溝墓に切られる。

周溝部東側では、旧農道敷設の痕跡が認められ極端に地形が削平され変化している。

規模は、本方形周溝墓が西側に寄って位置する為、方台部の大部分は未調査であり、東側の方台辺が計測可能であり、長さ8.64m、深さ1.08m、幅2.0mである。主軸方位は不明。埋葬施設は、方台部の大部分が未調査であるが、確認部の状況からは、削平の為、方台部は平坦となりすでに消失しているものと考えられる。溝覆土の状態は、4層に分けられる。第Ⅰ層は、暗褐色土でサラサラした土壤層であり緻密で均質であり、細かいスコリアを含んでいる。第Ⅱ層は、茶褐色土であり、Ⅰ層に比較して粘性、しまりは強い。黒色、黄色スコリアを含む。第Ⅲ層は、黒褐色土であり黄色スコリアを含む。第Ⅳ層は、暗茶褐色土であり、黒色土とロームが小ブロック状に認められる交互層である。方台辺平面は東辺北部で僅かな内湾が認められるが全体は直線を呈して隅丸となる。

溝横断面は、U字状を呈するが方台部側が急激に立ち上がり、外側は緩やかとなり、堆積状況もそれに対応する。

（出土状況）東南コーナーより北側に、周溝内側に口縁部を斜め下に向けて認められる。底面より10cm以上浮上して検出された。



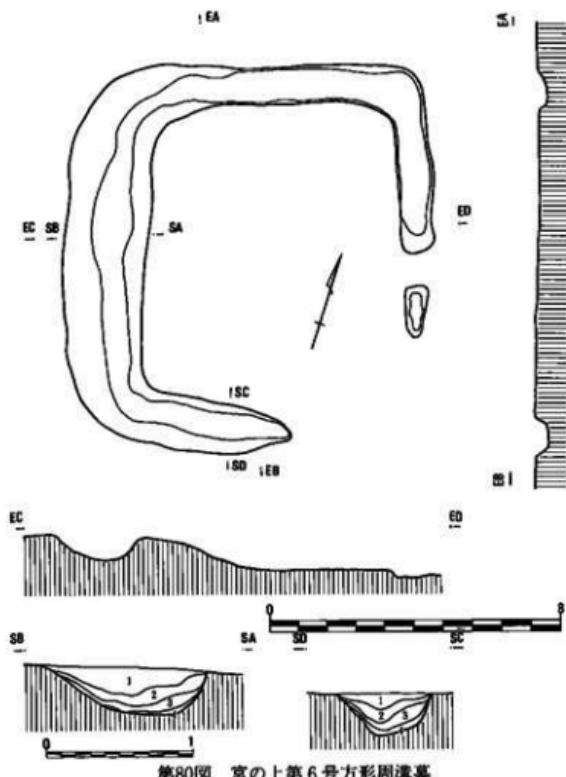
第79図 宮の上第5号方形周溝墓

(出土遺物) 遺物は長頸壺(第88図2)の1点で、外面には赤色塗る。口縁部は接合部から、「く」字状に大きく開く形態である。胴部は最大径がやや下に位置して、しもぶくれの形を呈する。整形は刷毛調整-範磨き-赤色塗彩である。

第6号方形周溝墓(第80図)

(概要) 方形周溝墓群の中央よりやや南側に位置する。方台部および周溝部の東側部分は4、5号同様、旧農道工事により削平され、段差がつくほど地形は削平され方台部は極端に変形される。右溝は底部の最下層が認められる程度で辛うじてプランが確認される。

規模は、測量基準に従い計測すると、主軸10.56m、方台部は右輪6.96m、方台部左輪8.4m、右輪右方位台辺8.32m、右輪左方位台辺7.04m、左輪左方位台辺7.2m、左輪右方位台辺6.4m、溝深さ平均0.64mである。埋葬施設は農業用道路により削平されて、すでに消失して検出されない。溝覆土の状況は、4層に分けられる。第Ⅰ層は黒色土でサラサラした土壤層である。第Ⅱ層は茶褐色土で粘性・しまりを有する。第Ⅲ層は暗褐色土で黒色土との交互層である。第Ⅳ層



第80図 宮の上第6号方形周溝墓

は暗黄褐色で粘性・しまりを有するが短期間の堆積と考えられる。

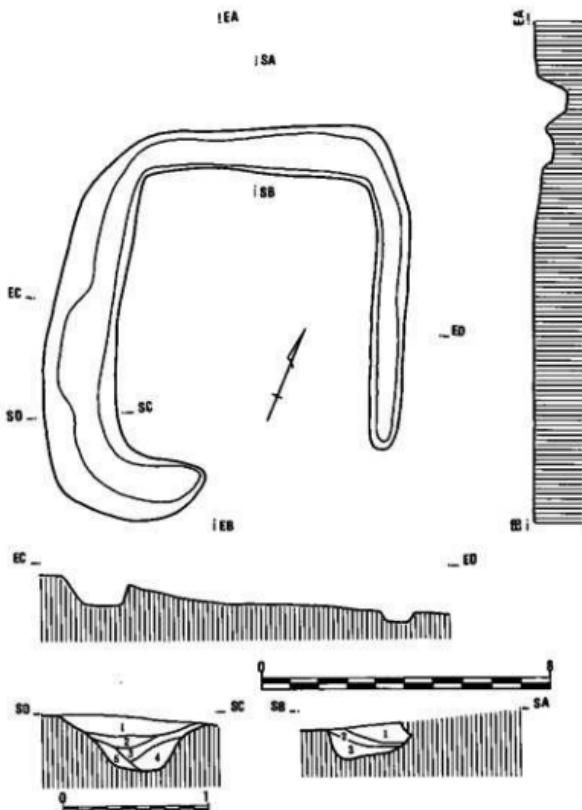
各辺平面は、基本的に直線状となるが左軸右位方台辺は外側に緩いカーブを描く。溝横断面はU字状となるが、方台部寄りの壁は急激に立ち上がり溝外側は緩やかとなる。

溝縦断面は左溝底部に凸凹が認められるが、他の周溝底部はほぼ平坦であるといえる。
(出土状況) 小型壺1点が中央コーナーよりの左軸左位溝で検出され、第I層上面で斜位に認められた。

(出土遺物) 遺物は、第88図3の小型壺1点である。接合部から上部は垂直に直立してから口縁部にむかって大きく外反する。整形は外面で刷毛調整後鏡磨き、内面は刷毛調整による。

第7号方形周溝墓（第81図）

(概要) 宮の上方形周溝墓群のほぼ中央に位置して北側周溝が8号方形周溝墓と重複する。そ



第81図 宮の上第7号方形周溝墓

の前後関係は溝の土層堆積状況の観察から8号が7号を切り、7号-8号の順となる。方台部の東側では旧農道の真下に位置しており、その際に陸橋部を中心に削平が進んでいる。規模は、上ノ平方形周溝墓測点基準に従い計測すると、主軸推定10.04m、方台部右軸6.96m、方台部左軸8.2m、右軸右位方台辺8.0m、右軸左位方台辺7.52m、左軸左位方台辺6.96m、左軸右位方台辺6.24m、深さ0.76mとなり、方台部は僅かに南北に長い隅丸方形となる。埋葬施設は方台部が削平されて平坦となっており、すでに消滅したものと考える。溝横断面は、U字状に近い形態であるが、方台部寄りが急激に立ち上がり、外側が緩やかとなり、堆積土壌はそれに対応する。

溝覆土の内容は、3~5層に分けられる。S P・C-Dでは、第Ⅰ層はサラサラした緻密な黒色土で、長年にわたり堆積した土壌層である。第Ⅱ層は黒褐色土で、粘性、しまりを有し均質である。第Ⅲ層は灰褐色土である。第Ⅳ・V層は溝底面に直接堆積した土壌層であり、均質であるが色調により分離した。

(出土状況) 遺物量は少なく、右コーナーで図示の2点が検出された。出土層位はⅡ層下部である。

(出土遺物) 遺物は壺底部、台付壺脚部である(第88図4、5)。5は底部より直線的に大きく外反する。外面には刷毛調整が施される。

第8号方形周溝墓(第82図)

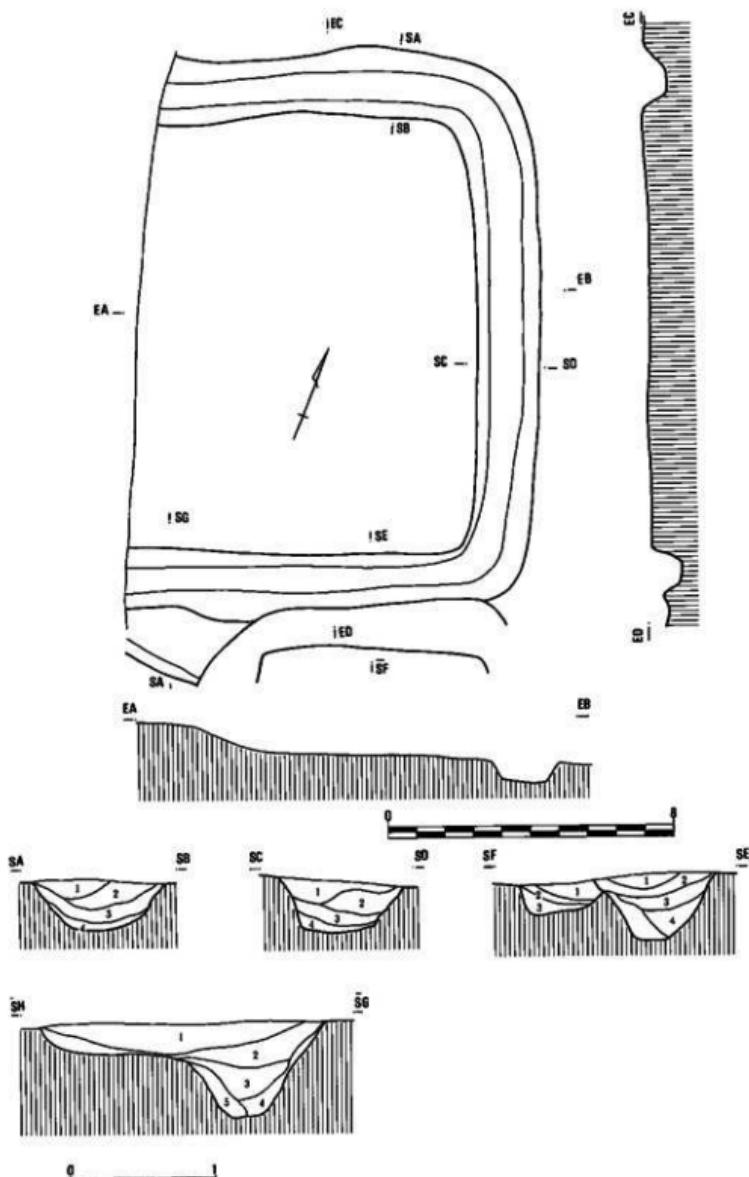
(概要) 方形周溝墓群の中央寄り北側に位置する。周溝南部で7号方形周溝墓と重複関係にあり、7号の溝を8号が切ることより、その新旧関係は7号-8号となる。本方形周溝墓の発掘区東側部分は空白部となっており、そのすぐ先は急斜となっており、方形周溝墓群の東端を形成する。

規模は方台部が発掘区の西寄りに位置するため一部未調査となり、東辺のみ計測可能であり11.68m、最深で1.36mを計測する。主軸方位は陸橋部未確認の為不明である。方台部は削平により平坦となっており、埋葬施設もすでに消失したものと考えられる。

溝覆土の状況は、4~5層に分けられる。第Ⅰ層は黒色土でありサラサラした土壌層であり、均質であるが木炭粒子、僅かなローム粒子を含む。第Ⅱ層は茶褐色土であり第Ⅰ層に比較して粒子はやや粗い。第Ⅲ層は暗茶褐色土である。第Ⅳ層は暗褐色土とロームブロックとの交互層である。S P・E F・G Hでは、最下層のⅣ層が黄褐色と暗褐色に分けられる。ともにロームブロックとの交互層である。

(出土状況) 一括集中の出土箇所は認められない。北溝西側から小型壺、小型鉢形土器が検出される。出土層位は第Ⅰ層下部にあたる。

(出土遺物) 遺物は二重口縁壺、台付壺、小型壺である(第88図6~18)。6は小型壺で接合部から大きく開く口縁を有する。肩部の最大径はやや下位にあり、しもぶくれである。外面には刷毛調整が認められ、口縁上端には刻み目が施される。14~18は二重口縁壺であり、横位の刷毛調整後、縦列沈線が施される。



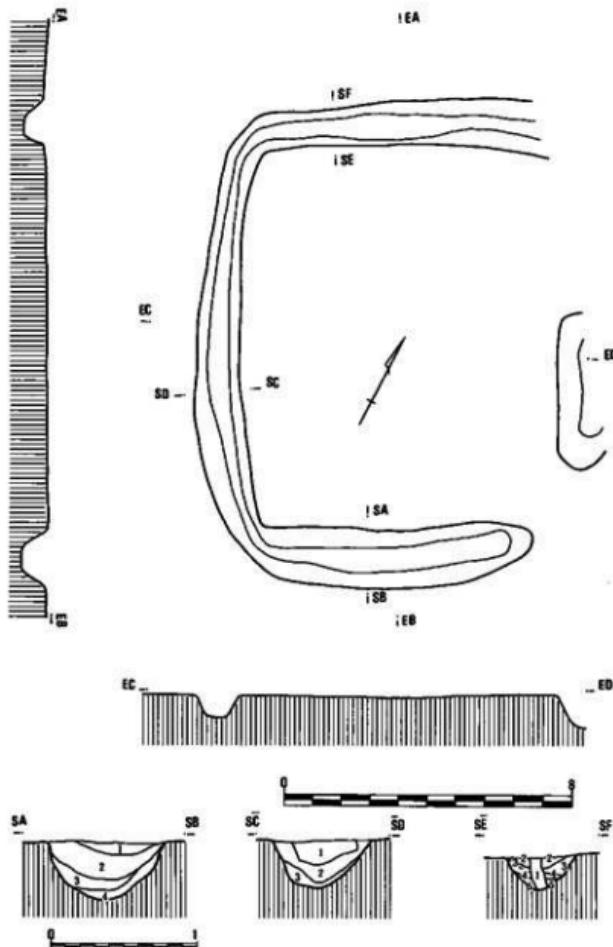
第82図 宮の上第8号方形周溝墓

第2節 古墳時代の遺構と遺物

第2号方形周溝墓（第83図）

（概要）本方形周溝墓区画外のすぐ南から、宮の上・立石遺跡の書類上の境界線が存在し、第1号方形周溝墓が南に隣接する。住居跡群は本遺構から宮の上住居群に到るまで検出されない。また、本周溝墓は、発掘区のやや北寄りに位置するため一部が未発掘である。

規模は、測点基準に従い計測すると、主軸12.8m、方台部右軸8.8m、方台部左軸10.56m、右



第83図 宮の上第2号方形周溝墓

輪右方位台辺10.0m、右輪左方位台辺10.1m、左輪左方位台辺8.0m、左輪右方位台8.0m、深さ0.7mで、形態は長方形である。方台部は削平され平坦であり、埋葬施設はすでに削平され消失したものと考えられる。各辺平面状況は、右輪左方位台辺が外側に僅かに湾曲するが他は直線を呈して、方台部形態は南北に長い隅丸方形となる。

溝覆土状況は、3~4層に分けられる。SP・A-Bでは第Ⅰ層は黒色土でサラサラした土壤層で黄色スコリアを少量含む。第Ⅱ層は褐色土で2mm大の黄色スコリアが目立つ。第Ⅲ層は黒褐色土で均一である。第Ⅳ層は暗黒褐色土とロームブロックとの交互層である。

溝横断面はU字状を呈しているが、方台部よりも急激に立ち上がり、溝外側が緩やかとなる。(出土状況) 遺物の一括集中は認められないが左輪左方位溝ブリッジより遺物出土が多い。出土層位はⅡ層下部に集中する。

(出土遺物) 遺物は、S字甕、壺、器台、台付甕である(第85図1~10)。3は、S字口縁で型形の製品であり、接合部から大きく外反する形態である。外面は右下→左上、右上の順で刷毛調整が認められる。器台4は、小型製品で精製化している。坏部中央で屈折して大きく外反する。壺7は最大径が下端に位置する。丁寧な刷毛、磨きが認められる。

第9号方形周溝墓(第84図)

(概要) 宮の上遺跡・方形周溝墓群の北端に位置する。発掘区のやや中央よりに存在するが平面は区域内に収まる。これより8号住居まで、遺構の空白部が30m以上も続き、あたかも住居空間と墓域が分離されるように認められる。

本方形周溝墓は、周溝の一辺の中央に陸橋部を有する点で、上ノ平遺跡周辺に存在する方形周溝墓の形態と様相を異にする。

規模は、主軸9.44m、横軸8.56m、陸橋部幅2.24m、陸橋部長1.6mを計測する。方台部は平坦であるが地形の関係上、西側から東側にかけて僅かに傾斜する。方台部形態は、ほぼ方形を呈するが四隅の下位部分では突出する。

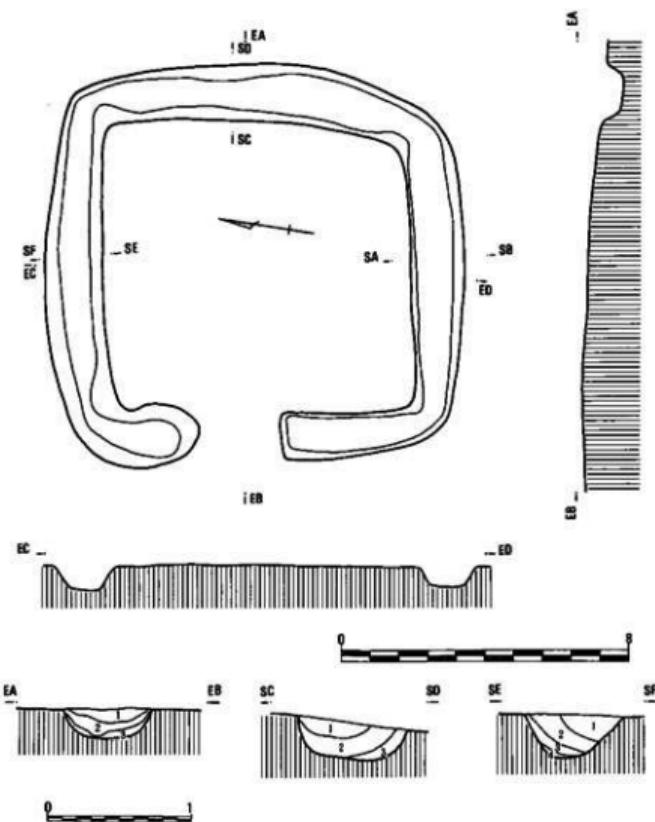
埋葬施設は削平の為すでに消失したものと考えられるが、方台部中央での、旧石器確認調査の際に第Ⅱ層黒色土上部で、ガラス玉1ヶが検出された。これは、偶然に木柵の1cm大の穴を通りロームまで達した事が判明し、主体部門連施設が中央部に存在したことを示唆している。溝覆土は、3層に分けられる。第Ⅰ層は黒色土で、サラサラした土壤層であるが、茶褐色土のブロックを含む。第Ⅱ層はやはり黒色土であるが均質であり長期間にわたり堆積した土壤層である。第Ⅲ層は、暗褐色土と黒色土との交互層である。

方台部は各辺平面が直線を呈して隅丸方形となるが、各コーナーの下部は溝側に突出した形態となっている。溝横断面は、U字状を呈するが僅かに方台部よりも急斜に立ち上がって、堆積状況もそれに対応する。

(出土状況) 遺物は、ブリッジ左側溝とブリッジ対応辺に認められる。出土層位はⅡ層下部にあたり、底部よりわずかに浮上する。

(出土遺物) 遺物は、垂下口縁壺、台付甕、壺底部である。(第89図1~3)。1は幅3.3cmを計

る垂下口縁を有して、二本一単位の棒状浮文を4単位配置する。文様は認められず、丁寧な刷毛調整後、範磨きが施され、その後赤色顔料が塗彩される。底部は焼成後意図的に底部を破壊して欠損する。2は台付窓で接合部から短い口縁が大きく外反する。体部は肩部に最大径がある。脚部は欠損する。外面は丁寧な刷毛調整後、磨きが施される。内面は胴部で斜位、横位方向の刷毛調整が認められる。3は壺の肩部以上を欠いて胴部から底部にかけての部分で、最大径が下半に位置して、No.1の口縁垂下壺に形態的、整形等が近似する。

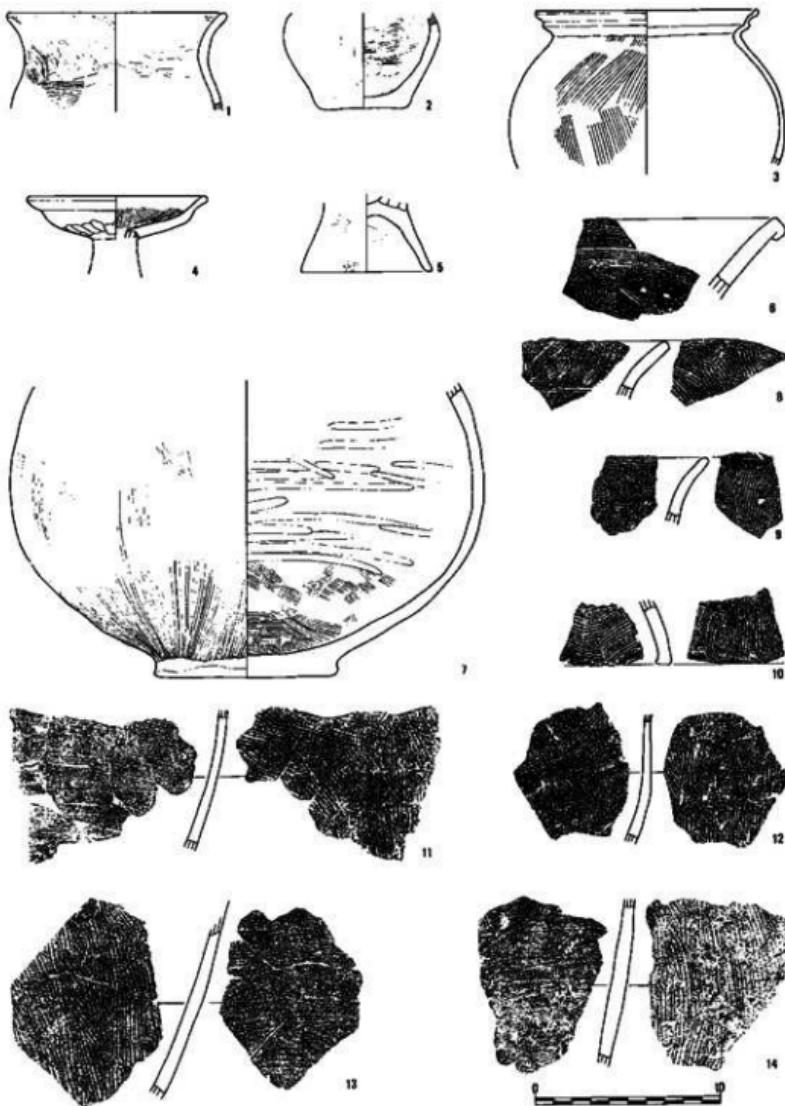


第84図 宮の上第9号方形周溝墓

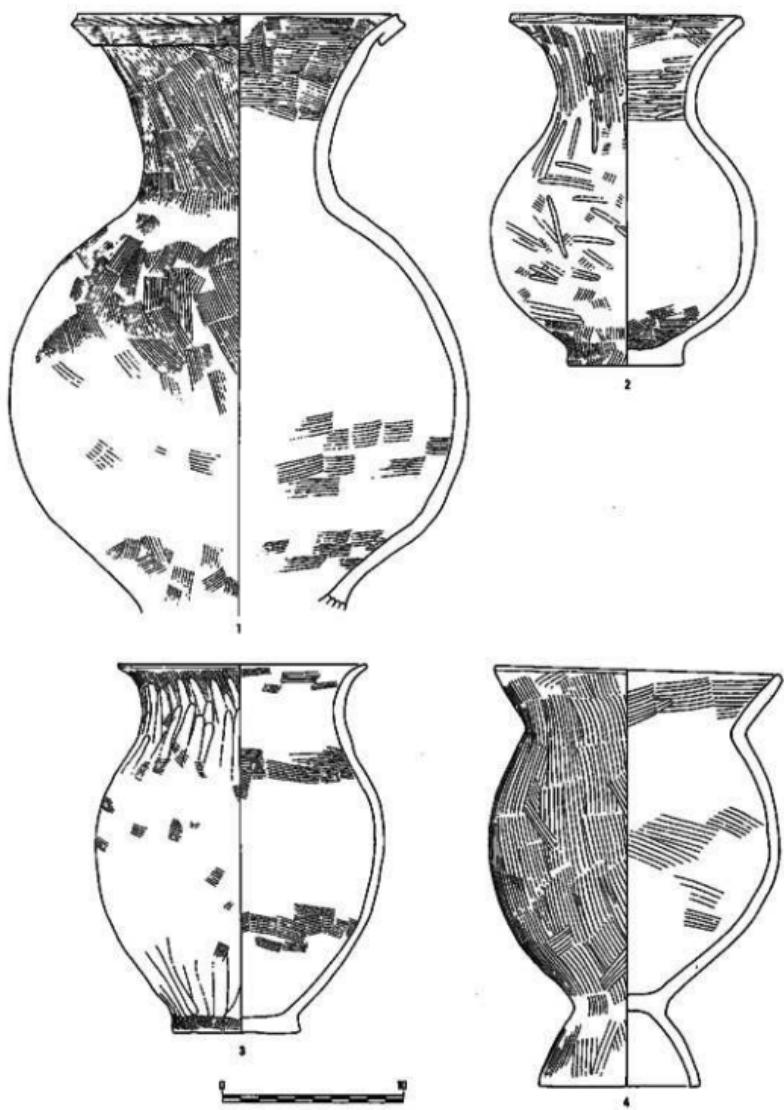
小 結

宮の上遺跡での方形周溝墓の検出は、上ノ平方形周溝墓群が上ノ平遺跡の南端で集落となり、それに続く宮の上遺跡北部でも集落が検出されるところから、墓域は途切れ以南は集落址として想定されたが、やはり墓域としての性格が与えられる結果となった。発掘区、台地の東端に当たり遺跡の展開される平坦地は西側に大きく広がりをみせて方形周溝墓の増加を暗示している。今回発見された方形周溝墓の形態は1例を除いて従来通りの、四隅の一箇所に陸橋を有するものであり、上ノ平墓域群とともに周辺集落との共同墓域的性格が与えられるものであった。

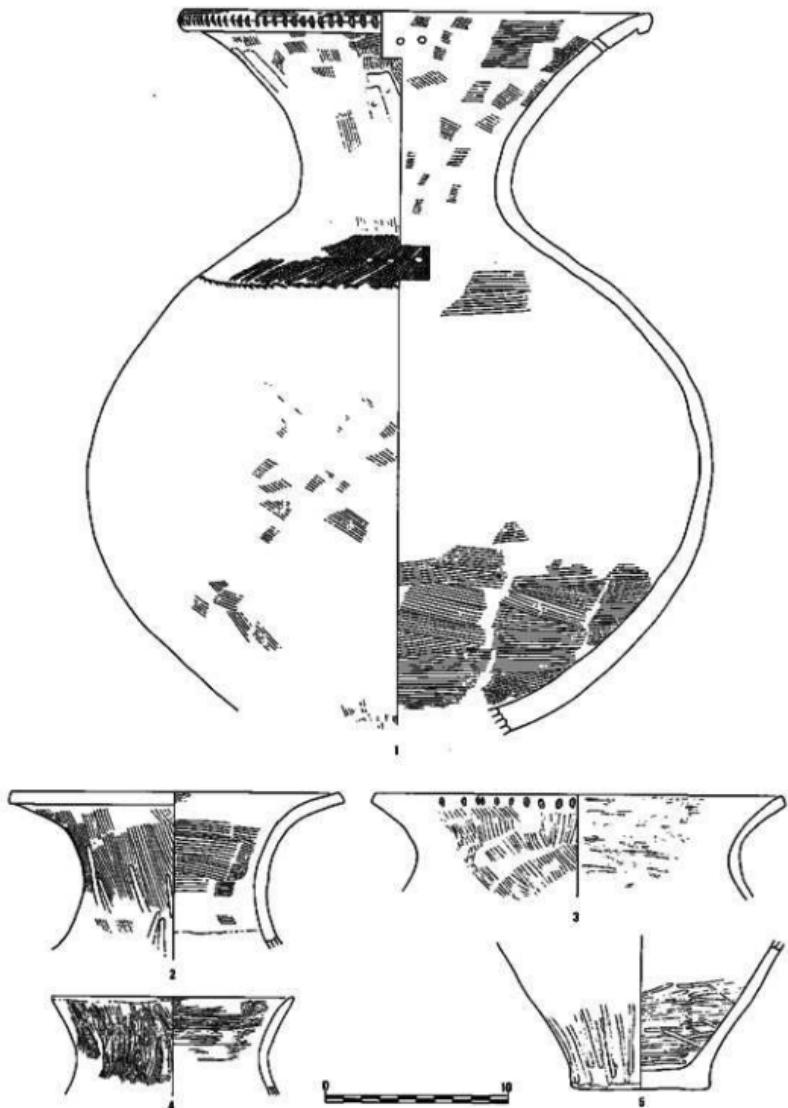
残る1基は、本方形周溝墓群の最北にあたり、遺跡の東端に占地している。規模は主軸が9mを計測する、本地域では中規模な方形周溝墓であるが、周溝部の中央やや左寄りに陸橋部を有する点、四隅下位が突出することなどが特徴である。供献土器は、3固体があり、その内の一つは焼成後の底部穿孔土器であり、パレススタイル壺とされる垂下口縁壺である。赤色塗彩されるが文様は省略されており、製作手法、形態より週間ⅡからⅢ期への移行期と考えられるもので、方形周溝墓の形態、供献土器の様相からして東海系の影響を受けて成立した結果としてとらえられる。このような形態を呈する方形周溝墓は本県では少なく、甲府盆地南縁の三珠町上野遺跡に周溝の四隅以外に陸橋が認められる例が存在する程度で、本方形周溝墓の形態の存在は特異でありその出自をめぐって今後論議を呼ぶものと考えられる。



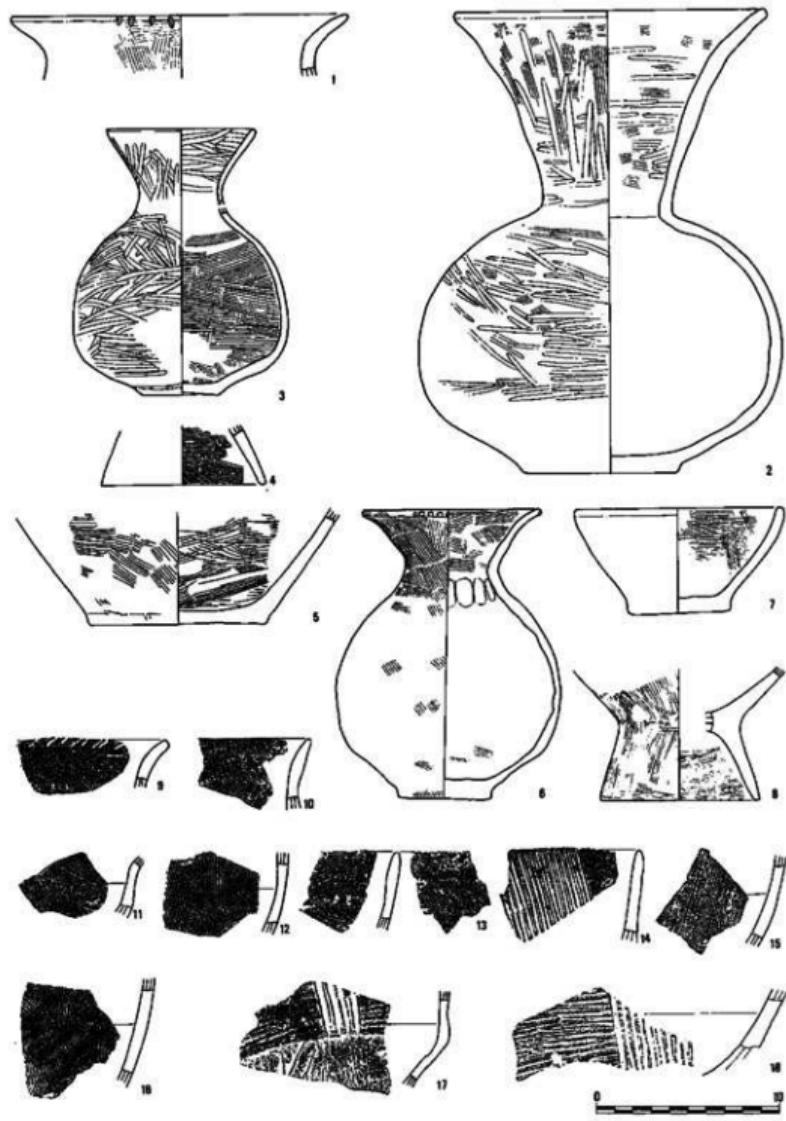
第85図 宮の上第2(1~10)・3(11~14)号方形周溝墓出土遺物



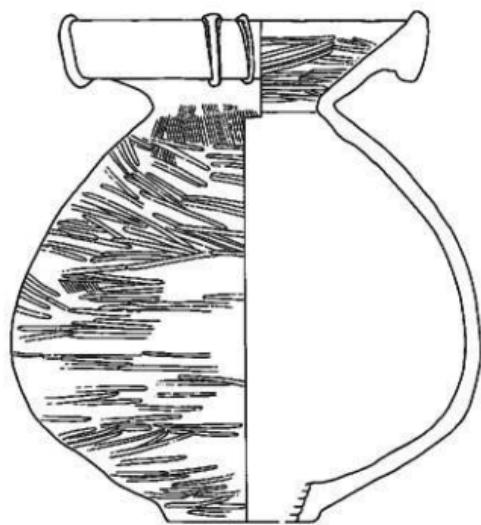
第86図 宮の上第3号方形周溝墓出土遺物



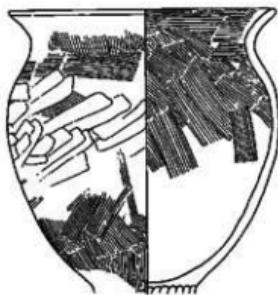
第87図 宮の上第3号方形周溝墓出土遺物



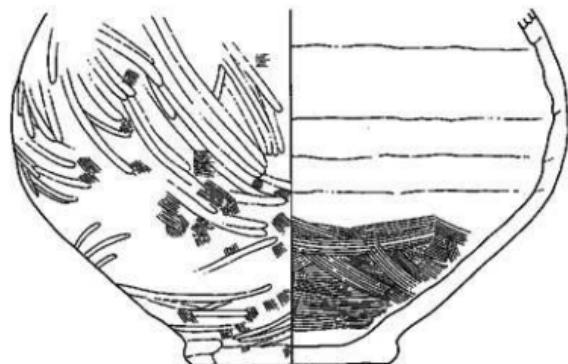
第88図 宮の上第4(1)・5(2)・6(3)・7(4.5)・8(6~18)号方形周溝墓出土遺物



1



2



3



第89図 宮の上第9号方形周溝墓出土遺物

総 括

立石・宮の上遺跡の発掘調査結果をまとめ、今後の研究課題としたい。

1. 旧石器時代

文化層は、自然層第Ⅱ層から第Ⅳ層までの間に小規模ながら3枚の文化層が確認された。この事実は県内では唯一の例であり今後該期の研究が進行するなかで、本遺跡の占める位置が重要なものとなろう。以下にその概略を記す。

第Ⅰ文化層

自然層第Ⅱ層中位に確認された。出土遺物はナイフ形石器が3点検出されたが、その内の2点は、武藏野台地第Ⅳ下層にかけて出土するナイフ形石器製作にかかる剥片剥離技術、ナイフ形石器製作技術・形態の特徴を有している。この文化層では、遺構は確認されず、石器類はいずれも単独出土である。

第Ⅱ文化層

自然層第Ⅲ層中位から下位にかけて検出された。始良丹沢バミス（AT）が第Ⅱ層下位から第Ⅲ層上位にかけて分布していることから、始良丹沢バミス下位に相当する文化層ということになる。

出土遺物は、ナイフ形石器、石刃、剥片類である。遺構は礫、礫3号を伴わない石器集中箇所が3箇所検出された。この文化層を特徴付けるのは、やはりナイフ形石器である。1985年度の調査では同一層位からは、台形様石器が出土しておりIX層相当として把握された。本地点での調査結果からは、武藏野台地第VII層からVI層にかけて認められる基部周辺と一側縁加工の第I類ナイフ形石器と大形な石刃を素材に用いて、基部周辺の一部に修正を施した、武藏野台地第X層からVI層に検出されるナイフ形石器第III類が認められた。このことから本遺跡の編年的位置を考えると、第VII層から第VI層にかけて認められるナイフ形石器第I類が認められる点、又IX層からVII層をピークに検出される基部周辺加工のナイフ形石器第III類は、大形製品も認められるが、小型化の傾向を示唆した内容を示していることより本文化はナイフ形石器文化の古相の新としてとらえられ、さらに1985年の調査結果の台形様石器の存在を加味して本石器群の評価を与えると、武藏野台地第IX層から第VII層への移行過程の様相として把握するのが妥当かと考える。

第Ⅲ文化層

自然層第IV層上位から20cmの深さの位置で両端を欠損する石刃1点が検出された。出土層位さらに第Ⅱ文化層（武藏野台地第IX層からVII層へ移行期）の存在から判断して、武藏野台地から第X層から第IX層に対比されるものと考える。今回の調査では1点の検出ではあったが、今後、当地域の調査の進展によっては第Ⅲ文化層の内容が解明される日も近いと考える。

2. 縄文時代

前期初頭の集落址の一部と考えられる住居群が7軒が検出された。住居形態は一型式の比較

的限られた期間内に方形・梢円形・円形と多様に認められた。住居内中央寄りには地床炉が確認されるが住居廃絶時に石皿で炉を覆うように設置した特異な状態が4例認められた事実は特筆される。また、出土土器からの本遺跡の編年的位置は東海系水島窪期に対比された。甲府盆地での該期の出土例は、北巨摩郡を中心に金生遺跡、塩川ダム遺跡、甲ツ原遺跡の良好な遺跡が検出されており、その編年的位置は前述したが製作技術の観察結果からは、金生遺跡—塩川遺跡—立石・甲ツ原遺跡の順と断定された。

3. 弥生時代・古墳時代

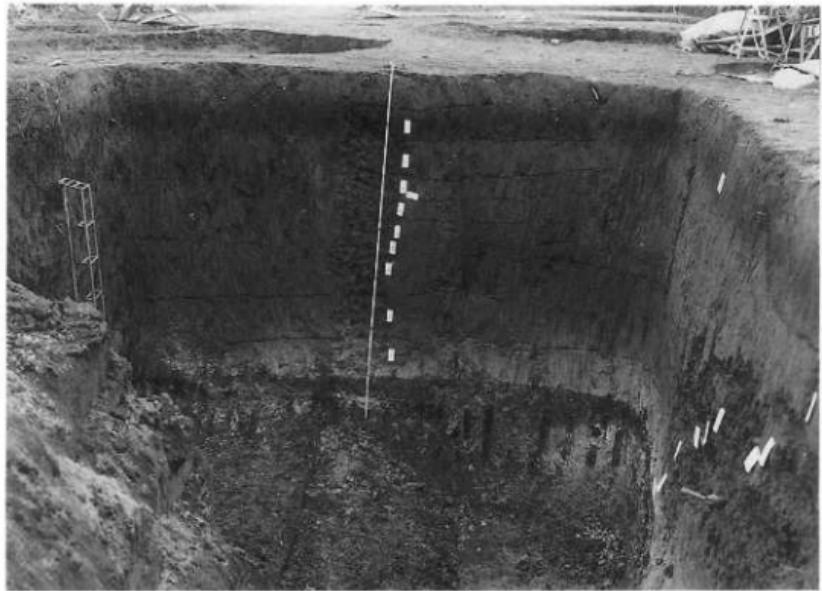
立石・宮の上遺跡では、弥生時代の住居址23軒と方形周溝墓7基、古墳時代の住居址6軒と方形周溝墓2基が確認された。遺構配置は、数基の方形周溝墓を中心として、住居群がそれを取り囲む半ドーナツ状が想定され、今回の発掘区域はそのほぼ東端に位置するものと考えられる。ここで特筆されるのは4世紀中葉に位置する、一辺のほぼ中央に陸橋を設置するB-1型式の第7号形周溝墓の存在である。出土土器では、底部欠損の週間Ⅱから週間Ⅲ期への移行過程の垂下口縁壺を出土して上ノ平遺跡を含めた周辺の周溝墓が四隅の一ヶ所に陸橋を設置したものとは形態的にも内容的にも異なっており、古墳出現前に淡尾平野勢力の進出を示唆しているものといえる。又本方形周溝墓の立地の特徴は、集落内に造営されるものであり、さらに集落と隔離され墓域として形成される上ノ平遺跡とは異なり、単独で集落から離れて立地する高塚古墳とは内容・質的にも格差が認められる。甲斐国における出現期古墳の被葬者層には旧来の在地勢力、淡尾平野勢力、さらに畿内勢力等が考えられる。

本県の古墳出現期の研究の中における本遺跡・特に第7号方形周溝墓の歴史的意義は重要な位置を占めるものと考えられる。

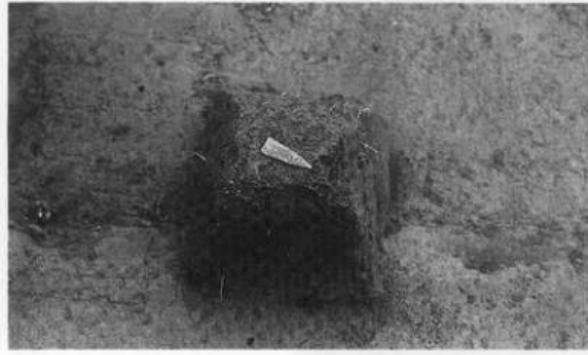
以上、立石・宮の上遺跡の調査結果では、上記の旧石器時代の3層にわたる重層遺跡、縄文時代の東海系水島系土器を出土する集落の検出、さらに古墳時代4世紀第3四半期初頭の一辺の中央に陸橋を有する方形周溝墓などの良好な資料を得ることが出来た。これらはいずれも本県における該期の空白部を埋める資料であり唯一であることから本遺跡を含めた曾根丘陵台地が該期を研究する上でさらに重要視されるものとなろう。

(小林広和・里村晃一)

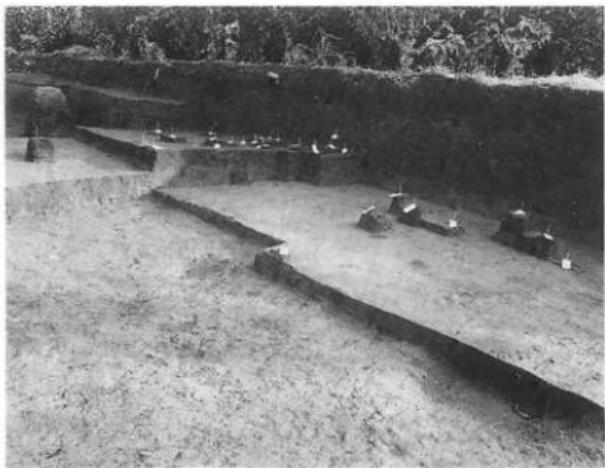
図 版



立石・宮の上遺跡標準土層（宮の上地区）



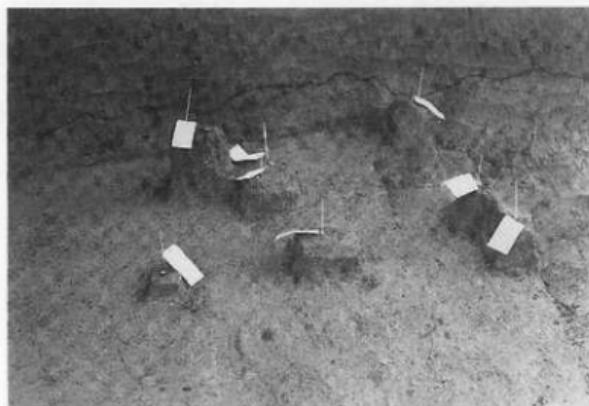
立石第1ブロック
出土状況



立石第2ブロック出土状況



立石第3 ブロック出土状況



立石第1 ブロック出土状況



同 上



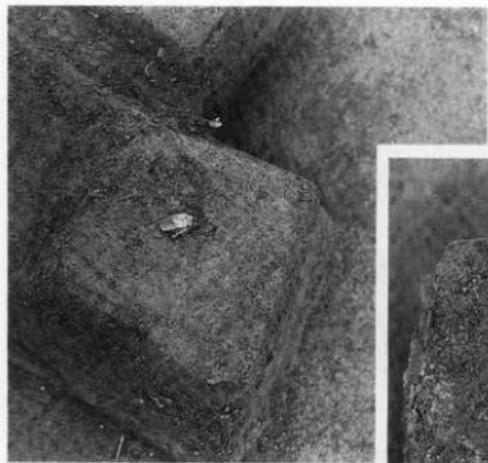
立石・宮の上出土遺物（上段左3点は第Ⅰ文化層他は第Ⅱ文化層）



同上（第Ⅱ文化層出土遺物）

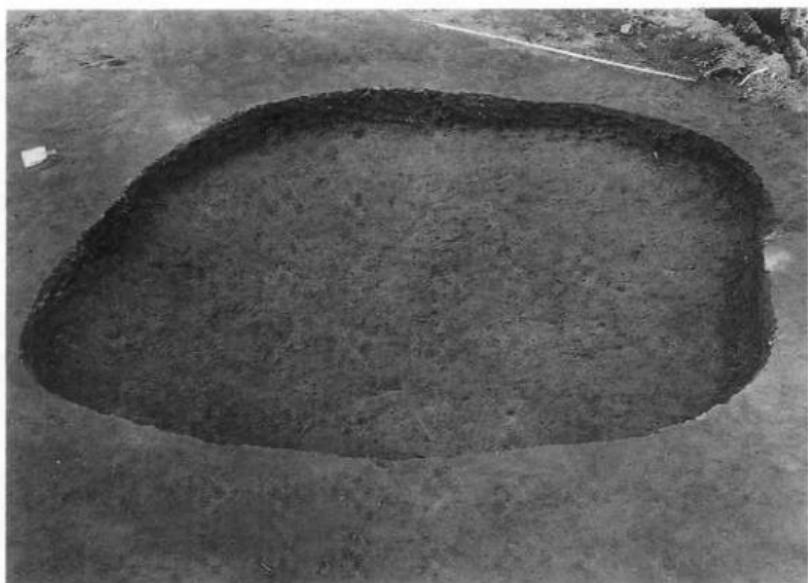


立石・宮の上出土遺物（上段及下段左1点は第Ⅱ文化・下段左2個は第Ⅲ文化
残りは他時期遺構出土）

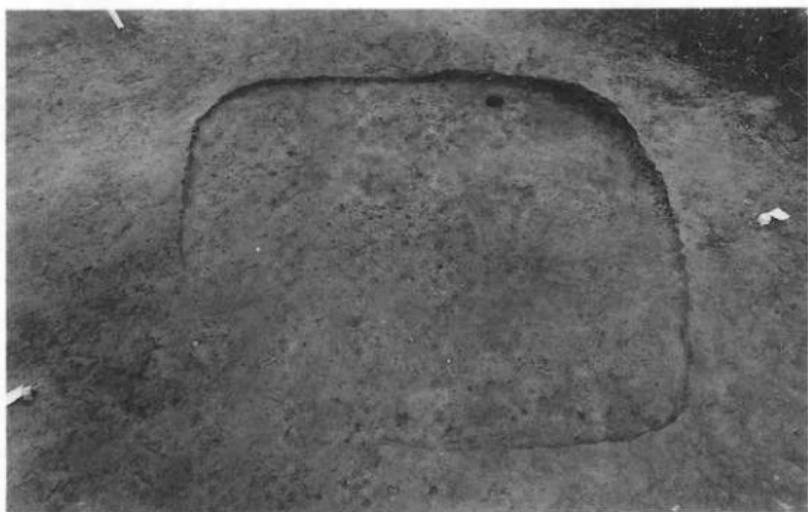


第2ブロック出土状況

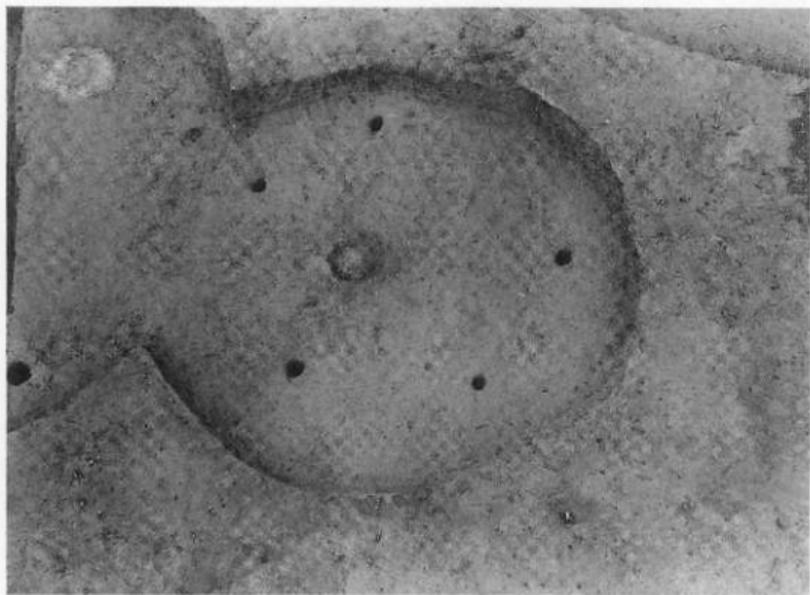
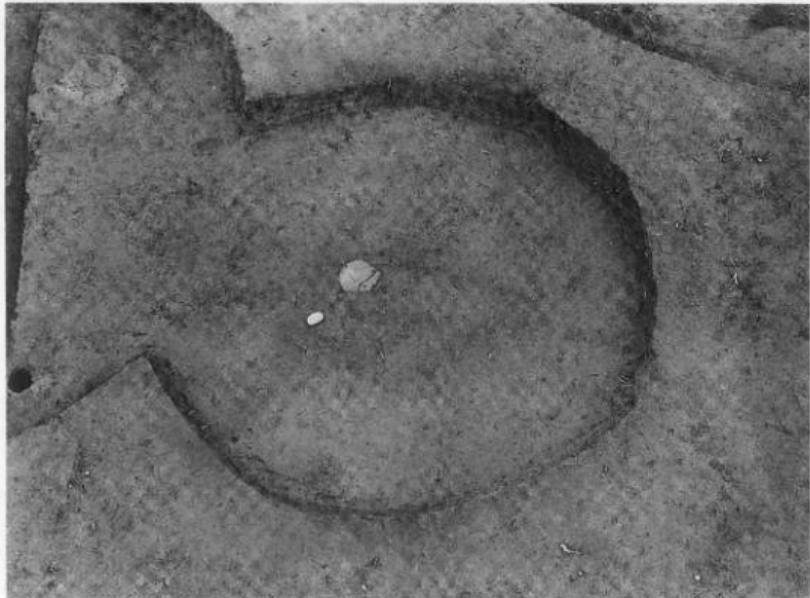




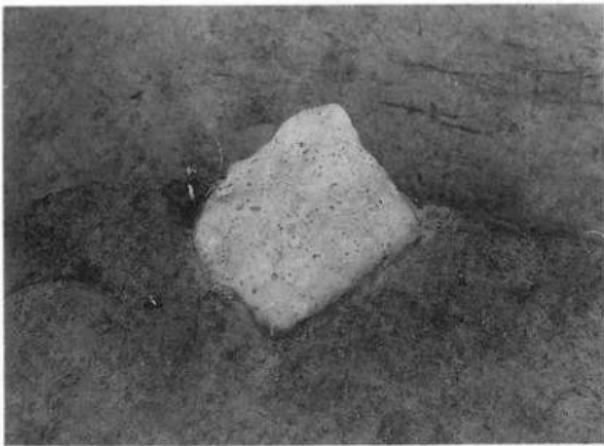
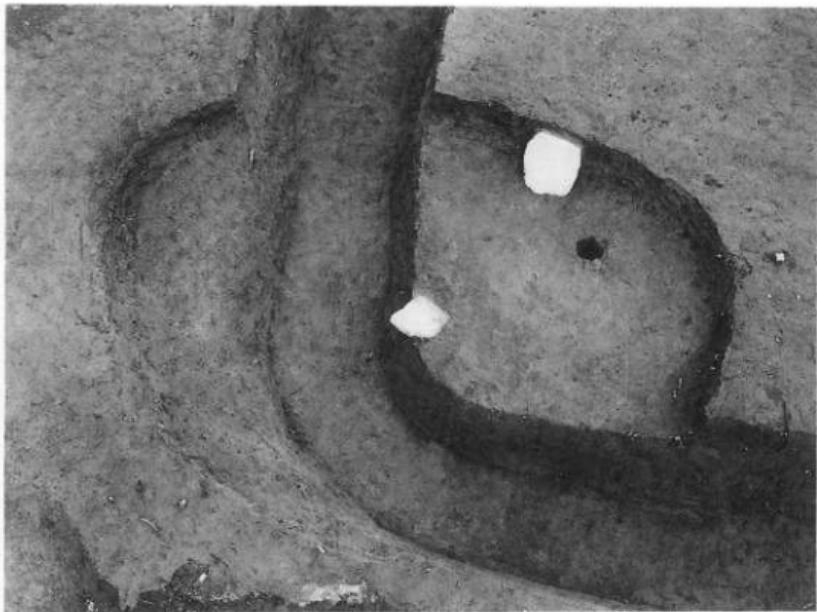
立石第16号住居址



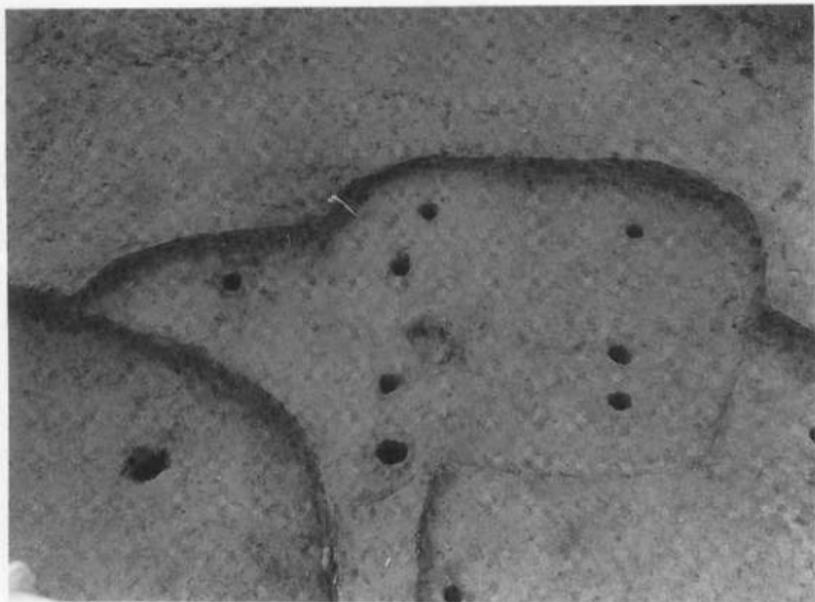
立石第17号住居址



立石第25号住居址



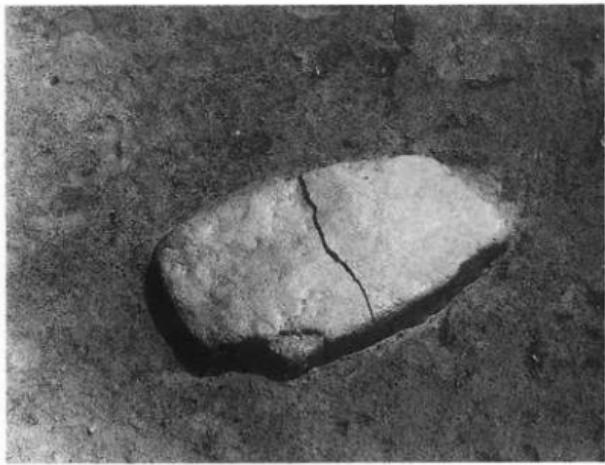
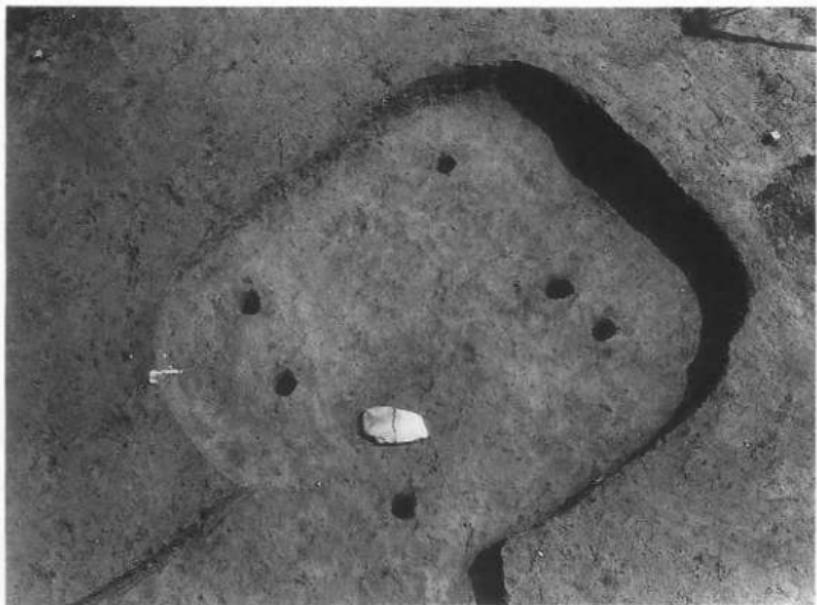
立石第26号住居址



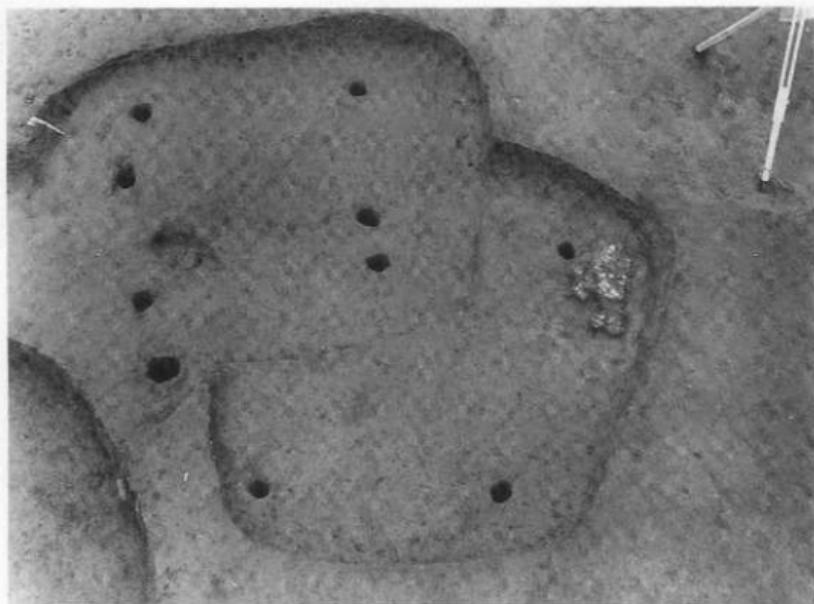
立石第28号・27号・29号住居址



立石第27号
住居址セクション



立石第27号住居址



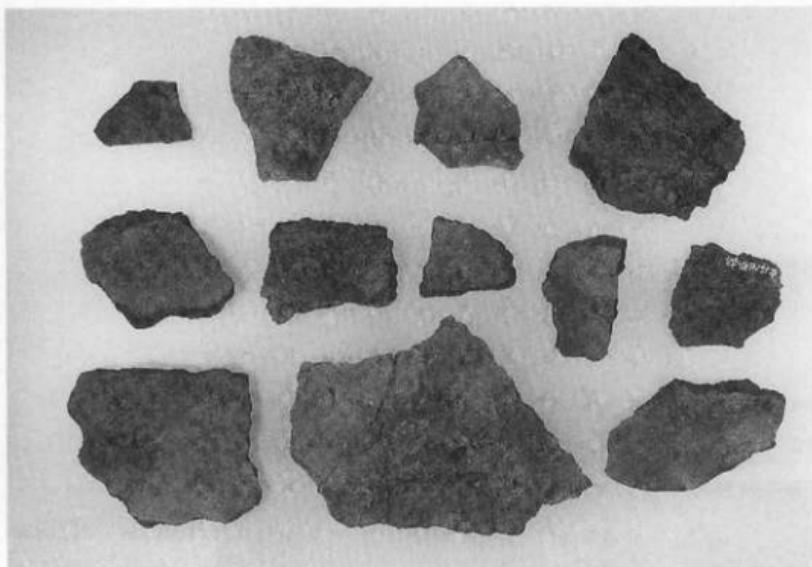
立石第27号・29号住居址



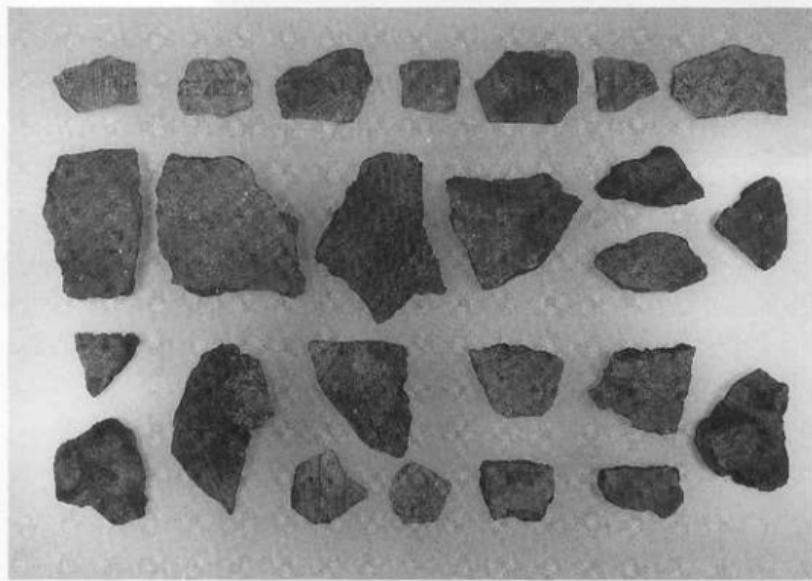
立石第29号住居址



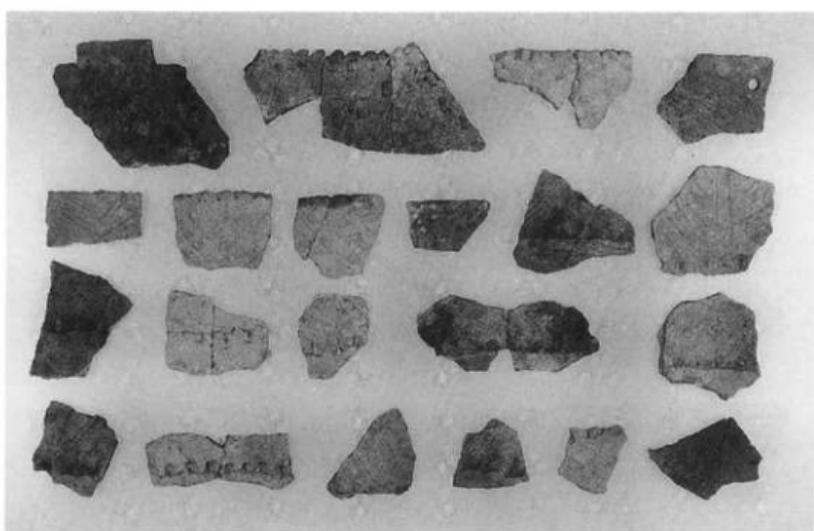
立石第30号住居址
石皿出土状况



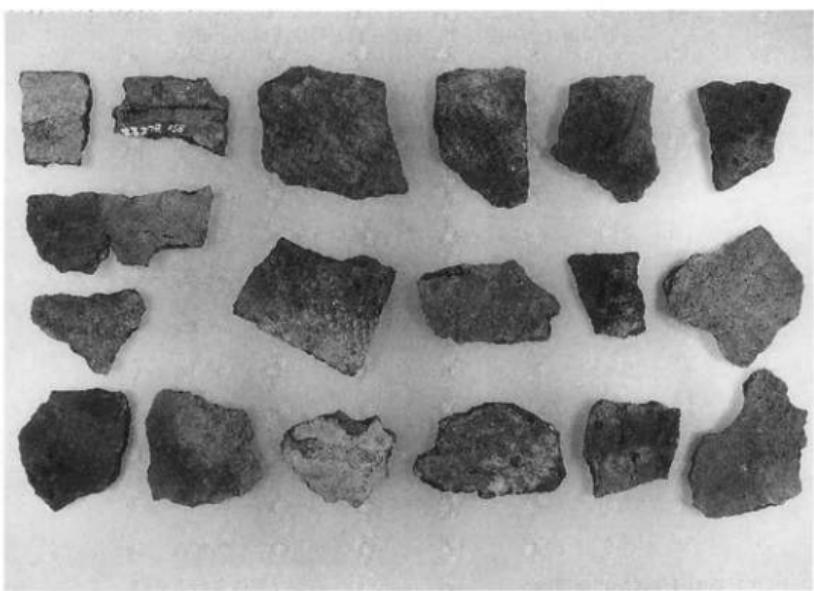
立石第16号住居址出土遗物



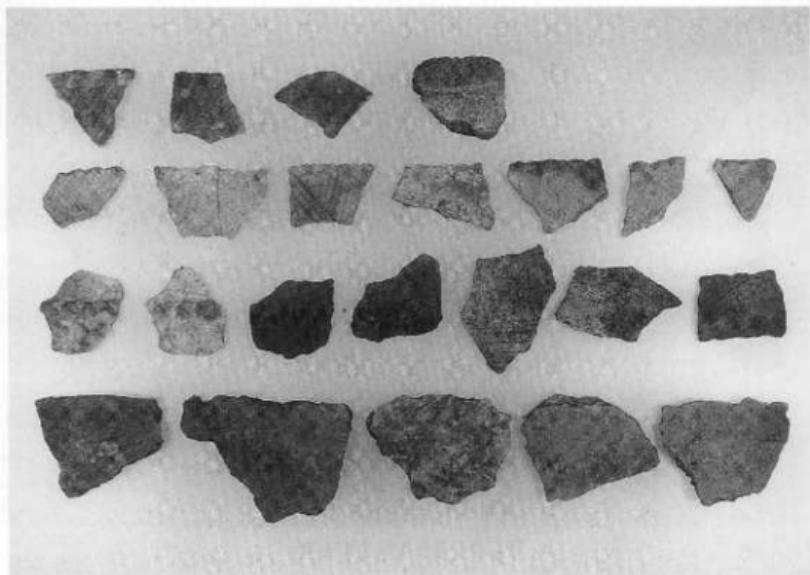
立石第25（上二段）、26（下二段）号住居址出土遗物



立石第23号住居址出土遺物



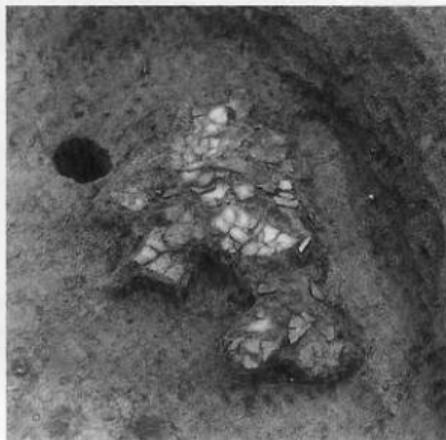
立石第23号住居址出土遺物



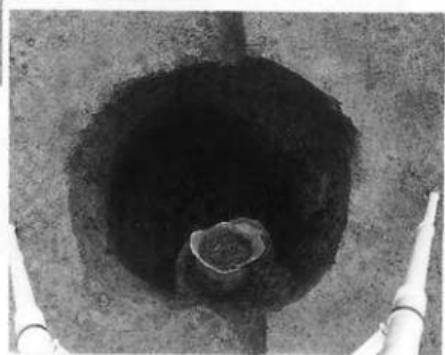
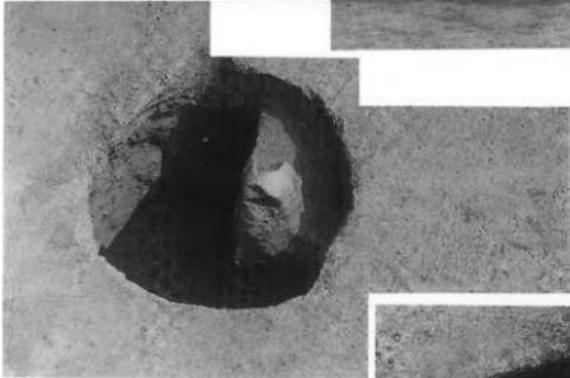
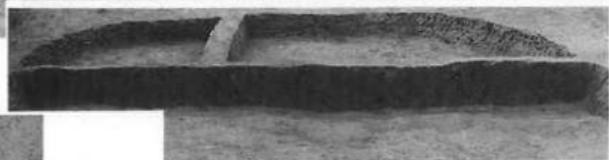
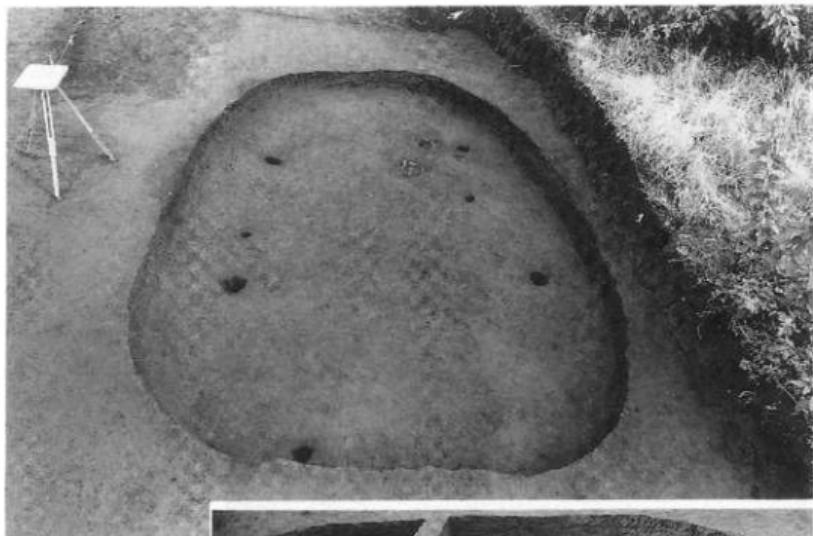
立石第28（上一段）、29（残り三段）号住居址出土遺物



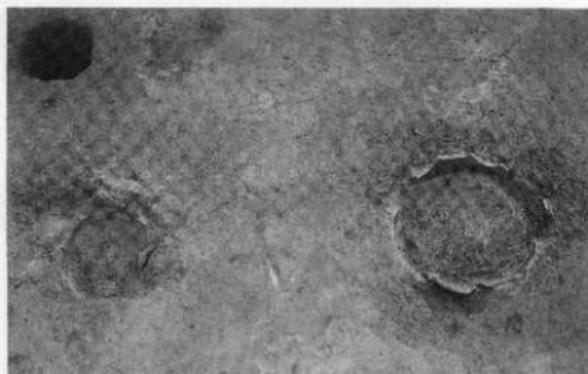
立石第29号住居址出土遺物



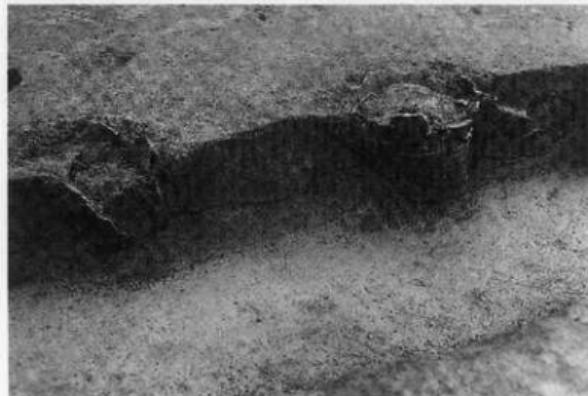
左復元個体の出土遺物



立石縄文中期住居址 J・1号
及び住居址内土壤



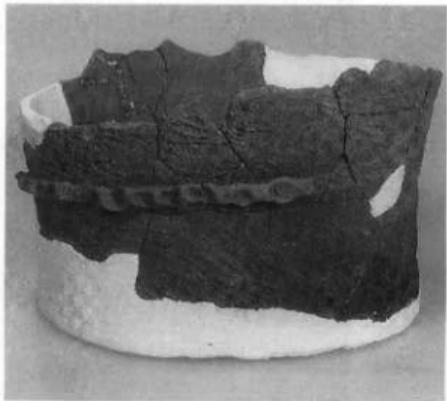
立石繩文中期 J・1号
炉・上面



炉・断面



手前・扁平Ⅲ A期



立石縄文中期住居址 J・1号出土遺物



立石全影



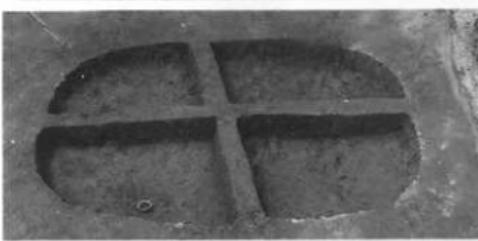
立石住居址（S1号・15号・21号・22号）



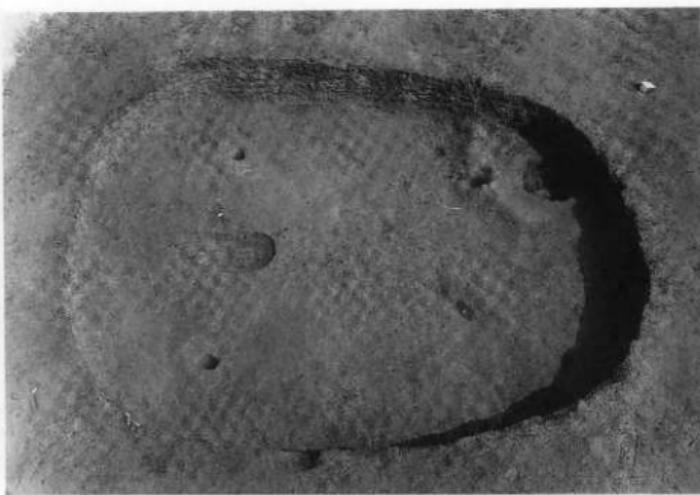
立石住居跡（1号住居址）



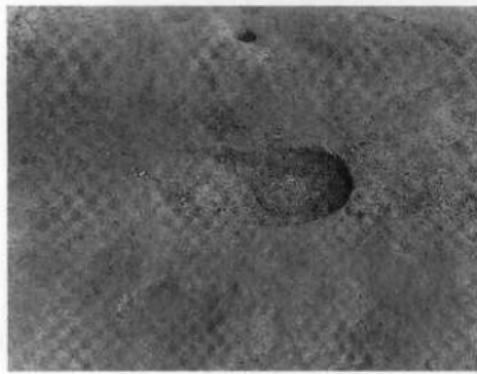
立石住居址
(第4号・手前第2号)



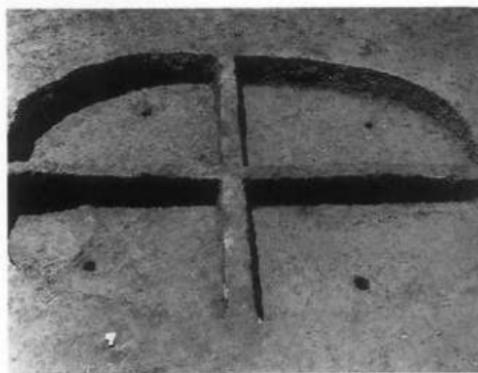
立石第4号住居址セクション



立石第3号住居址



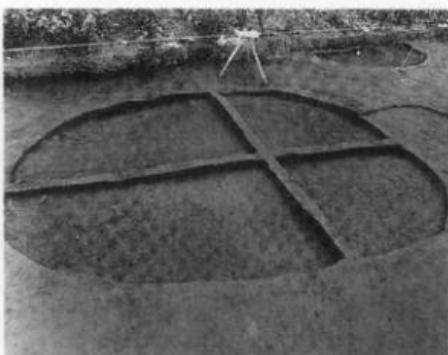
炉



立石第5号住居址

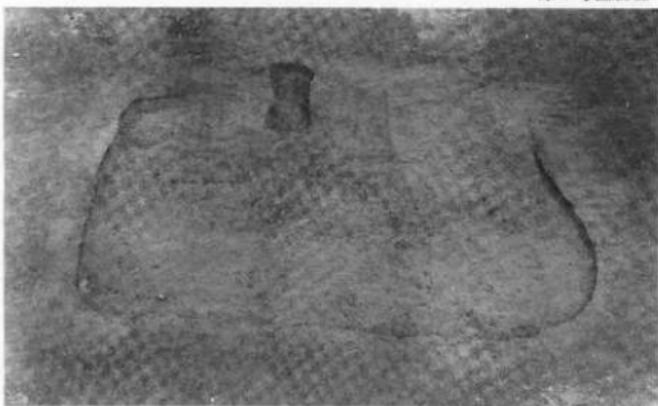


立石住居址
(第7・8号住居址)



第7号住居址

第8号住居址



立石住居址
第9号住居址



第10号住居址

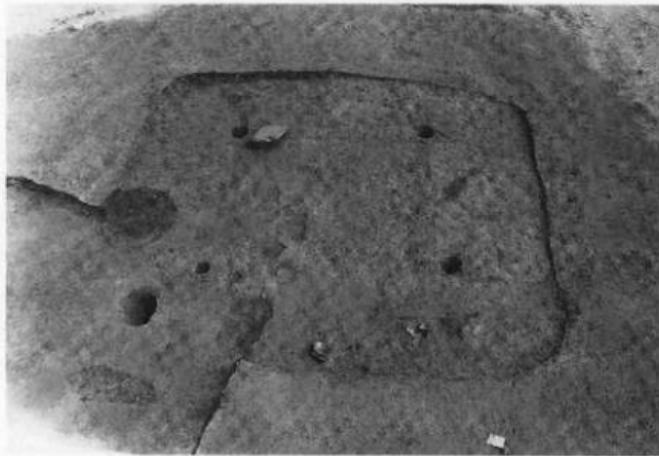


第11号住居址



第12号住居址

立石住居址
(第12・13・14号住居址)



第14・13号住居址



第14号住居址



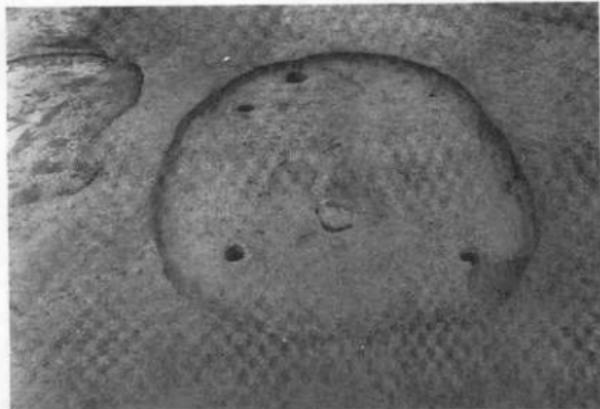
第10号住居址遺物出土状況



第13号住居址遺物出土状況

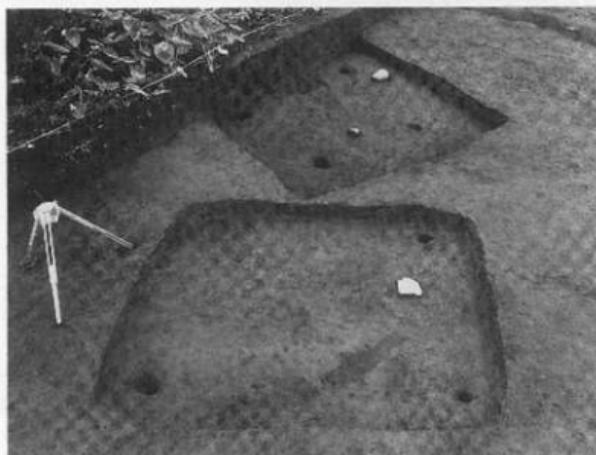


立石第18号セクション



立石住居址
(第15・18・19号住居址)

第15号住居址



第18号住居址



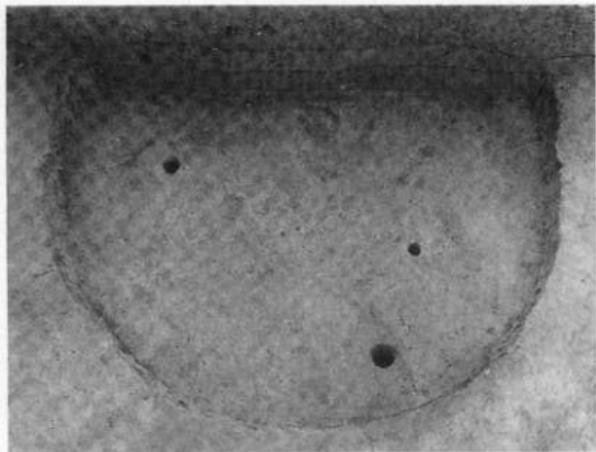
第19号住居址



立石第19号住居址
遺物出土状況



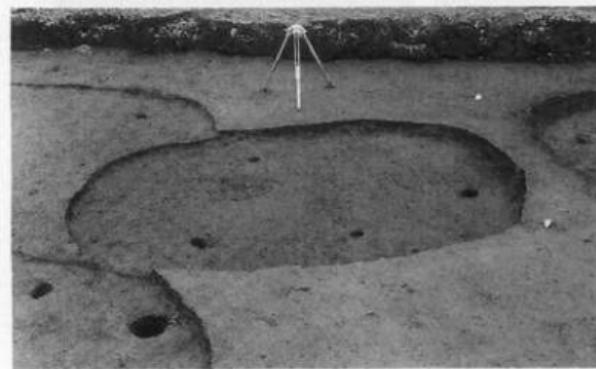
立石住居址
(第20・21・22号住居址)



第20号住居址



第21号住居址

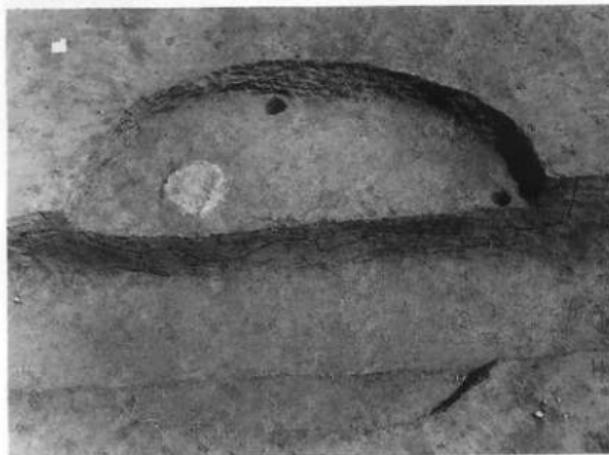


第22号住居址

立石住居址
(第23・24・31号住居址)



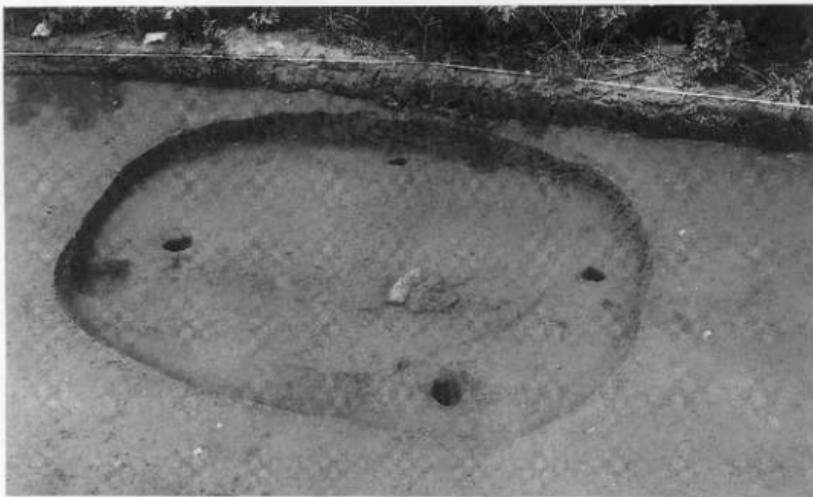
第23号住居址



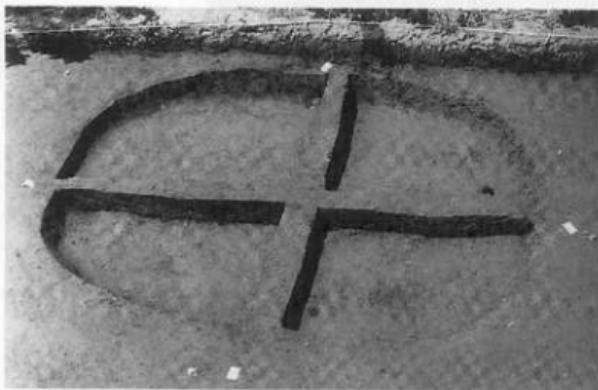
第24号住居址



第31号住居址



宮の上第1号住居址





宮の上第2号住居址
及び出土状況



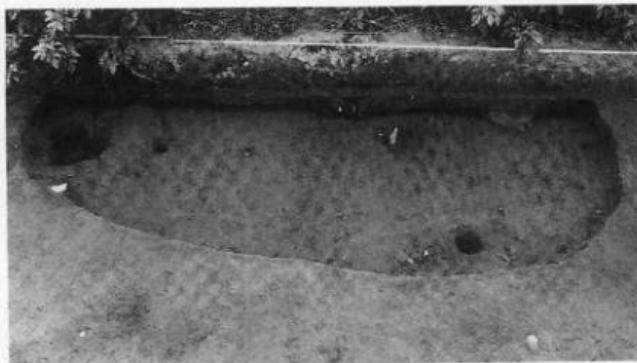


宮の上第3号住居址



宮の上第5号住居址
及び出土状況

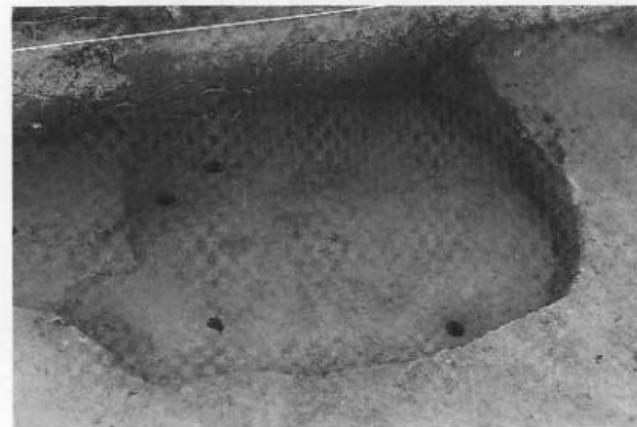
宮の上住居址
(第4・6・8号住居址)



第4号住居址



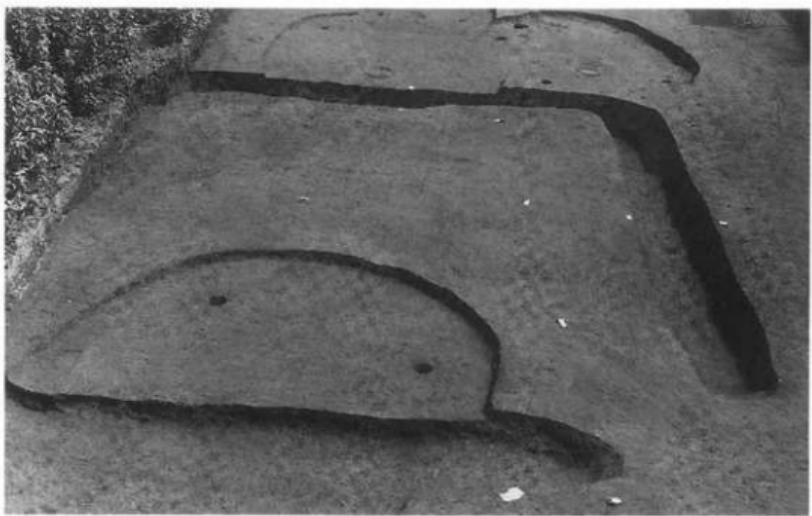
第6号住居址



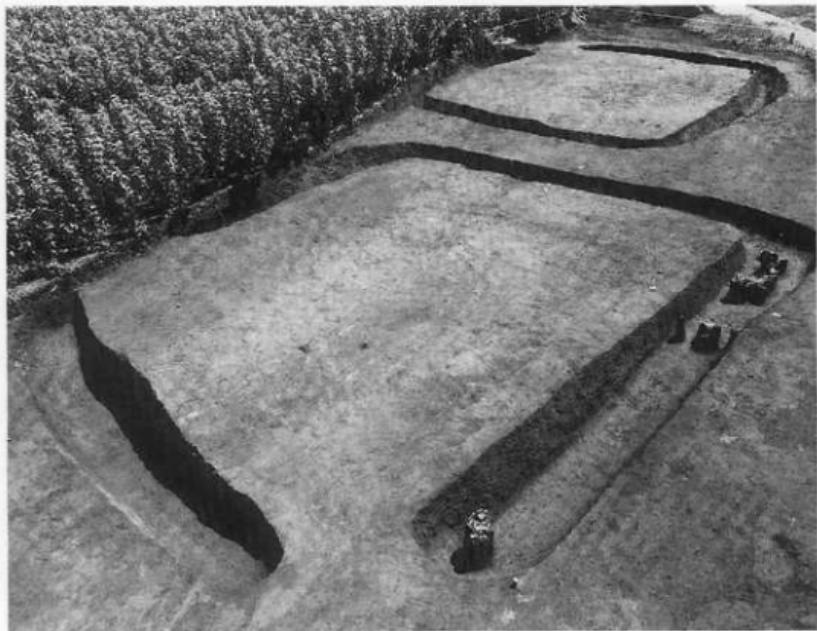
第8号住居址



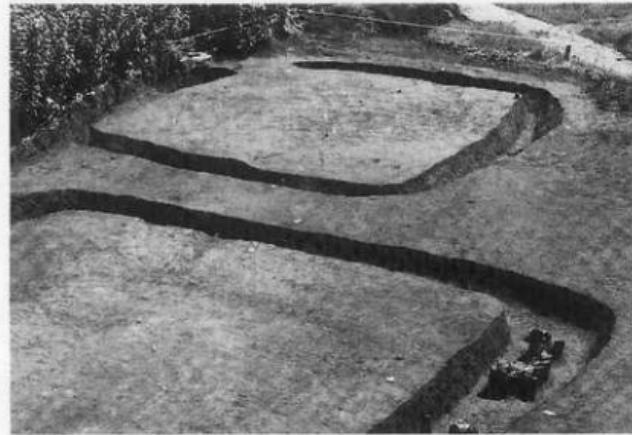
宮の上方形周溝墓遠影

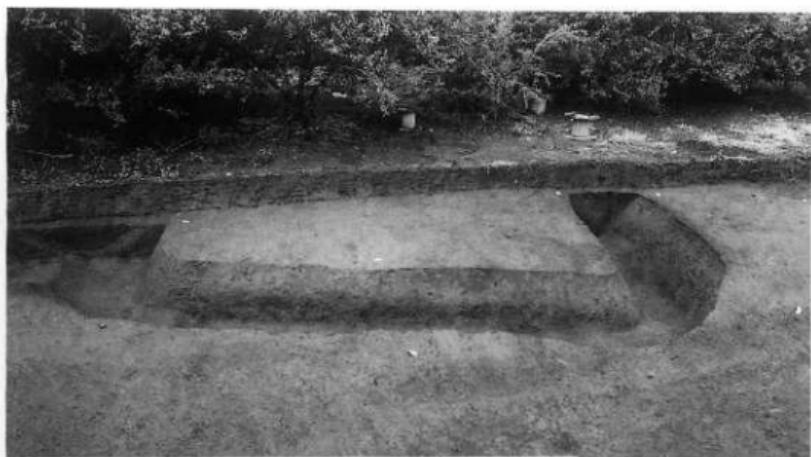


宮の上第1号方形周溝墓

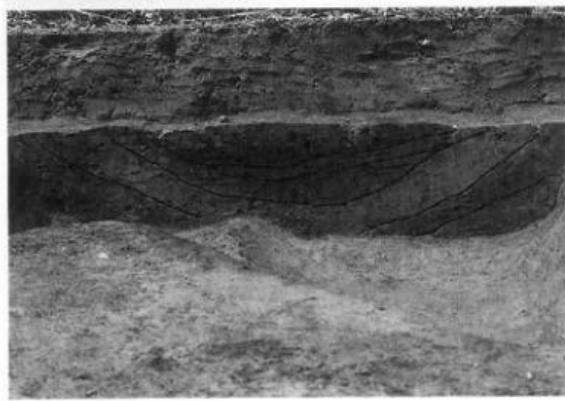


宮の上第2・3号
方形周溝墓



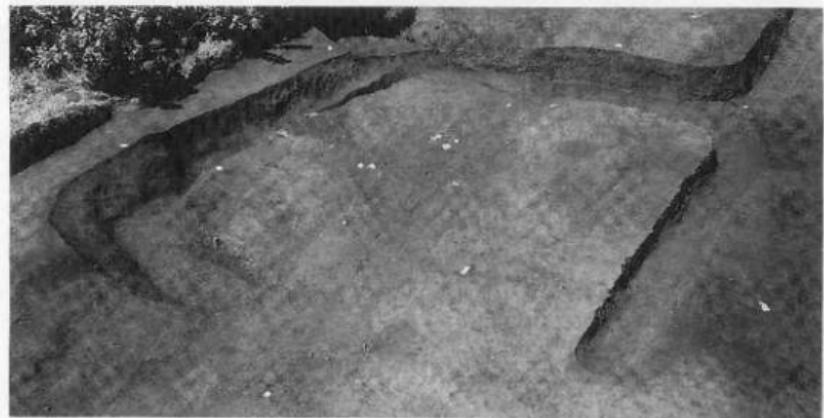


宮の上第5号方形周溝墓

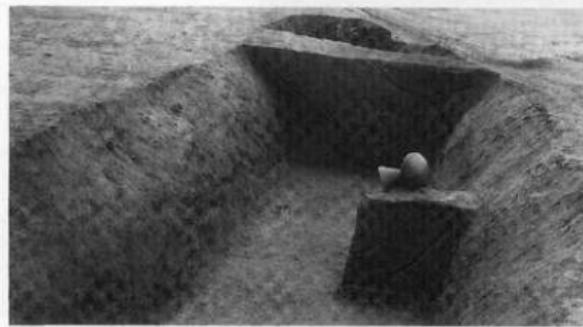




宮の上第6号方形周溝墓



宮の上第7号方形周溝墓

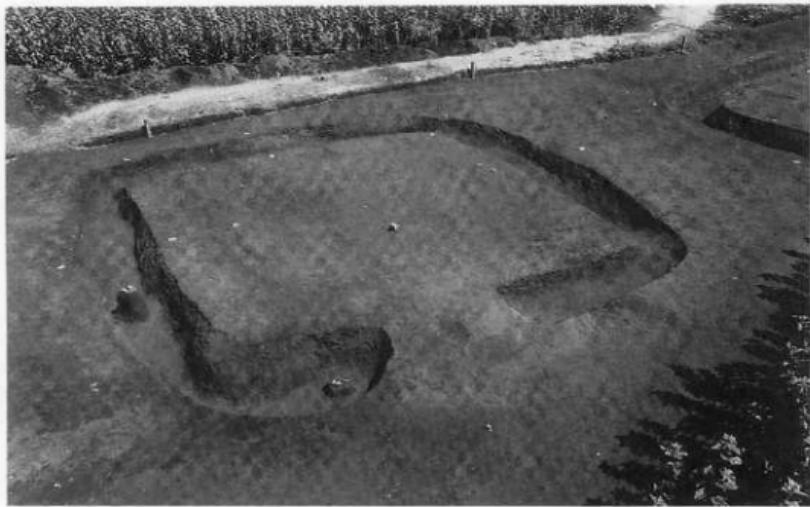


第6号遺物出土状況



宮の上第8号方形周溝墓





宮の上第9号方形周溝墓





1 第1号住居址出土



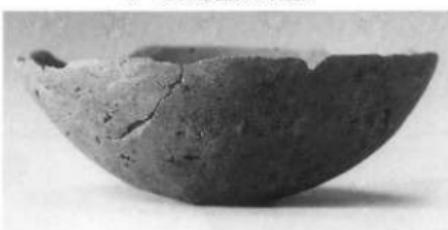
2 第10号住居址出土



3 第10号住居址出土



5 第13号住居址出土



4 第10号住居址出土



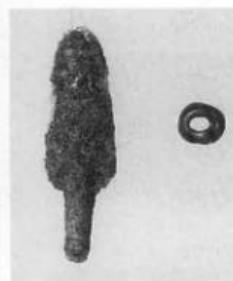
6 第13号住居址出土



7 第19号住居址出土



8 第19号住居址出土



9 第2号住居址出土



10 第2号住居址出土



11 第5号住居址出土



12 第5号住居址出土



11 b



13 第5号住居址出土



13 b



14 第5号住居址出土



15 第5号住居址出土



16 第3号方形周溝墓出土

17 第3号方形周溝墓出土

21 第9号方形周溝墓出土



18 第9号方形周溝墓出土



20 第9号方形周溝墓出土



22 第9号方形周溝墓出土



19 第9号方形周溝墓出土



23 立石第31号住居址出土

報告書概要

フリガナ	タテイシ・ミヤノウエイセキ			
書名	立石・宮の上遺跡			
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第110集			
編集者名	小林広和・里村晃一			
発行者	山梨県教育委員会			
編集機関	山梨県埋蔵文化センター			
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3016			
印刷所	(株) 島南堂印刷所			
印刷日・発行日	1996. 3. 20	1996. 3. 25		
タテイシ・ミヤノウエイセキ	所在地	山梨県東八代郡中道町下向山小字宮の上		
立石・宮の上遺跡	50000分の1地図名・位置・標高	甲府	北緯 35° 35'	
			東経 138° 30' 20"	
				標高 390m
調査概要	主な時代	旧石器時代、IV下層・V~XI層・X層?、縄文前期~中期、弥生時代末、古墳時代		
	主な遺構	旧石器時代、石器集中区3ヶ所 縄文住居址(前期初頭7軒、中期1軒)土坑2基 弥生住居23軒 弥生方形周溝墓7基 古墳住居6軒 古墳方形周溝墓2基		
	主な遺物	旧石器時代(V層からIX層への移行期のナイフ形石器群)縄文前期 (木島系土器)弥生時代(双口土器)古墳時代(垂下口縁壺)		
	特殊遺構 遺物			
	調査期間	1980. 6. 15~1980. 12. 30 1981. 6. 15~1981. 12. 30		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第110集

タテイシ・ミヤノウエイセキ 立石・宮の上遺跡

印刷日 1996. 3. 20
 発行日 1996. 3. 25
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 発行所 山梨県教育委員会
 印刷所 (株) 島南堂印刷所

